動物と震災

動物を通じて震災と命を考える。学ぶ。

オープンディスカッション・スタディツアー

里山の荒廃により、日本各地で人と動物の境界が重なり、人々の暮らしは、獣害にさらされています。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故による避難指示で立ち入りができなくなった福島県内の地域では、家族同然に暮らしてきた動物たちを置き去りにしなければならなかった事実があり、人が暮らさなくなった地では、野生鳥獣の増加によるさまざまな課題が生じています。

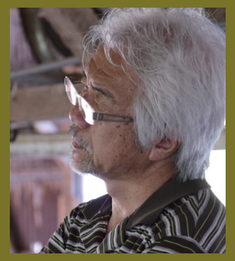
オープンディスカッション・スタディツアー「動物と震災」では、動物と震災の関連を軸に、見たことや感じたことから「いのち」を考えました。

生田武志（いくたたけし）

同志社大学在学中から釜ヶ崎の日雇労働者・野宿者支援活動に関わる。2000年「つぎ合わせの器は、ナイフで切られた果物となりえるか?」で群像新人文学賞評論部門優秀賞。2001年から各地の小、中、高校などで「野宿問題の授業」を行う。野宿者ネットワーク代表。「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」共同代表。「フリーターズフリー」編集発行人。著書に『貧困を考えよう』（岩波ジュニア新書、2009年）、『釜ヶ崎から 貧困と野宿の日本』（ちくま文庫、2016年）、『いのちへの礼儀―国家・資本・家族の変容と動物たち』（ちくま書房、2019年）など。

木村友祐（きむらゆうすけ）

郷里の方言を取り入れた『海猫ツリーハウス』（集英社、2010 年）でデビュー。ほかの著書に、浪江町の「希望の牧場」を取材した『聖地 Cs』（新潮社、2014年）、『イサの氾濫』（未來社、2016年）、『野良ビトたちの燃え上がる肖像』（新潮社、2016年）、『幸福な水夫』（未來社、2017年）がある。詩人の管啓次郎氏の呼びかけではじまった、2020 年までの期限付き文学賞「鉄犬ヘテロトピア文学賞」の選考委員。



管啓次郎（すがけいじろう）

東日本大震災のあとアンソロジー『ろうそくの炎がささやく言葉』（勁草書房、2011年）を編集。また、小説家の古川日出男らと朗読劇『銀河鉄道の夜』を制作し、全国各地で上演した。オランダにおける再野生化の事例を追ったドキュメンタリー映画『あたらしい野生の地リワイルディング』の日本公開を、写真家・赤阪友昭と実現（2016年）。各地での上映会を続けている。2014年に主催したシンポジウム「動物のいのち」の続編「動物のいのち2」を 2019 年 11 月30日に明治大学中野キャンパスで 開催。最新の詩集に『狂狗集 Mad Dog Riprap』。

半杭一成（はんぐいいっせい）

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所の事故のため、飼育していた牛たちを牛舎に残して避難せざるを得なかった。その後、放れ畜の回収作業や死亡家畜の埋設などにあたった。 自身や仲間たちの経験を懸（あがた）の森ファーム理事長として『被災牛と歩んだ700日 東日本大震災における畜産農家の苦悩』（2015年）にまとめている。

号炉
2号炉

day 1 オープンディスカッション

日　時：8月4日（日）18：00〜19：30
会　場：食堂ヒトト（福島市）
講　師：生田武志氏（野宿者ネットワーク代表／「フリーターズフリー」編集発行人）
　　木村友祐氏（小説家／愛猫家）

モデレーター：川延安直（ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局／
　　福島県立博物館学芸課長）

動物と震災

事務局・川延安直

昨年度から福島県立博物館が事務局を務めているライフミュージアムネットワークは、「くらし」と「いのち」を博物館、ミュージアムの視点から考えたいと始めた事業です。今年度最初の事業として、本日のオープンディスカッション「動物と震災」を始めます。

お二人の先生にお越しいただいております。生田武志さんは、『いのちへの礼儀』という素晴らしいご著書を最近出版されました。今まで見過ごしてきた、知らなかったことにページをめくるごとに気づかされる、そんなご本です。

もうお一方、小説家の木村友祐さんです。木村さんは震災後の早い時期から福島に何度かお越しいただいていて、今日は『聖地Ｃｓ』という浪江の牧場を舞台にした小説からいくつかのフレーズを著者自ら朗読していただく贅沢な時間を設けてくださいます。

表現者の木村さん、研究者の生田さん、お二人の目から福島の８年目の状況、「いのち」、「くらし」についてみなさんと一緒にお話していきます。

明日は、南相馬で現場を見るスタディツアーを考えています。筑波さん、一言説明をお願いします。

齧られた柱

事務局・筑波匡介

こちらは福島県立博物館から持ってきた牛舎の柱です。レプリカです。南相馬の人たちは、原発事故で避難をせざるを得なくなって、牛はそのまま残された。柱に繋がれたままの牛たちは食べるものがなくなり、空腹でこの柱を齧ったと聞いています。その齧られた柱です。上の方がもともとの柱の寸法で、それがかなり細くなっているのが見てとれます。牧場主さんも人に知られていなかったこういった事実をどうしても伝えていきたいとの考えで、我々としては協力といいますか、参加させていただきこのレプリカを作るに至りました。

川延

ありがとうございます。動物の命と震災との関りの象徴のようなレプリカです。これを頭に置いて今日のトークを始めていきます。生田さんからお願いいたします。

『いのちへの礼儀』

生田武志

みなさんこんにちは。生田といいます。よろしくお願いします。今紹介していただいたのですが、『いのちへの礼儀』という動物の本を書きました。僕自身は33年前から大阪の釜ヶ崎で、主に日雇い労働者や野宿者の支援活動をしてきました。今でも現場の活動家ですし、長らく日雇い労働者としても生活してきました。そんな人間がなぜ動物と震災という問題についてお話しするかということを、お話ししていければと思っています。

そもそも釜ヶ崎は、ぐるりと回って30分ぐらいの場所に今でも400人ぐらいの人が野宿していて、かつては年間200人、300人がそこで死んでいるという状況でした。餓死、凍死、病死があった。その悲惨な状態について自分で何か支援活動ができないかということで入ったのですが、入ったと同時にこの釜ヶ崎が、他の社会を相対化するある種の可能性を持っているのではないかと感じ始めました。悲惨さと可能性の二つの釜ヶ崎があったのです。それがどんな感じか、映像を見ていただきます。最初自己紹介がてら僕たちが作ったＤＶＤを10分ほど見ていただきます。冒頭の子ども夜回りのところを見ます。

音声１

その結果、野宿者に対して怖くて汚いと感じていたり、中には唾をかけたり爆竹を投げつける子どもがいることを知ります。そこで子どもたちに野宿する人の事情をきちんと知らせる必要があると考えたのです。でもそれがどうして夜回りになったのでしょう。

ある種の助け合いが広がっているのです

生田

今の映像は釜ヶ崎で子どもたちがおにぎりを作って学習会をして、子どもたち自ら出かけていって、野宿の人に声をかけるというものです。ここの子どもたちの中には、自身がネグレクトとか虐待で家庭にいられなかったりする子もいます。釜ヶ崎の悲惨な状況の中で、ある種の助け合いが広がっているのです。子どもたちが野宿者を助けるだけではなく、野宿の人たちが子どもたちを助けることもあります。

よく釜ヶ崎であるのですが、小ちゃい双子を連れた女性が釜ヶ崎を歩いていると、野宿の人とか日雇いの人がやって来て、「どこに行くの」って話しかけて、「どこそこに行きたい」と言ったら、親切に道を教えてくれる。子どもたちに「これでなんか食べなよ」と言って、お小遣いをくれる。その人は釜ヶ崎を10分ぐらい歩いている間に合計2,000円にもなったといいます。その人がこんなことは他の町では絶対ありませんって感激していました。釜ヶ崎って小さい子どもたちがいるとみんながやって来て助けるような町でもある。

例えば、片手を失った障がいを持つ人がいろいろな事情で家を出てきて、釜ヶ崎近くにあるテント村にさまよい込んだ。そしたらテント村の人たちが出てきて、どうしたって声をかけて、事情を聞く。これ食べなよって食事を渡す。空いているテントがあって、今使えるからそこに住んだらどうだと住んでもらう。で、その翌日は生活相談のために僕のところにその人を連れてきたこともありました。つまり困っている人を放っておけなくて、野宿しているけど自分の身銭を切ってでも、その人を支えるという感覚です。これほとんど、困っている人同士が助け合うというある種のユートピア状態ですね。

災害ユートピア

これについては、もしかしたら被災地と似ているかもと思うことがあります。有名な本でレベッカ・ソルニットの『災害ユートピア』というのがあります。ご存知の方もいるかと思いますが、大地震や大洪水、テロなどの大きな災害が起きた時に人々が相互扶助に助け合うことが様々な事例で明らかになっています。

内容を引用すると、地震や爆撃、大嵐などの直後には緊迫した状況の中でも誰もが利他的になり、身内のみならず隣人や、見も知らぬ人々に対してさえ、まず思いやりの行動をします。「大惨事に直面すると人間は利己的になりパニックに陥り、退行現象が起きて野蛮になるという一般的なイメージがあるが、それは真実とは程遠い。第二次大戦の爆撃から洪水、竜巻、地震、大嵐にいたるまで惨事が起きた時の世界中の人々の行動についても何十年も綿密な社会学的調査の結果がこれを裏付けている」。例えば1906年、100年以上前のサンフランシスコ大地震のあと被災者の女性の一人が野宿していた公園でテントを使って他の人たちのために炊き出しを始めました。すると周りにいる人たちが協力して、被災地のあちこちからガスコンロなどの機材を集めて、数百人分の食事を提供することになりました。そこではそれまでまったく見知らない人同士だった人が友人になって、惜しみなくものを分け合ったのです。

英語のホームレスと日本語のホームレス

こういうことが起こるにはいくつかの理由があります。一つは災害直後にはそれまでの社会的な階層の違いとか、格差がほとんどなくなっている。被災直後には、すべての人が被災者としてある程度まで平等になります。もう一回引用すると「災害直後には人々が互いに対し、連帯感と共感を持つが普段はそうではない。彼らが広場や公園に集まってきて、調理用ストーブを通りに引っ張り出して、すぐ調理する。支援物資の列に並ぶ時、彼らの周りの壁が文字通り崩れ落ちていて、互いがすぐ手の届くところにいる。彼らはみな同じ厳しい地震を生き延びてきた。彼らは同じ社会のメンバーで同じ災害に脅かされたのだ。」

災害ユートピアという言葉はわりと知られていますが、実は野宿の現場でもユートピアがあるのです。英語では被災者のことをよくホームレス（homeless）と呼びます。例えば津波の後で海外の報道を見てみると、日本は津波の結果何千人がホームレスになったと報道された。英語のホームレスと日本語のホームレスはまったく意味が違って、家を失ったこと全般を指す。地震による被災で家を失った人もホームレスだし、いわゆる野宿の人もホームレス。そして、「災害ユートピア」は野宿の現場でも被災の現場でも同じように見られるのではないかと感じることがあります。

必要とされていることを全力で

これは僕自身の経験でもあります。2011年の東日本大震災のあと、僕は宮城県に４回ボランティアに行ったのですが、最初は震災直後の４月ぐらいで、その後、家屋もほとんど津波で流された漁村に泊まり込んで活動していました。そこでいろいろなことを感じました。印象的だったことの一つは、今必要とされていることを全力で行うしかない単純明快さでした。つまり、炊き出しとか、優先して行うべきことがはっきりしている。そこにいる人たちが無償で行動をともにしています。被災から１ヶ月経って、被災生活の中でいろいろな軋轢は生まれていましたが、それでも日常の世界、日常の社会と

はまったく違う空気が被災地にみなぎっていました。釜ヶ崎からもいろいろな人がボランティアに来ていて、一緒に活動しました。釜ヶ崎って、対立が結構激しくて、ふだん、人間関係は緊張することが多いんです。

日常の社会こそ一種の災害

ですが、被災地にいるとそれがまったくなくなって、不思議なほど自由な空気で活動できる。つまり被災地で活動している限り、個人的なしこりとか活動の対立とかは消えていく。僕は一週間ぐらいそこに泊まりこんで、大阪に戻ったんですが、被災地から帰るたびにいつもかなり鬱状態になりました。それは、またしがらみだらけの場所でやっていくことになるのかという気持ちの重さです。もしかしたら、被災地に来た他のボランティアも自分の日常に帰る時、似た感覚を持ったかもしれないと思うことがあります。奇妙なことですけど、被災地から日常の生活に戻るのは、そういう意味でストレスでした。被災地の中に災害ユートピアがあるとすれば、逆に日常の社会こそ一種の災害ということです。

これも『災害ユートピア』から引用すると、「日常生活はすでに一種の災害であり、実際の災害は私たちをそこから解放するということである。人々は日常的な苦しみを背負っているが、通常それは個人的にバラバラに起きている。通常と災害の従来型対比では日常生活に頻発するストレスと、それによる個人的、または社会的影響のほうは常に無視されるか軽視されてきた。」

やるべきことができない人々

とは言え、もちろん被災地はユートピアではありませんし、野宿の現場もユートピアではありません。僕が経験した中で印象的だったことの一つは障がいを持っている人でした。被災という緊急事態の中で、障がいを持つ人や外国人が置き去りにされることが阪神淡路大震災の頃にもありました。つまり、やるべきことができない人々、そしてペットや家畜などの動物たちはたびたび軽視され無視されています。

僕がしばらく暮らした宮城の漁村では、村の人たちやボランティアが復旧作業に明け暮れる中、自閉症らしい男性の家が土台だけ残して全部流され、その人は土台だけの家の周りをグルグル朝から晩まで歩いていました。僕は何かを探しているのかなと最初は思っていたんですが、何日もいると、その人が毎日朝から晩まで自分の家のあたりをグルグル回っていることが分かりました。

僕たちは海に行って牡蠣のタネ付けなどの作業をします。村では集会所で作った食事を全員で食べる。で、食事の時間にその男性が集会所に来るとご飯を作っていた女性が僕たちには「ご苦労様」って言うんですが、その男性には、「みなさんが一所懸命働いているのにあんたは食べる時だけ一人前か」って言っていました。僕らはなんかいたたまれない気持ちになったけど、その男性は何も言わずにご飯を食べて、食べ終わるとまた自分の家の周りをグルグル回っていた。もともと、その人は村の中で居場所がなかったのかもしれません。しかし、地震と津波によって、物理的な家ども自分の居場所がなくなったみたいでした。こうした例はおそらく各所であったと思います。

被災ペット問題

そして、障がい者と似たように被災地の中で取り残されたのは動物たちです。1995年の阪神淡路大震災、それから2000年の三宅島噴火、2004年の新潟県中越地震でもやはり被災ペット問題が起こっていました。阪神淡路大震災は我々にとっては身近な問題ですが、そこでボランティアで活動した香取章子さんがこう言っています。「地震の直後、被災地を犬が走り回る光景が見られました。街路樹やネットフェンスに繋がれて鳴いている犬もずいぶん目にしたのですが、家族がどうなってしまったのか胸が痛む光景でした。災害に見舞われた時、ペットのいる人は赤ちゃんがいる人と同じように災害弱者となりかねません。ペットは今や家族の一員のみならず社会の一員でもあるのです。」

ペットは「家族の一員」だけれども、被災の現場では「社会の一員」として扱われなかったと言われています。これが1995年の段階での話です。数年前に熊本で地震が起こった時に被災ペットの問題に取り組んだ徳田竜之介動物病院の医院長はこう言っています。「『ペットは家族の一員』から『ペットは社会の一員』という認識の転換が必要ではないか。」つまり家族の一員として扱われて可愛がられたペットが、被災の現場では放置されていて、社会の一員として扱われていない。これが今後日本各地で様々な災害が予想される今、私たちが動物について考えるべきテーマの一つなのかもしれません。

1万頭の犬が犠牲になった

これが福島の中で大規模に起こったのです。地震でおそらく福島県だけで1万頭の犬が犠牲になったと推定されています。当然猫も同じような数が犠牲になったはずです。原発の事故にともなうペットの置き去りも大規模に起こりました。東京電力福島第一原発10㎞圏内では3月12日早朝に、20㎞圏内では、夕方に住民が避難を強いられましたが、その際多くの住人が「数日で帰れるから」、「避難所にはペットは連れていけない」などと言われて、ペットを家に置いて避難していました。車がなくて連れて来られなかったとペットを家に置いていく人もいました。そして避難所でも被災ペットの行き場がなくなる事態が起こっていました。

福島県の避難所の多くがペット禁止だったため、新潟など他の県の避難所にペットを連れて移らざるを得ない人もいました。第一原発20㎞圏内では約2万7、000世帯、7万8、000人の人々が生活していました。そこではだいたい1万頭程度の犬がいたと試算されています。その中で、買い主と一緒に避難できたのは約300頭でした。福島県では、犬は7、000頭、猫も同程度が20㎞圏内に取り残されていると推定されています。被災地で置き去りにされ鎖に繋がれたままの犬や、室内飼いの猫が身近にある食糧が尽きると、次々と餓死していきました。屋外で飼われていた猫、避難の際に鎖が外された犬たちも餌のない無人の町で、自力で生きていかざるを得なくなりました。

救出できたのは14%程度

そうした中、日本全国からボランティアが集まって自費で餌を買い集め、仕事を休んで20㎞圏内に通い、捕まえた犬や猫たちの買い主探しと譲渡活動を続けました。飼い主から依頼があれば家に行って連れだすか、捕獲機を使って動物たちを捕まえ、それができない時は餌や水を置いて、次の機会に繋げます。こうしてボランティアによって保護された犬と猫の数は2、000頭以上とされます。それでも20㎞圏内に犬が7、000匹、猫が同じぐらいだとすれば救出できたのは14%程度ということになります。

牛舎に繋がれたまま

これは20㎞圏内でのペットの問題だったのですが、20㎞圏内には犬や猫などのペットの他、牛や豚、鶏などの家畜も多くいました。震災前の20㎞圏内にあった農家戸数と家畜数は牛が約300戸で3、500頭、豚が約3万頭、鶏が約44万羽とされています。ただ、ペットは家から離れて生きることができますが、家畜は基本的に牛舎やケージに閉じ込められ、そこから出ることができません。畜舎に閉じ込められた動物たちは次々と脱水し、餓死し始めました。数万頭の豚たちは雑食性であるため、衰弱した仲間たちの肉を食べるなど凄惨な状態になっていました。また、鶏が詰め込まれたケージは停電したために換気扇が回らず、有毒

のアンモニアがどんどん上がり続け、断水によって給水器も止まり、鶏たちは脱水症状で衰弱していきました。そして牛たちも牛舎に繋がれたまま餓死していきました。

全頭殺処分

事故以降20㎞圏内の乳牛は放射性物質に汚染されているとされ、牛乳を出荷することができなくなりました。もちろん食肉として屠畜するはずだった豚や牛や鶏も出荷できません。4月24日には福島県は警戒区域内に残る瀕死の家畜を殺処分する方針を発表し、5月12日、国は放射性物質の拡散防止のため警戒区域内の家畜について飼い主の同意を得た上で全頭殺処分する方針を出します。これは行政による被曝動物の「最終解決」というべきものでした。殺処分は、被曝動物の存在を許さないということを意味します。

被曝した意味

そうした中、原発から14㎞の区域で「希望の牧場・ふくしま」が生まれます。希望の牧場では、もともと330頭の和牛を飼育していました。そこの牧場にいた吉沢正巳さんたちが絶対に国の指示には従わないと決意して、他の農家の牛約100頭を農場で預かり飼育を続けることになります。この問題についてはいろいろな意見がありました。吉沢さんたちが被曝した牛を飼育し続けることについて、周囲からは、「被曝していなければ牛たちはとっくに屠畜されていた。なぜ被曝したら可哀想だと助けるのか」、あるいは「ペットとして飼うつもりなのか」という声があったと言います。確かに肉牛として育てていた以上、原発事故がなければ牛たちはとっくに屠畜されて食べられていたはずです。

殺すはずだった牛を被曝したからと生かし続ける理由は何なのでしょうか。吉沢さんはこう言っていました。「家畜でもなければペットでもない。それじゃあ動物園の動物なのか、違うよね。でも俺にも分からない、被曝した牛の生きる意味が。そのことはみなに正直に問わなければならない」。国家が被災地を見捨て、被災した家畜たちを殺処分しようとする時、吉沢さんたちは家畜でもなければペットでもない、動物園の動物でもない、つまり資本の一員の動物でもなければ家族の一員でも、国家の一員でもない、どこにも属さなくなった牛たちと運命をともに生きようとしました。

資本の一員

それはある意味では、国と東京電力という「原子力ムラ」に対して戦いを挑む、人間と牛の在り方だったのかもしれません。ペットの場合は「家族の一員」として家族の中で可愛がっていた。そのペットたちでさえ被災の際には「社会の一員」として扱われずに多くが放置され餓死して死んでいくという現実がありました。しかし家畜である牛や鶏や豚たちは、ある意味では「資本の一員」でした。その資本の一員である牛たちも「社会の一員」としては認められずに多くが殺処分され、あるいは餓死していきました。その中で私たちは人間と動物の関係とは何かということをあらためて考えなければいけないのかもしれません。

自分自身の尊厳と生

被災地で国家によって見捨てられた牛たちと人間たちが出会う時、牛たち家畜たちは私たち人間の在り方を根本から問い直す存在となりました。私たちはその牛たちに対して応答することから自分自身の尊厳と生を確かめなければならないのかもしれません。

先ほどは、「災害ユートピア」の中で社会の在り方が問われるということを言いました。つまり、震災の中で人間と人間との助け合いが広がり、それによって日常の生活の在り方が問い直されるということがありました。もしかしたら「希望の牧場」もそうですが、被災した動物たちを助けようとする人間の在り方は、「災害ユートピア」の中での人間と動物の関係の一つなのかもしれません。その人間と動物の関係は、ある意味で社会全体の人間と動物の関係を問い直しているのではないかと感じることがあります。

社会に対する希望として

僕が活動してきた釜ヶ崎では悲惨な餓死や凍死や病死の中、野宿者同士の助け合いや、また野宿者と子どもたちの助け合いや交流がありました。それは日本社会全体の偏見を問い直して一般社会の人間の在り方、社会の在り方を問い直すようなインパクトのあるものだったと思うのです。それはさっきの子ども夜回りの映像からも見られるのではないかと思います。それと同様に被災地の中で行われた「希望の牧場」をはじめとする人間と家畜たちの関係、あるいは人間と被災ペットとの関係は、その悲惨さと同時に、社会の中で人間と動物の関係を問い直す、さらに私たちにとって社会とは何かということを問い直す一つの大きなきっかけになったのではないかと思います。もちろん被災は大きな傷となりました。僕もその中で活動して、いろいろな思いをしたのですが、その傷は同時にある種の社会に対する希望として作り出さなければいけないと思うこともあります。

それは被災地での障がい者の問題や、動物の問題から問い直すことができるのではないかと思いました。僕の立場は主に野宿者支援として釜ヶ崎で活動していますが、釜ヶ崎の問題と被災地の問題、特に動物の問題を重ね合わせながら、今後自分たちがどう生きていくか、人間と動物の関係をどう繋ぎ直していくか、そのことを考えることはできるのではないかと思いました。今日はそのことを木村さんと一緒に考えながら、みなさんと、我々の社会の在り方、動物と社会の在り方の関係を考えていければと思っています。

事務局・小林

生田さんありがとうございました。情報量がすごく詰まっているお話しでした。みなさんも消化に少し時間がかかると思いますけれど、マイクを木村さんにお渡しいたします。

経済動物

木村友祐

こんばんは。木村友祐と申します。小説を書いております。先ほど生田さんがおっしゃっていました「希望の牧場」に2014年の最初の頃だと思うのですが行きました。もし小説を書けるならそこを題材として書こうと思ったのですが、なぜそこに行こうと思ったのか。一本のドキュメンタリー映画「犬と猫と人間と2」という宍戸大裕監督が撮ったドキュメンタリー映画があります。その中で家畜のことを経済動物という呼び方で言っているのを見まして、とてもショックを受けた。生き物のことをそういうふうに括れること、そのネーミングをする気持ちの、その、なんて言うのだろう、冷たさみたいなものにショックを受けました。

命の現場

そういった被曝した牛たちがどんどん殺処分されていくということに、「希望の牧場」が抗って生かそうとしている。なんかそこに大事な命の現場があると思ったのです。その命の現場をこの目で見なければと思って行きました。すでに「希望の牧場」は本にもなっているし、映画にもなっている。だから僕が行って、それを後追いするような小説、「希望の牧場」の主張を代弁するような小説を書いてもしょうがないと思って、もしかしたら書けないかもと思って行きました。でも実際に行ってみると映像で見るのと現地に行って自分の五感でその牧場とその牛たちと人々を感じるというのはまったく情報量が違う。まず牛の体の大きさに驚く。

普通牧場といったら柵の向こうに牛たちが並んでいるわけですけど、もうすぐ1m前にいるわけですからね、柵も何もなく。その隙間を恐る恐る体を横にしながら通っていく。今思えばよくそんなところを通ったなと思います。まずそこで驚く。糞が堆積していたので、臭いも何とも言えない。堆肥の臭いですかね、簡単に言えば。そういった臭いが充満している。そこで牛たちの世話をしている人たちは、休憩時間に冗談を言い合いながら普通に過ごしている。まだその時には放射能の数値も高かったと思うのですけど。そこでいろいろその牧場の風景に驚き、で、そこで過ごす人たちのことに驚く。それで『聖地Cs』という小説を書きました。読んだほうが早いということもあり、三ヶ所ぐらい読ませていただきます。

『聖地Cs』

『午前中の休憩のとき、仙道さんは「最高のステージが回ってきた」と言っていました。悲愴感とは別のところでやりがいを感じているらしいことにホッとした気持ちになりましたが、もはや通常の暮らしができない状況に置かれていることには変わりがないのです。深刻すぎるために、逆に自分を茶化すユーモアが必要になったのかもしれません。あれは演説の話のつづきだったでしょうか。園田さんに「自分の町はチェルノブイリになったとかさぁ、あんま言わないほうがいいんじゃないの？」と冷静に言われた彼は、こう抗弁して言いました。

「いいの。おれは牛たちと運命をともにするって決めたの。死に方を決めたの。だから、なんにも縛られたくないんだよ。好きなこと言って死にたいの！」

わたしは「希望の砦」のことを、どこかで理想郷のように思っていたようです。でも、実際はそんな簡単なものではありませんでした。矛盾が矛盾のまま、ごろりと放りだされた場所でした。

食事どきの牛たちのことが、また思い出されます。あの熱気。あの迫力。野菜屑を配り終え、ひと息ついたときのことです。わたしがシャベルを置いてスマートフォンで時間を確認していると、背後から、ザッ、ザッ、ザッ、ザッ、という力強い音が聞こえてきました。だれかが床を掃いてくれているとわたしは思いました。手伝わなきゃと思い、振り返ると、みんなはまだシャベルを持っていて、箒で掃いているひとはどこにも見あたりません。すぐに、その音の出所に気がつきました。それは、柵から頭を突きだした牛たちが、溝や通路にこびりついたご飯の残りを、舌でつよくこすりとっている音だったのです。

わたしが頭を洗うわけでもないのにシャワーのお湯をとめなかったのは、泣いていたからでした。「食べたい」という、あたりまえだけれど何よりも切実な彼らの気持ちを、今までわたしはほんとうに思いやったことがあったでしょうか。そこにひしめいていたのは、いずれ屠畜される肉の塊だとか、鈍重で痛みも感じない生き物だとか、そうわたしたちが決めつけている「牛」ではありませんでした。わたしと同じように熱をもち、愛情も恐れも痛みも感じる、生きることに耐えようとする者たちの充満する気配でした。今日の彼らを目のあたりにして、そのときはじめてわたしは、食べたいのに、食べられず、また水も飲めずに、牛舎の柵につながれたまま死んでいったほかの牛たちの思いにふれたのです。木の柱さえ細くなるまで

かじりつづけた形跡もあったという、その苦しみに。』

もう一つ。この場面は主人公たちと牧場の人が休憩の時に話す会話なのですが、ちょっとこの当時はいわゆる被曝した福島の場所がこう見えた、という率直な言葉が入っていて、たぶんここで暮らしている方には聞きづらい、ちょっと腹を立ててしまうような部分もあるかもしれません。ちょっとね、読んでみます。

『「牛を生かすってきめた時点から、無茶なんだよ。けど、やるってきめたからには、つづけるしかなかんべ」

「わたしも、そう思います。ここはありつづけるべきだって。でないと、ぜんぶ、……」

思わず言ったわたしの言葉が、仙道さんの何かに火をつけたようです。わたしの目をはじめてひたと見て、「なかったことになるでしょ?」と言いました。

「おれらの町がなくなったことも、膨大な数の動物が餓死したことも、きれいに片づけて終わりにされちゃう。田んぼがもう、柳の林に変わり果てたここで二度と農業なんかできないし、畜産もできない。出荷できてもだれも買わない。町を背負ってくはずだった子どもたちだってもどれない。その現実を、国も役人も、みんなの目の前から消してしまいたいんだよ。だから、牛を処分しろって言うんだよ。そうやって目に見える証拠をぜんぶなくして、なんですか、ここの土ひっくり返して、とっかえて公園でもつくろうってのかな?」

「もうこんなに復興したんですよぉ、大丈夫、あんなことは忘れて、みんなでオリンピックを楽しみましょうってね」

滝沢さんがそう言って私に笑いかけました。仙道さんは半分に切られたおにぎりに手をのばし、口に入れるわけでもなく切り口を眺めながら、

「ベゴ屋はだれも、好きで牛を殺したわけじゃないんだよ。『逃げろ』と言われたからすぐもどれると思って逃げたし、もどれなくなって『牛を殺せ』と言われたから、どうしようもない、泣く泣く殺すことに同意したんだ。おれに文句を言うやつもいるよ、『なんでお前んとこだけ牛を生かしてんだ』って。おれはその気持ちもよくわかるんだよ。国に逆らったおれんとこだけ、牛が元気なんだから、見てらんないだろう。もうあいつらは、牛なんか飼えないよ。仮設住宅で残りの人生ずっと自分を悔いてさ、補償金の額ばっか気にして、恨みごと言ってくすぶったまま、おっ死ぬんだよ」

そう突き放したように言って口におにぎりを放り込み、指についたごはん粒をなめとる彼の目尻には、うっすら涙がにじんでいました。

「だから、おれはやめるわけにいかないんだ。なかったことには絶対しない。この牧場は国と、あそこの発電所の、喉元に刺さったトゲなんだよ」

その言葉に私は激しく揺さぶられたのですが、ジュンさんがまた口を挟みました。

「でも、牛を殺すのもひとの勝手だとすれば、こんなに高い放射線に汚染されたところで生かすのも、こっちの勝手ですよね。これって、牛にとって幸せなことなんですかね」

それを聞いた仙道さんは、演説とともに議論も好きなのでしょうか、「いいこと言うね」とニヤリと笑ったのでした。

「そうなんだ。どっちにしても、牛を利用してることに変わりがない。利用する範囲において、彼らはおれたちに生かされてるともいえる。でもね、それでも、おれは思うんだよ。利用できなくなったら殺せばいい、というのは、いのちに対する礼儀を欠いてるって。なんの役にも立たなくなったからこそ、利用してきたおれらは、あいつらの面倒をみる責任があるんじゃないだろうか。恩を返していく義務というか……、いや、やっぱ礼儀かな。ここがおれは大事だと思う。なんでかって、おれたち人間の、家畜のいのちに対する態度は、結局、おれたち自身にはねかえってくることなんだよ。棄民、数減らし。牛が殺処分されるように、今おれたちが同じような扱いを受けてるわけでしょ。ちがう?」

メイちゃんが私の膝のうえにのぼってきました。わたしに背中をなでられると、目を細めて見上げてきます。仙道さんや園田さんにたっぷりかわいがられていることがわかります。早速丸くなって寝る態勢をつくるメイちゃんのぬくもりを太ももに感じながら、私は仙道さんの話に聴き入りました。わたしがこの場所に引き寄せられた理由がそこにあるような気がしていました。』

人間というのも「生き物」

「希望の牧場」をモデルにした「希望の砦」という場所を舞台に、これを書きました。ただ、「希望の牧場」の吉沢さんが喋ることをそのまま使ったわけではなくて、自分なりに、何で吉沢さんはこういったことをするんだろう、被曝した牛を生かすんだろうってことを自分なりに考えて、その言葉を、小説の中では「仙道さん」となっていますが、仙道さんの言葉を書きました。

朗読はもうこの二ヶ所でいいかと思うのですけど、動物のことと人間のことは、分けて考えられないと最近強く思っています。なぜかというと、人間というのも「生き物」であって、もしかすれば今の人間のルールというものが、生き物としての人間の僕らを圧迫することもあるのではないかという気がしています。

僕は石牟礼道子さんの『苦海浄土 第二部』の中にある「昨日は、狂うたなぁ、みんな」のくだりを、『聖地Cs』の頭に引用しているのです。これは水俣病の患者の人たちが、一株運動というのかな、加害企業のチッソの株を各自一株だけ買って、大勢で株主総会に出た、その時の大騒動のことを患者の一人が思い出して言った言葉です。

狂わなきゃいけない時

株主総会で、社長たちに向かって患者の人たちが抗議の声をあげた。その翌日だと思うのですけど、患者の人たちが言うのですね。ちょっと読みます。

『「昨日は、狂うたなぁ、みんな」

誰の声だったか、大きくはない、微笑を含んだ声が冷気の中にした。

「ほんに……。思う存分、狂うた……」』

という短いやりとりです。この「狂った」と思われる状況が起きるのは、自分が人としての尊厳を保てなくなった時に、やむをえず社会からはみ出さざるを得ない、もう狂わざるを得ない、という気がしています。だから僕はその「狂う」ということを否定的には見ていないです。むしろ狂わなきゃいけない時があるのではないかと思っています。それは実際に狂うっていうか、〝狂ったように怒る〟でもいいですけども、何だろう、周りから見ればもう平常心を失ったという状態になるのかもしれませんけれども、だけど自分が生き物としてここにいることを守ろうとする時には、そういう局面も必要じゃないかと思っています。

人間のルールやシステムに従うことが絶対ではない。むしろそのルールやシステムが、生き物としての自分たちを苦しめることもある。福島で被曝した動物たちの扱いに、自分たちの姿を重ねて、そういうことを考えることが最近多いです。自分からは以上です。ありがとうございました。

川延

木村さんありがとうございました。拝読して、木村さんが喋っているのか仙道さんが喋っているのか、文章中のボランティアの女性が喋っているのか分からなくなるくらい、一気に読んでしまった。役に立たなくなったからこそ礼儀が必要なのだということとか、人としての尊厳が大事だからこそ狂わなきゃいけないというお話しをいただいた。

生田さん、単純な質問ですけど、著書名のこの「礼儀」。普段、礼儀作法をしっかりしなさいとか躾の時に言われるのですけど、礼儀という言葉はもちろん誰もが知っている当たり前の言葉だけど、そんなに使わない気がします。この著書名になさった時のお気持ちをお話しいただければと思います。

礼儀からしか始まらない

生田

著書名ですけど、これはもう木村さんにほとんどいただいた。今読まれたところにもありましたけど、これが印象に残っていて、編集者と打ち合わせをしていて、これにしようかっていうことで決まりました。

本の中でも触れましたが、フェミニストのダナ・ハラウェイはポリティクスという言葉について言っている。ポリティクスという言葉は、ポリスやポライト、つまり丁重で礼儀正しいこと、良いマナーや相手に対して応答したり、相互に応答しあったりすることと言っている。ポリティクス、政治や社会が可能であるとすれば、それが相互の尊厳を重んじて応答する礼儀から現れるだろう、そういうふうに思いました。あらゆる社会や人間同士の関係、そして動物たちの関係は、そういった意味でのポリティクス、礼儀からしか始まらないということです。そう思い、考えていたことと木村さんの言葉が実感として重なると思ったのです。

川延

ありがとうございます。生田さんは木村さんから読み取ったのですけど、木村さんにとっての礼儀とか尊厳という言葉の意味というか重さ、思いについてもう少しお話しを聞いてもいいですか。

命のことを「資源」と言った時から

木村

さっき読んだところに「礼儀」って出てくるのですけど。わりとあやふやですね、自分の中でまだ考えが固まっていなくて。

確信があって書いたわけじゃないですけど、例えば命のことを「資源」と言った時からもう何かが狂ってきているという気がします。もっと遡って言えば、ものを数えるようになった時からすでにそうだったと言えるのかもしれないですけど、命あるものを数値化してしまう、数量化してしまう。もうそこから始まっているのかもしれないです。何かそこで命というものに対して、生きとし生けるものすべてに対して、何らかの共感のようなものを感じてきた人間の暮らしというものが、そこで何か断たれてしまったような気がする。辛うじて保たれていた命への共感というモラル、そのモラルが動物たちを資源と呼んでしまうこと、あるいは「経済動物」と名付けてしまうことで、モラルを越えてしまったのではないかという気がしています。

ただ命としか呼べないもの

これは単純な言葉の問題ではあるけど、そこにすべての重要なことが現れているのではないかという気もします。動物たちが役に立たない、被曝して役に立たなくなったという局面だからこそ、もう一度、今までただ出荷するための数として数えられていたものが、そこにもうただ命としか呼べないものとして現れてきた時に、どう向き合うかをもう一回ここで考えさせられる局面になったのかな。そこに対して「希望の牧場」の吉沢さんは、その数値化される前のその命を、「役に立たないから片付ける」とはもう言えない。命としか呼べないものを前にした時にどうするかって、やっぱりそれは「礼儀」なのかな。「尊厳」という

言葉もありますけど、命に対する敬虔さを表す意味で、「礼儀」のほうがいいような気がする。だから確信があってじゃなかったのです。

川延

ありがとうございます。経済動物。本当に言葉って冷たく使おうと思えばいくらでも冷たく使えるのだなと思います。お話しを伺っていて、今、福島県立博物館が興福寺さまと会津の在地の仏さまが並ぶ展示室になっているので、ふと思ったのですけど、「山川草木悉皆成仏」と言うじゃないですか。みんなが仏さんだとそう思えば、そこに礼儀は当然必要だし、それを欠けば罰が当たるという発想にすぐなるはず。それがどこかの段階で外れちゃったのでしょうか。私は1961年生まれですけど、その頃は罰が当たると言われて怒られた記憶があります。大事にペットを飼っていたわけでもないですけど、身近に野良犬がいましたね。野良犬に追いかけられるって普通にあった。その頃の感覚はやっぱり今の感覚と違うと思います。生田さんにおうかがいしたほうがいいのか、経済動物が当たり前になってしまったターニングポイントはどこにあったのでしょうか。

動物の福祉や権利

生田

木村さんの本の中でも経済価値がゼロになったから殺すということに対する大きな怒りがある。前に木村さんに直接言ったこともありますけど、経済価値がゼロになったから牛を殺すというのはペットが可愛くなくなったから殺処分するのとまったく同じだと思うのです。ペットが可愛くなくなったから殺処分するというのは到底許されないように、被曝した牛を殺すというのも明らかに許されないと思います。

経済動物の問題ですけど、世界各国で多くの牛、豚、鶏たちが尊厳のない生き方を強いられて、最後は殺されて食べられるということがあるけれども、海外では1960年代から動物の福祉や権利もある程度進んで、かなりの改善があった。でも日本の場合はそれがほとんどない。というか「動物の権利」と言ったら鼻で笑われちゃう状態が続いている。

例えばピーター・シンガーといった動物の解放の運動思想家もほとんど相手にされていないという現実があります。先進国の中ではほとんど日本だけのような、かなり異常な状態です。

肉食を国家政策として導入

振り返ってみると、日本には「生類憐みの令」があって、動物を大事にしようという意思が強かったと思うのです。ですが、現時点ではまったく変わってしまっている。これにはいろいろな理由があったと思いますが、一つは日本には役牛とか一緒に農作業する動物はいたけれども、殺して食べる動物は一切存在しませんでした。

欧米では可愛がって育てて、尊厳をもって自分の手で殺して命への礼儀を払いつつ食べる。ある程度そういったものが定着していたと思うのです。日本ではそういうものがまったくなかった。しかも、明治維新以降、日本は肉食を国家政策として導入します。各家族で家畜を飼って大事に育てて最後に屠畜するというものじゃなくて、最初から近代産業として畜産が導入された。そのため、最初から「資源」「経済動物」として牛や豚や鶏を扱うという姿勢が浸透した。そこでは、大事に育てて大事に殺すといったことがまったく存在しなかったことが大きな要因かと思うことがあります。ここにもいろいろな方々がいますけれど、日本では動物の権利、動物の福祉の問題が進んでいかなければ、動物に対する借りを返せないというか、あまりにも人間の身勝手ではないかという気持ちを持っています。

川延

ありがとうございます。そろそろ会場の方からもお声をいただかないと時間がなくなってしまう。一つだけ質問をお二人にさせていただけたらと思うのですが、数日前に博物館を盲導犬と来館したいというお問い合わせがありました。数日前のことだったので、あらためて盲導犬って何だろうと考えてしまった。あの犬たちはどういう気持ちなのだろうと。今の私のモヤモヤです。どういうふうに接したらいいか。完全にサポートしている生き物なのだと割り切って考えたほうがいいのか、それとも盲導犬と観覧に来られた方のお二人、同じような人が二人入ってこられたのだというふうに考えればいいのか。本音を言うと実際に目の前に盲導犬を連れた方が来られた時に、どう対応すればいいのか戸惑っています。

木村

詳しくは分からないですけど、盲導犬が仕事をしている時は、犬に対して声をかけたり撫でたりしちゃいけないと聞きますね。そのモヤモヤという部分は僕も盲導犬に対しては何となくある。とっても役に立ってくれている。でもずっと仕事状態。仕事をさせられている状態。それに対してうまくコメントできないけど、せめて引退したらちゃんと幸せに暮らせるようになっているといい。そう願うしかない感じですね。

感情奴隷制度

生田

僕も盲導犬のことにはあまり関わっていなくて、みなさんの中に関わっている方がいたら意見を聞きたいのです。確か被災した犬たちの中で殺処分されかねない犬たちを盲導犬にしていく活動がありましたね。もちろん殺処分より盲導犬のほうがいいと思いますが、モヤモヤすると言われたように、僕も何でこんなに人間のために尽くすのだろうと考えちゃう。

一方で盲導犬ではなく一般のペットについても同じ思いがするのです。というのは、ペットは「家族の一員」として可愛がられているけれど、それだけでいいのだろうか。動物解放運動ではペットのことを「感情奴隷制度」だと批判することもある。つまり可愛がる対象として使っているけど、人間の都合で利用しているだけじゃないか、ということです。これは極端な意見かもしれないけど、でも一面の真理は言っているなと思うんです。人間の一方的な思いでペットを感情的に使っているわけですから。それは本当にペットにとって幸せなのか、どうなのかモヤモヤって考えちゃうことがあります。

これはフェミニズムで言われることと並行していて、性産業における女性たちは悲惨な状態であるとよく言われる。ただ、一般の女性、例えば結婚して妻になっている女性は幸せなのかというと、それこそ感情奴隷であったりしているわけです。ある意味、両者の立場は男性中心主義の中での奴隷制度という点では似ていることがある。もしかしたら、経済動物とペットも家庭動物も使い方が違うだけで利用されている点では同じじゃないかと思うことがあります。とは言え、どうすればいいのかということです。というのは犬や猫なんてそもそも可愛がるために作られちゃった存在です。特に犬は今さら野生には戻せない。でも結局のところ我々はそういった、自分たちが作り出してしまった生物の尊厳を尊重してやっていくしかないのだろうと思います。

川延

ありがとうございます。モヤモヤして終わってしまいそうです。もう時間がそんなにないのですが、素晴らしいお二人にお越しいただいておりますので、会場のみなさんからもお尋ねになりたいこと、感想などいただけたらと思います。いかがでしょうか。

役に立つ

スタッフ・猪瀬弘瑛

経済動物という形で牛とか豚を見てしまう。どうして僕らはそういうふうに見てしまうのかを考えてみることも今回の震災後にあったのですけど、自分の中で思ったのが「役に立つ」という言葉。結構気軽に使いますよね。

例えば子どもの時に世の中の役に立つ人間になりなさいとか言われる。役に立つという言葉を気軽に使う時は、何か一つの目的、牛とか豚であれば僕たちのお肉となって栄養となる。そういう役に立つというふうに、何か一つの役に立つ理由に集中して考えて、視野が狭まっているような気がする。

今回、放射線で汚染されてしまって、その後生き長らえさせた牛とか豚さんたち、そういった家畜たちは、お肉という一つの目的だけじゃなく別の意味で役に立っている。育てている人たちの気持ちの役に立っている。原発事故の後、自分たちがどうやって生きていくか、そういう気持ちを支えるという意味で役に立っているような気がする。そういう多様な役に立つということを考えることが、平常時にも必要だと考えます。その点どうですかね。

居続けることが何らかの支えになる

木村

じゃあ僕から。いい指摘だなと思いました。僕らは「役に立つ」ということを普通に言いますね。「優秀だ」とかね。特に動物に関しては、何らかの役に立たないことには人間の社会の中にいられないなって、今のお話しを聞きながら考えました。いることを許されない。社会の中に入れられた動物というのは、何かしらの役割を与えられないことには存在が許されないという気がしました。

確かに被曝しても居続けることが何らかの支えになる。「希望の牧場」で言えば、震災があったということを証言するための動物として。

動物に対する目は人間に対しても跳ね返ってくる

もう一つ、『牛と土』という素晴らしい本があります。何年もかけて被曝した牛たちを守っている人たちを取材した本です。そこで描かれているものは、牛たちはすごく雑草を食べる。だから放射能に汚染されて放置され、荒れるばかりの畑をきれいに整えてくれる存在でもあるということを言っています。

僕がとても感動したのが、牛が食べて排泄して、その土をまた肥やす。そうやって放っておけば荒れ放題になる畑を牛たちが保全してくれている。なんだかもう、牛が土の神さまのように思えてくる。それを読んで、もう本当に感動してしまいました。だからそういう部分でも、被曝したからもうだめ、殺せとは言えない。別の在り方ってあるのです。ただ役に立つことばかりにこだわっていると、動物に対して一面的に役に立つ、立たないの視点で見るのと同じように、人間に対しても、役に立つ、立たないという視点で見るようになるのです。注意しなきゃいけないと思います。今はそれを「生産性」と言って、人の命を計りますね。これは命の選別につながることで、危険なことだと思います。動物に対する目は人間に対しても跳ね返ってくるということを考えながら言葉を用いたほうがいいし、そうした評価軸に巻き込まれないように人の言葉も聞いたほうがいいと思います。

支え合い

生田

二、三日考えないと答えられない問題ですが、僕は先ほどの子どもの夜回りの映像にあった釜ヶ崎の子どもたちと関わっていたのですが、子どもってあまり役に立たないですよね。働くわけじゃないし、ご飯食べるばっかりで。

ただ僕は、子どもには結構好かれたのです。大人には好かれないけど。で、子どもがいなかったら生きていけないなという気持ちを持っています。僕は自分自身の子どもはいないですけど、こういう子どもたちとなら生きていけるっていう思いがある。有用性では人間存在は計れないだろうとよく感じる。たぶん動物についても同じだと思う。有用性というのはそれぞれ生態系とか人間社会とかでお互いに役に立ったり、役に立ってもらったりしているわけで、支え合いなんです。

オーバーキル

動物との関係の問題で言うと、人間が一方的に動物を利用し過ぎているということではないかと思いました。本の中で「オーバーキル」という言葉を度々使いましたが、とにかく人間は殺しすぎる。多くの種を絶滅させましたし、日本の漁業は漁獲高減少が続いて、2010年代の天然魚の収穫は1980年代の半分以下に落ち込んでいますが、それも持続可能な限界を超えた国内外の乱獲のためと言われています。種の絶滅に至る規模になりつつあるんですが、近隣諸国との取り合いになったりしていて、競争がやめられない。

一方で盲導犬がそうですし、動物はなぜか人間のために生きてくれたりする。あまりに人間が甘えているのでないかという気がどうしてもします。

人間と動物の関係を見つめ直すことで人間が何なのかということが見えてくる。我々ってこんなにとんでもない生き物になっちゃったということをよく思います。有用性という言葉でそういうことを感じますね。

川延

ありがとうございます。もうお一人はいけると思いますが、いかがでしょうか。

参加者A

大事に育てて大事に食べる。ある意味それは経済。生産と消費が完結するような単位というのが昔はあった。ファミリアという言葉を使っていらっしゃったと思うのですが、それは近代のファミリーとは違うのだっていうことがすごく印象に残っています。

大事に育てて大事に食べるのはある種の経済活動なのだと思うのですけど、その経済というのはおそらく経済動物の経済とは違う意味ですよね。

今の方が役に立つということの意味も、複数、いろいろな形で役に立つという意味がある。私は教育に携わっていたものですから、子どもたちのことを人材とかって、そういう言い方にすごく抵抗を覚えます。なんだか資源のように言っている。

地震発生
（8月4日19時23分、福島県沖深さ45㎞でマグニチュード6・4の地震が発生）

川延

大丈夫ですか。まだこういう状況なのですね。

参加者A

すいません。まとまりがなくて。自然と繋がるようなのが経済。質問というよりも感想です。今の経済のあり方をこれが正しい経済だと思ってしまう。それからはみ出すと苦しい思いをしてしまう。大事に育てて大事に食べるというのは経済の一つという考え方。

「なめとこ山の熊」

生田

一口に動物を殺して食べるといっても、いろいろな時期があった。人類は生まれてからずっと狩りをして食べていた。そして、家庭で牛や豚や鶏を飼って、自分で育てて自分で殺す肉食の仕方もしてきた。今のように工場で動物を飼って育てる「工場畜産」も一つの畜産の肉食のあり方です。でもこれは、それぞれがまったく次元が違うと思います。

狩りについて、すぐ思うのが宮沢賢治の「なめとこ山の熊」です。あの主人公は熊を狩って生計を立てていて、常に熊に対する負い目がある。ただそれを逃れることはできないという宿命として感じている。最終的に彼は熊に殺されますけど、その時にこれでやっと終わったという解放された思いがあった。

最後に、ご存知のように主人公を囲んで熊たちが輪になって、じっと拝むようにしているシーンがあります。もしかしたら、熊たちはあの後、主人公を食べたのではないかと思うんです。人間がやっているように「悼んだ上で食べる」ということを熊たちはやったのではないか。

痛みを感じている

そういう意味では、狩りというのはどこかで自分が食べられるような責任が付きまとうと思うんです。宮沢賢治の主人公はそれを自覚していた。一方で自分の家で牛や豚、鶏を育てて自分で絞める人たちは当然愛情を持って殺しているので、ある種の痛みを感じている。経済活動ではあるけれども、動物との濃密な関係がずっと続いている。

工場畜産

問題は現状の動物工場で作られている工場畜産です。ご存知のように何万匹、何万羽という鶏、何千匹という豚、多くの牛たちが工場内で育てられている。問題は、殺すこと以前にその生かし方があまりに酷いということです。それはやはり尊厳を無視した生かし方です。1960年以降の資本主義の在り方の中に動物たちが組み込まれてしまった。我々が反省すべき、何としても改善しなければならないのはそこにある。

僕はあらためてこの現状の動物の畜産の在り方を調べてびっくりしました。人間ってここまできちゃったのかということです。そういう意味で、肉食といっても、その経済状態や動物との関係がまったくそれぞれ違うというのは確かなことです。

川延

ありがとうございます。やはり1960年代辺りですかね。もうそろそろ時間ですが、最後にお一人ご質問をお受けいたします。

参加者B

今後、災害に向けてペットの救急隊とか、「希望の牧場」みたいに被災した動物がもっと救われるべきだと思うのですが、そこに対してきっと批判が来ると思う。苦しんでいる人間がいるのになぜ動物を同時に救うのかと。それに対して回答するのは非常に困難。言葉を作っていかないといけないと思う。お聞きしたいと思ったのが、釜ヶ崎の子ども夜回りとかそういうものに対して、批判があったとして、それに対してどのように回答してきたのか。お願いいたします。

生田

いろいろあります。まず、野宿の人って商店街で寝たりする。子ども夜回りでおにぎりを配っています。あれ、地元の商店街の一部の人には大不評なんです。つまり、「あんたらがおにぎりなんか配るからホームレスがうちのところに居つくんや」というわけです。

いろいろな軋轢があります

わからなくもなくて、ごく一部ですけど、おしっこして寝ちゃう野宿の人もいるので、一人そういう人がいるとみんながそう思われちゃう。それ以前に、自分の家の前に野宿の人がいるだけで、実害はなくても偏見があると思うのです。

ずっと僕がバイトをしていた山王こどもセンターは、やはり子ども夜回りをやっていた。そのようすがNHKで放送された。すると地元の有力者が「町内の恥を全国に晒した」と激怒して、こどもセンターがいつも使っていた広場が使えなくなってしまった。地元とはそういったいろいろな軋轢があります。でも、ずっと続けています。

同じ動物なのに

被災動物の問題ですが動物に対する意識はこの数十年で劇的に変化しました。ペットの殺処分は急激に減りました。1980年代には100万匹が殺されていましたが、今は10万匹を切っていて、これは大きな前進です。それはいいのですが、それと反比例するように、尊厳を完全に無視された「資本の一員」である経済動物はますます増えていってしまった。同じ動物なのに、ペットに対する意識と畜産動物に対する意識が離れすぎているのです。これは何としても変えていかなければいけない。

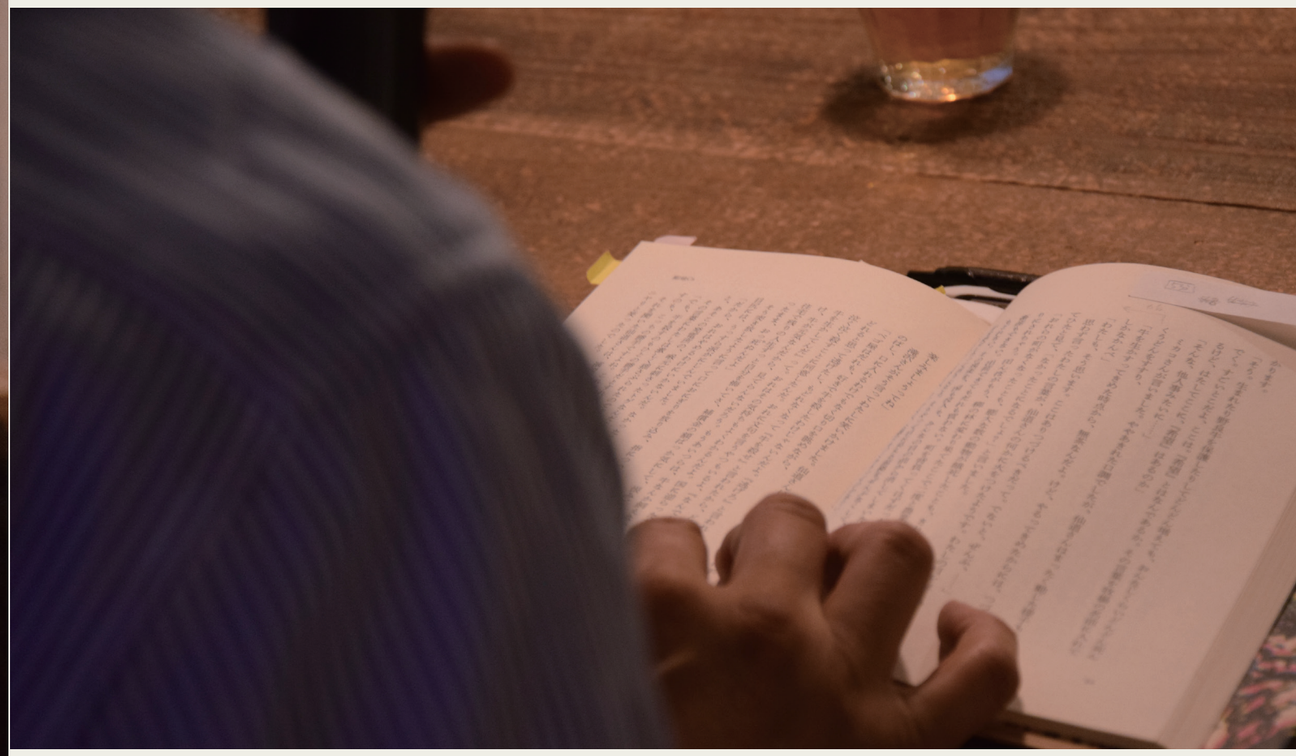
被災の問題については、「ペットも家族の一員なのだから一緒に避難できるようにしよう」という考え方が国家的にも認められて、そういった体制が作られつつある。これもおそらくこの20年における大きな変化だったと思う。でもやはりそれに対して、家畜動物に対する扱い、経済動物の扱いがまったく何も変わっていない。先ほど言ったように、これは日本がかなり独特なのです。日本の動物に対する意識は何とか変えていかなきゃいけない。ペットはここまで変わったのだから、家畜に対しても変わらなきゃいけないと思っています。

さっき言ったように、ペットは本当に幸せかどうか僕には分からないです。でも現実に存在する以上、その生の尊厳をどうやって大

事にしていくか、尊重するかということは思想的にも現実の政治的な活動としても重要な問題だろうと思っています。

川延

ありがとうございます。定刻になりましたので、この辺で終わります。まとめられるようなレベルではなく本当に深いお話しをちょうだいしたと思います。人間と動物を分けて考えない。そこからいろいろなことを私たちは考え続けることができると思います。それでは短い時間でしたけれども、ありがとうございました。



動物と震災

day 1 オープンディスカッション

day 2 スタディツアー

日　　時：8月5日（月）10：30〜18：00
有害鳥獣焼却施設（南相馬市）→半杭牧場（南相馬市）
随行講師：管啓次郎氏（詩人／比較文学研究／明治大学教授）
随　　行：生田武志氏、木村友祐氏
現地講師：半杭一成氏（懸の森ファーム理事／半杭牧場主）

動物と震災

day 2 スタディツアー

南相馬市への車中

みなさんと考えていきたい

事務局・筑波匡介

おはようございます。本日ガイドを務めます福島県立博物館の筑波と言います。ライフミュージアムネットワーク実行委員会の事務局を務めております。

東日本大震災を起因として、色々な問題が各地で起こりました。災害は、潜在化している、目に見えない社会課題を浮き彫りにすると言われています。今回、浮き彫りにされた課題、問題は、実は日本全国に通じる。見えていないだけで、どこにでもある問題なのだと考えています。

そういった問題意識に対して、博物館、ミュージアムが連携して、対応策と言いますか、どう社会と向き合っていけるかを考える集まりが、ライフミュージアムネットワークです。

今日は、今年度初の取り組みで、南相馬に「動物と震災」というテーマを持ち、ツアーを組みました。全国からご参加の20名の方で出発し、休憩を南相馬の道の駅で取り、そこで浜通りの人たちに合流いただき25人で進めていきます。

水分補給、塩分とかミネラル分も忘れずに、具合が悪くなる前に、なるべく取っていただければと思います。道中、みなさんから自己紹介していただき、講師の先生からお話をいただきながら進めていきたいと思っております。今日の行程は、トイレ休憩で飯舘の道の駅に止まって、続いて南相馬の道の駅に行きます。それから「有害鳥獣焼却施設」を、特別にお願いして見学します。その後は半杭牧場という乳牛を飼育されていた牧場を見学して、牧場主さんから話を伺い、帰路に就きます。

みなさんからお話をいただく時間もあるかと思いますし、あまりに考えることが多くて、沈黙してしまうかもしれません。進みながらみなさんと考えていきたいと思っております。よろしくお願いします。

では、管先生、お願いします。

果たして何が言えるでしょうか

管啓次郎

はい。みなさん、こんにちは。明治大学の管啓次郎です。随行講師という役目を仰せつかっておりますが、果たして何が言えるでしょうか。でも幸いなことに、評論家の生田武志さんと、小説家の木村友祐さんが、ここにいらっしゃいますから、困ったらこのお二人にお任せするということで、なんとかやっていきたいと思います。

僕は、動物に大変興味があるのですけれども、専門的に何かを勉強したことはありません。文学・環境学会の代表を4年間務めていましたけれども、それも今は交替し、後ろにいらっしゃる結城正美さんが務めていらっしゃいます。

動物について思うことは、子どものころから、常にたくさんあったのですが、それが体系的な知識になったわけではない。しかし震災後、ある種の状況が、はっきり見えてきたという気もしておりまして、そのあたりのことを話ながら、今日は進めていきたいと思います。

事務局・小林めぐみ

事務局をしております福島県立博物館の小林と申します。活動をかたちにして残すことも、大きな目的にしており、記録撮影をさせていただきます。ご了承、ご協力いただけましたら幸いです。

スチールカメラは、村越としやさんにお入りいただいています。村越さん、よろしくお願いします。村越さんは須賀川ご出身で、場の雰囲気、土地が持っている雰囲気をかたちにする素晴らしい写真家です。動画で入っていただいているのは、赤間政昭さんです。よろしくお願いいたします。赤間さんも福島ご出身で、県内あちこちで制作されています。近年は、二本松市に2011年以降避難していました浪江町の小学校を追いかけて、子どもたちと大人たちが、どうふるさとを伝えようとしているのか、そんなことをかたちにする映像も制作されています。お二人にご一緒いただきます。みなさん、よろしくお願いいたします。

筑波

そうしましたら、車中で自己紹介をしていきながら、バスを進めていきます。

私は、実は防災の勉強もしていまして、防災でよく言われるのが、とにかく顔見知りを作っていきましょう、困ったら顔見知りが助けてくれるということです。

こうやって顔見知りをどんどん作っていくって大切なことですので、自分が何者であるのかご紹介しつつ、あの人、この人を知りつつ進めていきたいと思っております。

小林

順番に、村越さんと赤間さんも一言ずつ。

スタッフ・村越としや

ご一緒させていただく村越です。福島県の須賀川市の出身で、僕の実家は畜産をずっとやっていて、動物とは小さいころから関わりの深い生活をしてきました。僕の作品にも、よく動物が登場します。今回ご一緒させていただくのは、すごく僕にとって意味のあることだと思うので、おじゃまにならない程度に写真を撮らせてもらいます。よろしくお願いします。

スタッフ・赤間政昭

赤間と申します。よろしくお願いいたします。

県博の仕事に「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」というのがありまして、浪江町の小学校の一年と、飯舘村の田植え踊りの記録映像を撮らせていただいたことがきっかけでお手伝いをしています。

今日、アテンドされている管先生は、郡山でやっていた「ただようまなびや」というイベントで何度かお見かけしており、個人的に『銀河鉄道の夜』とか、古川日出男さんと一緒にやっていらっしゃる詩の朗読も、昨年、南相馬で拝見しました。よろしくお願いいたします。

事務局・塚本麻衣子

福島県立博物館で、このライフミュージアムネットワーク事務局に入っております塚本と申します。よろしくお願いいたします。

震災のあとに、私は、よその県から福島にやってきて、初めて浜のほうに行ったときに、車と猪が併走している状況というのを見て、「なんだここは」と思ったことがあります。

そういったことを思い出しながら、今日、一

緒に考えていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

参加者・紺野文彰

陸前高田から来た紺野と言います。被災して、家も何もなくなりまして、私の猫も1匹は死んじゃったのですけど、2匹は助かって、避難所で猫は飼えないですから、がれきの中で餌を与え続けました。他に一人でぷらぷら歩いている飼い主がいない犬を、みんなで助けて里親を見つけたりしました。

そういう環境の中で大変な状況を見ていますので、福島でも同じような、もっと大変な動物たちの運命があるのだろうと、それをぜひ学んで持ち帰りたいと思って来ました。「有害鳥獣」とか言いますが、誰が有害と名付けたのか、どういう定義なのかも興味深いです。

動物の側に立って

木村友祐

木村友祐と申します。小説を書いております。震災の後に、浪江町の「希望の牧場」を舞台にした小説を書きました。福島の状況を見に来るのは、もうそれ以来なので、しかも今日行く施設は、どちらも行ったことがない場所なので、とても重要なものを見に行くような気持ちでいます。

僕も家で猫を1匹飼い、外にいる猫も3匹面倒を見ているけれども、やっぱり周りの人たちの目がとても厳しいです。一軒からは、直接苦情が来ている。その人の家の塀を伝って、車の上に猫がやって来る、足跡が付いた、どうしてくれるのだという連絡が来た。妻と一緒にその人の家の塀に、猫よけのトゲトゲシートを貼りに行った。1万数千円とかかかっているのですけど、そういうことをやっています。

人間の住む環境に動物が入り込むことに対する視線の厳しさ、その隙間のなさ、余裕のなさはなんだろうと感じていて、もちろん僕は動物の側に立ってものを考える。でも、今日行く南相馬は、もう猪が増え過ぎてしまって、そこで住んでいる方が困っているという状況かと思います。ぼく自身は、もう動物を殺してほしくはないのですけど、殺してはだめだとまでは、一方的に外から言えないような複雑さを今日は目の当たりにするのかなと思っています。

博物館が、なぜ

小林

博物館が、なぜこういう事業をしているかに少し触れたいと思います。よく「博物館行き」なんて言葉が使われますけれど、昔のことを蓄積して伝える場所です。それを、なぜするのかと言えば、今生きている私たちが、どう生きるかの参考にする。過去から学ぶためであり、それを未来に伝えることで、未来の人の何か糧になっていく。それを期待されているのがミュージアムであると思っています。

2011年以降に福島県で起こったことは、たくさんのことを気付かせてくれました。それをみなさんと、もう一度共有して考え、そこで生まれた言葉を未来の人に伝えていくことが、私たちの役割ではないかと思っています。

「原発さえなければ」という書き込みをして亡くなられた牧場主の方がいらっしゃいました。そして村越さんのご出身の須賀川だったかと思うのですが、生き物ではないですが、同じように私たちの体を作る食べ物を育てていた有機野菜農家の方が命を絶ちました。

人の命を作っていく食べ物を作る方たちが、そういう思いに至った。そのことは、忘れてはいけない。考え続けていたいと思っています。

スタッフ・弦巻優太

福島県立博物館学芸員の弦巻と申します。マッキーと呼ばれています。学芸員として震災遺産チームに携わっており、今回のスタディツアーにもスタッフとして参加しております。

私は元中学校教員でして、初任の震災当時、大熊中学校で勤務しておりました。震災から8年経って、こういったスタディツアーに携われることにご縁を感じております。

みなさんから、色々な知恵を学んでいきたいと思います。よろしくお願いいたします。

身を削って かわいがっている人が

生田武志

大阪から来た生田と言います。普段は釜ヶ崎、あいりん地区という名前でも知られている野宿者が多い街で、野宿者の支援活動をしています。

33年前から釜ヶ崎に入って、日雇い労働者として働きながら、色々な活動をしてきました。野宿の方と動物の関わりのことでは印象深いことがありました。日本の野宿者の平均月収は3万円です。だけど、猫を何匹も飼って、餌代で2万円近く、つまり自分の収入の半分以上を猫のために使っている人がいる。身を削ってかわいがっている人が結構いるのです。路上にいる猫も、野宿の人も、ぎりぎりの生活をしている。そのぎりぎりのなかで支え合って生きている姿を見て、普通に家で飼われている犬や猫とは全然違うという印象を持っていました。

支援活動では、犬や猫の避妊手術をすることがあります。餌代は野宿の人も稼げるけど、避妊手術代なんてとても稼げません。そのため、公園で猫が何十匹も増えちゃって、僕らが関わっている西成公園だと60匹以上の猫がいたりします。そこで、野宿の人に声を掛けたり、こちらに依頼されたりして、我々がお金を負担して避妊手術をすることがあります。

野宿の現場で 起こっていることと、 震災の場で起こっていること

震災については、阪神・淡路大震災を経験しましたが、東日本大震災では宮城県に4回ボランティアに行って、泊まり込んで活動しました。その中で印象深かったことの一つは、障がいを持っている人が取り残されていたことです。

昨日もお話しましたが、一人の男性が、家ごと流されて土台だけ残っているところを、一日中ぐるぐる回っていました。最初は何か探しものをしているのかなと思いましたが、数日いると、その人は、ずっと土台の周りを歩き回っているだけだということがわかりました。

夕方になると、漁村の人たちが公会堂でご飯を作って、みんなで食事をする。僕らが行くと、「お疲れさま」って言ってくれるけど、その方が行くと、女性が「あんたは食べるときだけ一人前かね」と言う。男性は黙って食べて、また戻って、ぐるぐる回っていました。震災の中では、ボランティアがやるべきことをやるという、単純明快なすがすがしさがあるけど、そのやるべきことができない人が排除される懸念がある。それはすごく印象に残りました。

それと同様に動物もまた障がい者と同じように、取り残されて見捨てられていた。僕は福島県へ来るのは初めてですが、動物問題をずっと考えていて、もしかしたら、野宿の現場で起こっていることと、震災の場で起こっていることは似ているのかなと、時々考えていました。

英語圏では、被災者のことはホームレス(homeless)と呼びます。一般に地震とか津波で家を失った状態全般の人をホームレスと呼ぶのです。英語圏でニュースを見ていると、日本で津波が起こって数千人がホームレスになったと言っていました。つまり家がないという状態では、失業して家がなくなった野宿の人も被災者の人も同じです。

動物についても、人間と動物が必死に支え合う姿もあれば、一方で動物が見放され、見捨てられる現実があった。それについては、『いのちへの礼儀』という本で考えたことをまとめたのですけど、今日は、そういった現実を初めて福島県へ来て見ることができるということで、緊張しながら来ています。

参加者・松田法子

京都府立大学から来ています松田法子と申します。建築をやっていまして、建築の歴史や集落、都市、人が集って住むところの歴史、その器のことなどを観察しながら、最近は、特に、周りとの付き合いとか、環境、植生、長期的な時間の流れと一緒に、今そこにあることに関心を持って、あちこちに行っています。

2011年には、東京の大学で働いていたのですけれど、私たちのチームは、宮城県の岩沼市に入りまして、そこは六つの海浜集落が壊滅しました。集団移転、復興していくときに、空間性みたいなことを継承できないか。そういうところに入っていました。

三陸や東日本大震災の被災地の人たちだけではなく、あまりにも日本中で沿海の暮らしが見過ごされてきたところに、私たちは、ハッとさせられました。その後、私なりに日本海側の新潟平野に行き、今は紀伊半島の漁業集落を回って、そんなことを考えながら過ごしております。

その場に行かないと 分からない

参加者・結城正美

結城正美です。金沢から来ました。前に「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」のプロジェクトで、浪江町のツアーに参加させていただいたことがあります。その時に、地元の方とお話する機会があり、「これからどうすればいいんでしょう」という話題になった時、もう知識は要らない、みんなで話し合って、知恵が欲しい、知恵が必要だというお話になって、ハッとさせられたことがあります。

昨日のお話で、木村さんが、やっぱり現地に行くと、五感を通して経験することで分かることがあるとおっしゃっていたことに、非常に共感しました。私、環境文学というものを研究しておりまして、やっぱりその場所に行かないと分からないことがあるということを、行くたびに痛感します。もやもやを抱えながら研究に取り組んでいて、現地に行くことが、非常に重要だと思って、今日も参加させていただきました。

参加者・奥山恵梨子

福島市内の雑貨店に勤務しております奥山恵梨子と申します。よろしくお願いいたします。私は福島市の生まれで、なかなか浜の方に行く機会がなくて、今回このような取り組みをフェイスブックで拝見して、ぜひ行ってみようと思い応募しました。震災と言うと、色々な問題があって、何から考えればいいのか分からない。今回は、実際に浜の方に足を運んで見せていただけるということで、ちょっと緊張していますが、やっぱり現実を現地に行って見ることも大事だと思っています。今日はよろしくお願いします。

参加者・伊藤岳

伊藤岳と言います。山岳の岳です。学ぶじゃない。普段は製鉄会社で営業をやっています。実は、私は1歳から小学校1年生まで、福島県の西郷村にある牧場で育ちました。そこは乳牛業ばかりのところで、私の父は東京出身ですけれど、獣医師として技術者みたいなかたちで、理想の牧場を作るみたいな話で勤務していました。

震災を機に、気になるわけですね、ずっと。私の父は、もう引退して、ちょっとぼけちゃって施設に入っていますけど、先月、かつてのその牧場の仲間たちが父のところに来てくれまして、私が案内したのですけど、当時の牧場の話、

day 2 スタディツアー

動物と震災

day 2 スタディツアー

動物と震災

今の福島の牧場の実態、問題みたいなものを聞いて、すごく気になっていました。

フェイスブックの木村さんと管さんの投稿で知りまして、これは、呼ばれていると思って会社を休んでまいりました。

参加者・鋤柄宗一郎

埼玉県から来ました鋤柄宗一郎と申します。栃木県で大学生をしていて、農業経済学・農業経営学を勉強しておりまして、自分の興味は、アニマルウェルフェア（Animal Welfare）というヨーロッパから入ってきた概念、日本だと動物福祉と呼ばれている、そっちの方面に関心があります。フェイスブックで応募させていただきました。

スタッフ・猪瀬弘瑛

県立博物館で学芸員をしています猪瀬です。私は専門が地質学で、2011年は東日本を恐竜時代に襲った大津波で犠牲になった生き物の研究をしていました。分類上は科学者という立場です。震災の後、特に原発事故で科学不信というか科学に対しての信頼が揺らいだ。特にネットでは、そういったものを見まして、科学と社会がどう関わっていったらいいのか、色々疑問を持ちながら参加しています。

今回の動物に関しても、社会の中で生きていた動物たちが、犠牲になっているのを見て、どういうふうに科学が関わってきたのか、これから関わっていくべきなのかを考えながら参加していきたいと思います。

参加者・阿部泰宏

おはようございます。福島市にあるフォーラム福島というミニシアター、映画館の支配人をしております阿部と申します。

「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」で、川延先生と小林さんに声がけをいただきまして、『黒塚』という映像と、去年は『太陽の塔』という映画で、うちの劇場を会場に使っていただくご縁がありました。

うちでも震災以降色々な震災や放射能問題に絡んだ映画を上映してきました。『犬と猫と人間と』とか『被ばく牛と生きる』、あるいは『福島 生きものの記録』など、色々動物のことを取り上げた映画が作られて、知識としては、そういった運動、活動をされている方と知り合い、映画の中で、そういう実情を知ることはできているものの、皮膚感覚で実感したいと思っていたところに、こういう機会があることを知りまして、ぜひ、参加させていただきたいと思い、今日はうかがいました。

参加者・岡部兼芳（委員）

猪苗代にあります「はじまりの美術館」の岡部と申します。どうぞよろしくお願いします。「はじまりの美術館」は、運営母体が社会福祉法人でして、私は知的に障がいがある方の支援をずっとやってきました。美術館を5年前に開館したのですが、その時に異動になって、今は美術館で館長に任じられております。

ライフミュージアムネットワークでは、実行委員会の末席に加えていただき、一緒に勉強しています。私の家も、親はずっと畜産業をやっていました。出荷されていく豚の寂しい思いが、ずっと残り、牛の大きさを子どもながらに体感しました。後は、家でもペットをいっぱい飼っていて、常に何かがいて、ある時は私のベッドの中で猫が出産したこともありました。ちょっと冷たいなと思って目が覚めたら、子どもが産まれていた（笑）。

「のけものアニマル」

動物というのは、なんと言ったらいいのかずっと考えていましたが、隣人、人ではないのですけど、常に側にいて、一緒に育ってきたものだなと実感しています。色々な出来事が、感覚として、ずれが起きているのではないかと、昨日のお話しを聞きながら思いました。

美術館でも、「のけものアニマル・きみといきる。」という動物をテーマにした企画展をしたことがありました。企画展は障がいのある方、そうでない方、現代アートの作家さんの作品を一緒に展示しています。

「のけものアニマル」というのは、担当スタッフが提案したタイトルですけれど、人間はアニマルの中で、のけものになっているのではないか、自分たちだけのことを考えているのではないかということをテーマにしました。

背景には、やっぱり障がい福祉があります。福祉を辞書で調べると、福も祉も幸せという意味しかなくて、幸せということを考える仕事なのだと思いながら働いてきました。先ほどもアニマルウェルフェアというお話がありましたけれど、動物に関する幸せを考えるのか、それとも人間にとっての動物の幸せなのか。朝から考えさせられています。

参加者・大政愛

同じく「はじまりの美術館」の大政と申します。昨日のお話しも障がい福祉についてであり、自分たちの活動と重なる部分が多いと思いながら聞いておりました。

私は、愛媛県松山市出身で、ここからは遠いですが、震災当時は茨城県で学生をしておりまして、震災の揺れは確かに感じていたのですが、すぐに何か動いたり、どこかに向かったりということはできなくて、少し経ってから、新地町に行ったのですけど、外から通うという関わり方は難しいなとぼんやりと思い、福島という場所に関わるのであれば住みたいなと思って、今、猪苗代町で働いております。

動物に関する話は、ニュース、ネット、そういう情報でしか見られていないので、今日、あらためて自分の目や鼻や耳、そういうものでみなさんと一緒に感じられたらいいなと思っています。

参加者・佐藤李青（委員）

佐藤李青と申します。東京からまいりました。普段はアーツカウンシル東京という組織で働いていますが、2011年の震災以降は、文化面での東北の支援をずっと担当しておりまして、そのご縁で福島県立博物館のみなさんとお会いして、今は、このライフミュージアムネットワークの実行委員会委員もさせていただいております。

震災以降、東北で話しを聞いていると、猪、熊、鹿、海の方に行ったら鯨、色々な動物の話を聞きます。動物のことを議論するのは、人の価値観、生き方みたいなものを、すごく反映した議論になるなと思いつつ、なかなか議論する場を持てていませんでした。残念ながら、昨日のディスカッションには参加できなかったのですが、今日からこちらに参加させていただき、色々なことを考えたいと思っております。

筑波

ありがとうございました。

私、見た目はベテランですけれど、福島県博2年目の新人でございまして、一番この中ではキャリアが短い人間です。福島に来る前、新潟県の中越地域にいました。長岡市です。前に働いていたところは山古志村、柏崎。そこで震災のことを伝承していく施設を作っておりました。建設と言いますか、設置、運営をして、今、こちらに来ています。

私がいた山古志村は、牛を普通に飼っている地域でした。角突きをやっています。家族同然で牛を飼っているような場所だったのですが、震災の時に多くの牛を亡くしてしまったのです。救助することができず、やはり置き去りにしてしまった。多くの牛を失うことになってしまいました。今は、数だけは元に戻りつつある。

同時に錦鯉も飼っています。錦鯉もペットですね、観賞魚。もともとは食べるために飼っていた魚だった。突然変異になったものがペット化されている。実は震災の時、食べ物がなくて錦鯉をさばいて食べていたそうです。メディアが触れて、特に海外からは、やはりペットを食べるのかという議論があった。山の地域では貴重な冬のタンパク源であったのですけれど、今は食べることがはばかられて、隠れて食べるようになってしまっています。

何を、どう考えていいのか整理がつかない部分がたくさんあって、今日は整理がつかないままでもいいですけれど、もやもやと考え続ける一つのきっかけになればいいかなと思っています。

もうすぐ道の駅に到着しますので、少し休憩を取ります。

飯舘村の道の駅「までい館」到着・休憩後、南相馬市へ

筑波

これから行くのは、主に猪を焼却するための施設です。以前は、里山に降りてきた猪は撃って、みなさんで食べていたそうですけれど、原子力災害の関係で、食べられなくなってしまった。結果としてそれらを焼却処分しなければいけなくなって、ゴミ処理施設で燃やすことになっていたのですが、数が増えすぎてしまったために専用の焼却施設を設けたと聞いています。

今年の3月末か、4月から稼働しているので、まだできたてです。新しい施設です。基本的には見学する施設ではないので、見学するための準備が一切ありません。私は、下見には一度行ってきましたが、その時は稼働していなくて、実際の現場に立ち合っていないですけれど、職員さんたちの話を聞くと、とにかく大変な臭いが出るそうです。運ばれてきた動物たちは冷凍庫に入れて、その後焼却する。寄生虫、病害虫を駆除してから焼却するためだそうです。

マスクを用意しております。見学中に具合が悪くなってしまう方があれば、車の中で休憩されていても構いません。土日に運び込まれて月曜日に焼却するということになるかと思います。確認が取れていないので、稼働しているかどうか行ってみないと分かりません。

小林

南相馬市に入りました。八木沢トンネルを通って南相馬に降りてきました。南相馬市は合併前、三つの町、市に分れていました。小高町が南側で、その北側の原町市、さらに北の鹿島町、その三つが合併して南相馬市になりました。

三つのエリアのうち、今は小高区になりましたけれど、小高町だったところが原発事故の圏内に入ってしまい、しばらく住めないエリアになってしまいました。

これから道の駅に行きますが、元原町市だったところです。原町区は市役所もあり、南相馬市の中心です。

今、小高区は避難が解除されて、みなさん戻ってきてはいますが、やはり2011年前に戻るのはなかなか難しくて、少しずつみなさんが暮らしを立て直しているところだと思います。峠、山道を降りて来ましたけれど、南相馬市も山のあたり、飯舘村に近い方は少し線量が高くて、これから海の方に向かいますが、そちらは線量が低い。風向きの加減で、圏内、20㎞、30㎞という数字だけでは明らかにしにくい、まだらのような状態になっています。

両脇に水田がありますが、ここも休耕田になっていて、作物が育てられない状態で数年が経ちました。この後、道の駅で南相馬市博物館の学芸員さん2人も合流してくれます。こちらの地元の方からもお話しを聞ければと思います。

道の駅「南相馬」到着・休憩

筑波

合流された方々の自己紹介を。

参加者・仲川邦広

途中から参加させていただきます。南相馬市博物館の仲川と申します。自然担当学芸員です。よろしくお願いします。

参加者・二上文彦

こんにちは、南相馬市博物館の二上と言います。震災から8年、地元に住んでいる人間ですけれど、色々景色も変わってきている。今回参加したのも、その再確認と言ったらいいのでしょうか。それも含めて参加させていただきました。

参加者・渡邊義明

初めまして、渡邊義明と申します。4月からですけど、浪江町総務課の防災安全係で仕事をしています。3月までは岩手県の大槌町で、防災の仕事を5年間やっておりました。任期付き職員で、期間限定で復興の業務に当たる。今、すごくたくさん人が増えた行政で仕事をしています。もともと行政経験はなくて民間で仕事をしていました。浪江で防災の仕事をやっているので、参加させていただきました。昨日、富岡町で「廃炉フォーラム」をやっていて、そちらに参加しなきゃいけなかったので、昨日は参加しなかったのですけれど、色々教えてください、よろしくお願いします。

参加者・喜浦遊

大熊町役場の喜浦と申します。よろしくお願いいたします。今から行く焼却施設のことは何も知らなかったのですけど、大熊も猪被害が多いので、たぶんお世話になっている施設なのだと思っております。

参加者・井上雄大

南相馬市から合流した井上と申します。地域起こし協力隊の制度を使って、活動をしているチームで働いています。外部から人を呼んでくる移住政策に関わることが多くて、南相馬市で馬事文化が残っているところにツアーでアテンドをしたり、津波の被害があったけど、今は豊かな海洋資源があるところにツアーで行ったりしています。震災遺構じゃないですけど、震災で被害を受けたところが、今どうなっているか、そういうツアーとか、外部の人に知っていただくアテンドをする機会もあるかなと思って、そういうところを勉強できればと思って参加しました。

筑波

ありがとうございました。南相馬から合流されたみなさん、短い時間ですが、周りの人たちとつながりを作っていただければと思います。参加していただいたのも顔見知りを作るという意味ではとっても大切なことだと思っておりますので、この機会に友達の輪を広げていただければと思います。よろしくお願いします。

参加されて感じること、考えたこと、導き出す結論はそれぞれ、全員違うと思います。他者が考えていることを否定したりせずに、「ああ、なんて社会って多様なのだろう」と感じていただければいいと思っています。

二上

海が見えています。これは震災前までは見えなかった風景です。防潮林があったので海は見えなかったのですけど、津波が起こって、防潮林がなくなって、「あ、海、こんなに近かったんだね」って気づいた。

小林

この辺まで津波は来ましたか。

何が違うのか

二上

ここまでは来てないですが、ギリギリまで来ています。もうちょっとすると国道まで津波が来た場所があるのでお知らせします。原発事故による20㎞圏のサークルの境目というのがもう間もなくです。

ちょうど左側に花園という看板、その後釣り具屋さんが見えます。そこが原発事故の時の20㎞の境目でした。ここです。ここに仰々しくバリケードが設けられていた。今20㎞の中に入ったという感じです。

この辺もたぶん津波は来ている。僕は仕事で何回か20㎞の円のなかに入ったのですけど、本当に誰もいない状況で、円の中と外ってそんなに変わらない。見た目も何も変わらない。放射線量もそんなに高かったわけでもない。何が違うのか。

この辺は震災後に圃場整備をし直したところです。この辺は津波が来ていますので、泥、流されてきた車、そんなのがポツンとあった場所でした。

有害鳥獣焼却施設到着

筑波

こちらの焼却施設のセンター長の志賀久さんです。ご説明をいただきます。

志賀久

ご苦労さまです。南相馬市クリーンセンター所長の志賀と申します。よろしくお願いします。こちらの南相馬市の有害鳥獣焼却施設は、今年の4月に稼働しました。猪とか狸、そういった有害鳥獣と呼ばれるものを、猟友会で駆除いたしまして、それをこちらに搬入し、まずは計量します。その後に、こちらの冷凍庫で、マイナス17度ぐらいで、氷漬けにする。有害鳥獣ということで、ダニとかいっぱい付いていますので。

小林

猪が多いのですか。

志賀

南相馬市ですと、平成23年の東日本大震災後、ここから少し南の太田川から南側、ここも含めて、平成28年まで5年間、立ち入り禁止という状況がございました。この間、猪とかは一切駆除できない状況にあった。市でも、どの程度増えているのか判断が難しい。

今までですと、みなさんも通ってきた国道6号線、あそこよりも海側、さらに旧国道と呼ばれる部分、陸前浜街道、そのあたりまでが、猿、猪のすみかだったのですけど、誰もいなくなって、餌を求めて、今は海側まで来ている。人がだんだん入ってきたので、生息域も震災前と比べると完全に変わっている、そういう状況です。

小林

猿も捕獲されてくるのですか。

志賀

一応、猿も駆除の対象です。猟友会さんも嫌がっているのか、ここは4月から稼働していますが1、2頭ぐらいしか駆除されていません。

猪ですと、箱罠とか、くくり罠で捕獲しますけど、猿は銃で撃つしかない。それ以外の捕る方法がないですから、駆除も難しい。なおかつ猿は、平気で人家のすぐ側まで来ますので、撃つに撃てないので、なかなか駆除が進まない。

参加者

猿は、どういう問題を起こすのですか。

志賀

猿は基本的に、なんでも食べるので、庭先の自家用のものまで手を掛けてしまう。

参加者

人に危害を加えますか。

志賀

人に危害を加えることまではないですけど、市でも、必要であれば、ロケット花火等をお渡しして追い払うことはあるのですが、猿は非常に頭がいい。猪ですと、電気罠とか、電気を流すと入ってこられず、作物を守れるのですけど、猿は猪よりもはるかに行動範囲が広い。特に柿とかちょっと高いところにありますけど、すぐに登って食べちゃいます。基本的に人が食べるものは全て食べてしまうので、被害の範囲も大きい。

参加者

そんなに大量にくるのですか、猿は。

志賀

そうですね、このあたりに住んでいるものですと、普通10頭、20頭ぐらいの群れで行動しますので、1頭見かけたら、周りに5、6頭はいる。単独でいる猿もいますけど、だいたいは10頭、20頭近くの群れで動きますので、追い返しも難しい。グループ化するので被害も大きい。

参加者

猟友会の方は、ボランティアですか。

志賀

狩猟免許を持っている人で、猟友会で、なおかつ県に申請をして、何頭まで捕って良いと許可証をもらった人。

参加者

許可制ですか。処理した方には報酬も。

志賀

猪であれば、市で一頭当たりいくらと補助金を出しております。それ以上に繁殖数が大きいと聞いておりますけれど、把握がなかなか難しい。少なくとも今まで来なかった地域にまで来ている。

震災後、この辺は津波で流された地域なので、周りに何もありません。すぐそこに堤防があり、防災林になっていますけれど、この小高地区で、震災前は20数戸あったのですけど、ほぼ全滅的な被害を受けております。

参加者

人がいない時に年々繁殖するのは、やっぱり食べ物があった？何を食べていたのですか？

この施設がなぜ作られたのか

志賀

それは、あるものすべてですね。普通に柿とか、それ以外の穀物も収穫する人がいないので、そのまま放置されている。

この施設がなぜ作られたか。猪が震災後、この辺のものを食べる。ここ20㎞圏内は放射線の影響を、かなり受けた地域で、そこに生えている草、山に行けば山菜、そういったものを食べる。猪とか猿とかは、そういったものを、気にせず食べますので、体内に蓄積する恐れがある。

当然、焼いた死体についても、何かしらの影響があるので、防災の面も含め除去する装置が付いていて、こちらの灰は、専門の業者さんに処理していただく。

ちなみにここができる前は、先ほど言った放射能の恐れがありまして、処分できずに、ある特定の市の土地、そちらに埋めている。

一昨年から、環境省で仮設の焼却炉を作っています。今年には、営業を終了する予定ですけど、そこに去年の2月からやっと搬入のめどがつき、今年の7月、8月から、震災前の分、今まで埋めていたものを掘り起こして、おがくず等を詰める。6号線を通ると、でっかい黒い袋があると思いますが、袋詰めして、それを業者さんの仮設焼却所に持っていって焼却処分する。

day 2 スタディツアー

動物と震災

震災後に捕ったものについてはこちらで処分するということです。

参加者
数字的にはどうですか。４月以降、今月まで、どういう種類の動物が。

志賀
４月から６月までの実績ですと、猪が73頭、猿１頭、アライグマが28頭、ハクビシンが57頭、狸が67頭、兎が９頭、イタチが２頭、その他として３頭、だいたい２５０ぐらい、４月から６月まで。総重量としては、だいたい２５０頭で、３・５ｔです。
これからが狩猟期、猟をしているのが秋口ですので、搬入は、秋口から３月にかけてが、一番多くなると考えています。４月からの３ケ月より、はるかに多い量が入ってくると考えています。

参加者
鹿とかは有害ではないのですか。

志賀
鹿は保護鳥獣にもなっているので、捕るのに気を付けています。猪ですらも、基本的に許可制になっていますので、猟友会のみなさんも申請して、一人何頭と許可を持ったなかで捕っている。有害鳥獣に指定していますけれど、自然保護の部分も関わるので、勝手には捕れないです。

参加者
狸とかハクビシンは多いですね、サイズは小さいけれど。

志賀
そうですね、比較的捕らえやすい。小さい箱罠でも捕れますので。

参加者
ああ、そうか、罠でね。震災前は猟友会の方は、自分の趣味でやっていたのですか。

志賀
そこは、私は担当ではないので、はっきりしないのですけど、基本的に狩猟免許、銃の所持免許を持っている方ですので、そういった部分を否定はできないと思います。そもそも猟銃を持つために、警察の許可が必要ですし、銃を保管するための施設など、かなり縛り事もありますので、現在は猟友会のなり手が少ないという話は担当から聞いています。
震災後、戻ってきている方にも問い合わせているのですけれど、猟友会自体が、高齢化していて新しい人が入ってこないという話も聞いております。

参加者
今年の４月からここが稼働している。それ以前の５年間、立ち入り禁止だった間は、やはり捕獲、殺処分していた。埋めていたわけですね。その数字、データ的には。

志賀
正確な数字はないですけど、数千頭と聞いています。

参加者
だいたいこの割合ですと猪が多いですか。

志賀
そこまでは分かりません。ただ一番獲りやすい猪が、一番のさばっているという話は聞きます。
猟友会の方だと、自分の山で捕獲していたとかがありまして、自分の山ですから、埋めたり、解体して食べたり、それ以外のものは市のクリーンセンターで震災前は焼却していた。

参加者
クリーンセンター。震災前。

志賀
ええ。通常ごみというかたちで、猪とかも受け入れはしていたのですけど、震災後は、先ほど言ったように体内の蓄積とかがあり、許可されない。

参加者
さっき環境省の施設が北にあるけど、間もなく閉鎖とおっしゃっていましたけど、ここができたから閉鎖ということですか。

志賀
違います、あれは環境省が20㎞圏内で出たごみを燃やすために作りました。うちで埋めていたものについては、特別な許可をもらって入れてもらっています。そのための施設ではないです。20㎞圏内から出たごみをなるべく燃やして、少なくして、その上で特別な処理をします。この地区については、放射線の影響が、かなり大きいので、数字的なものではなくて…。

動物と震災

day 2 スタディツアー

参加者
心理的な部分ですね。

感情的な部分が

志賀
感情的な部分が一番大きいです。ここから取れるものも、米ですと、全部検査する。基本的に１００ベクレルですか、基準値以内、ほとんど出ないところもあります。ただ感情的な部分もあって、なかなか20㎞圏内から出たごみは、圏外に持ち出すことがだめですね。
南相馬市は、20㎞圏内で人が立ち入りできない地域、20から30の緊急時に避難する地域、30㎞圏以外のまったく何も関係ない地域というかたちで、震災後の一時期、三分割の生活を余儀なくされました。

参加者
ここには、南相馬市以外のエリアからも依頼されますか。

志賀
いや、それはないです。あくまで南相馬市の猟友会の方が、南相馬市内で捕ったものだけです。相馬市も同じように有害鳥獣を焼却するためだけの設備を、こちらに先行して作っています。そちらを参考にこちらの施設が作られたという経過です。

参加者
犬と猫の殺処分もありますよね、それとは全く別の考え方ですか。それは、別な場所にあるのですか。

志賀
犬・猫については、基本的に引き受けないです。けれども、道路ではねられた猫とかは、市道であれば市、県道であれば県、国道は国から、一般ごみとして受け入れています。

参加者
ああ、そちらでね。

志賀
はい、道路で死骸となったものについてです。

参加者
犬・猫の場合は、殺処分になるね。

それは保健所の分野

志賀
そういったものは、一切受けないです。市でも受けない。それは保健所の分野。もともと保健所でしか殺処分しません。あくまで南相馬市で引き受けるものは、有害鳥獣と呼ばれるもの、犬・猫の場合ですと、道路ではねられたものだけ。
ペットとかそういったものについては、それぞれの方が責任を持って処分してくださいというのが前提になります。

参加者
猟友会の人たちは、駆除の依頼を受けて動くのですか。

志賀
そちらは部門が違うので、はっきり申し上げられませんが、ここにいるから来てくれという要望もありますが、基本的に猟友会のみなさまもお仕事を持っていて、別なところに住んで、色々あります。罠に掛かっている以外であれば、行った時にはもういない。猪がいたからということで猟友会に頼んでも、猟友会が来た時には、もう。

参加者
ここに運ばれる猪は、猟友会の人たちが関係している山の猪に限られているのですか。

志賀
そうですね。罠で捕っているのが、ほとんど。自分たちの山に仕掛けて掛かったもの。

参加者
行政が、これだけ捕えてくださいという目標があるのですか。何匹は捕えなさいと、そういう数字はないですか。

志賀
そういうのはないです。
ボランティアでも捕るための許可が必要になる。一年に捕れる頭数というものもある。どこで捕るかについては、猟友会、実際に捕らえる方の判断になってくる。大型の箱罠に掛かったやつについては、猟友会の人にお願いして銃で撃ってもらうので、行政の負担。

参加者
基本的に、ここに来る時には、もう死んでいる。

志賀
ここに持ってくる時には、死んで、しかも袋に入った状態で持ってきてもらいます。そうでないと、病気もそうですけど、それ以外のダニとかが出てしまう。まれに、そのまま持ってくる方がいますけれども、その場合も受け付けの段階で袋に入れる。冷凍庫に入れる場合は、必ず袋に入れて凍らせる。

参加者
どれくらい入れるのですか。冷凍庫に何時間、何日間入れなきゃいけないのですか。

志賀
それは大きさにもよるので、一概には言えないです。小さいやつであれば、早く凍ります。

参加者
熊は出ないですか。

志賀
熊の目撃情報はあります。

参加者
民家に来ないということですか。

志賀
熊の目撃例はあっても、出たという証拠がないのです。基本的に、浜通り、阿武隈山脈を熊は越えていないだろうと。震災前も、震災後も、年に何回か目撃情報はありますけど。

参加者
生息地じゃない。熊は有害と指定されてい

るのですか。

志賀
そこまでは、ちょっと。捕られた事例がないので。

参加者
建設予算は、全部市ですか、助成金とか。

志賀
基本的には市の予算になっております。後は、福島県から建築物で4分の3補助金をもらって、残りの部分は農水省の補助等をもらって、市の予算も含めて建てています。金額については約3億7、000万。

参加者
先ほど、放射線量の専門機関に結果をもらっているとありましたが、個体によって持っているセシウムの量は全然違うじゃないですか。ここでの放射線管理はどういう感じですか。

志賀
放射線管理は、基本的には2パターンあります。配管の一部から出た焼却の煙突の内部は、放射線等、核種物質をフィルターで取る。

参加者
バグフィルターと呼ばれる。

志賀
そうです。バグフィルターで放射線、臭いを取る。手前の段階で、排ガスの部分を測定する部分が1点。

後は、こういった焼却灰と煙と一緒に出てしまった飛灰については、2パターンに分かれていまして、それぞれを貯めておくところがあります。そこから毎月サンプリングして、放射線の測定をする。出たあとの放射線の測量の部分と、燃やしている最中の煙の中にどのぐらいあるのかの2種類。

万が一高くなった場合は、行政で担当調査委員会を設けていますので、何かあればそちらに報告して、本当に問題があれば、すぐにここは停止になるのですが、いまのところ、そこまでは出ていない。

参加者
ホームページを見たのですが、数字の報告はされていないですね。

志賀
実際のところ4桁を超える放射線は出ていないです。入ったところに「環境放射線モニタ」というのがありますので、何かあれば、煙突から出て、高くなる部分もありますが、こちらは0.8、0.9台で、ほかの地区に比べれば高い値ではありますけれども、周りの環境からするとだいたい平均の放射線。

筑波
みなさん、質問したいことが、たくさんあるかもしれませんが、時間の関係もあります。よろしいですか、もう。

志賀
平面図で見ていただければと思うのですが、四つの炉がありまして、出た煙を一ヶ所にまとめてバグフィルターで除去して、きれいになったものを煙突から廃棄します。

参加者
メンテナンスはどのくらい。

志賀
4月から稼働した施設ですので、先行でやっている相馬市さんに聞きながら、特別なメンテナンスをする機械については、1、2年で、どうこうするという部分はございません。5年、10年で壊れやすい部分から修繕かと思います。炉が一番壊れやすいけど、配管の部分については10年、20年が通説です。

他の施設と違うのは、放射線管理がある部分で、ほかの地域のものには、こういった部分がありません。廃棄焼却灰であれば、例えば埋め立て処分で処分しているところが多いかと思いますけれど、ここについては放射線管理部分もありますので、専門の業者にお金も払って処分してもらう。

参加者
業者は、どこにいますか。

志賀
業者はいわき市の専門業者です。焼却灰などのリサイクル専門で、8、000ベクレルを超えるか超えないか、超えなければ一般廃棄物で、8、000を超えると専門の、環境省が主になってきます。さらにその上の段階になりますと、

完全に埋め立てもできないので、中間貯蔵施設送りになる。

参加者
最終処分場でも処分は、最後に。

志賀
違います。あそこはあくまで仮設、仮置き場。

参加者
そうですね、中間でも当面はそこしかない。

志賀
そうですね、最終の場所については、環境省で探しているようですけれど、今現在どこも手を挙げていない。または手を挙げても住民運動で反対されているのは、新聞・テレビでご存じだと思います。

筑波
そろそろお時間が超過してしまいました。

全員
ありがとうございました。

半杭牧場への車中

宮崎駿の世界みたいな

二上
左側に広がっているのはもともと田んぼでしたが、ご覧いただいて分かるように、放ったらかしの状態です。ここは津波が来た場所です。小高の市街地に向かっていますが、市街地にも水が流れた状況でした。

南側に見える丘陵地の向こうは、もともと江戸時代まで浦だった場所でした。それを干拓して田んぼにしたところで、江戸自体の浦が津波によってよみがえってしまった場所です。ここは20㎞の円の中だった。普通は津波をかぶったところは水を抜く作業をやったのですけど、20㎞圏内のため1年近く手付かずだった。1年近く手付かずだと、自然が戻っていくと言ったらいいのでしょうか、手付かずで放ったらかしにしておくと、そこに生きものたちがやってくる。水の底に沈んだがれきにフジツボがびっしり生えている、そういう風景が見えて、ここはビックリというか、驚愕してしまった。そういう光景を見ることができたのですね、1年間ぐらい。

その後、警戒区域が解かれて、水を抜いたのでその光景はまたなくなってしまったのですけれども、ずっと放っておいたら、自然がよみがえっていくような光景、なんか宮崎駿の世界みたいなのが広がっていったということで、印象的でした。いま市街地に入ってきました。小高です。

小林
小高はどれくらいの方が戻ってきている感じですか。

参加者
今、3、500超えたくらいです。

二上
小高の街中は確かに若い人たちは少ないかもしれないですけど、独自の町づくりをやっていて、震災というか、原発事故で20㎞の円に入った場所なので、色々な試行錯誤をしながらまちづくりをしています。魅力的なまちづくりを目指しています。

半杭牧場

半杭一成
半杭と申します。

参加者
こんにちは。

大富酪農研究会

半杭
私はこの小高区大富で、40年間酪農をやっていました。大富という地域は、昔から水田と養蚕が盛んでしたが、養蚕も輸入物に押されて廃れ、米も過剰になって転作を余儀なくされる時代になりました。昭和45年だと思います。米余りによって転作が推奨されて、ここには酪農家が10軒ぐらいありましたが、その中の5軒で大富酪農研究会という組織を作って、転作奨励金を利用して色々な機械、設備を導入して規模拡大をしていった。

大富酪農研究会、パソコンで検索すると色々な当時の業績が出てきます。県の農業普及改良センターとか、色々なところからもたくさん表彰された地域です。大富酪農研究会というと、福島県では、ああ、あそこかと言われるようなところでした。

震災と原発事故によって、ガラッと変わってしまいました。私は3月11日に、トラクターを買ったばかりで試運転をしていました。トラクターがひっくり返るような大きな揺れを感じて、いやいや、これは大変だなと思った。機械を止めて、みんなと近所を見回りした。

酪農というのは、ほとんど電気で搾乳などは動きます。ああいう災害があると必ず停電がある。やばいなと思って、3時半ごろから牛舎に入って搾乳をしました。

「避難指示が出たから」

搾乳が終わる頃に、酪農協同組合の職員が来ました。酪農協同組合の浜支所が近くにあるのですけど、「浜支所の牛乳を集乳するクーラーステーションが壊れたので集乳できません。搾った牛乳は捨ててください」と。しようがないなと思って捨てた。

女房が市役所職員だったものですから、あのぐらいの震災だったら帰ってこないだろうと思った。そんなことで、色々と仕事を進めていたのですけど、やっぱり二日ぐらい帰ってきませんでした。みんな津波で泥まみれになって、市役所に駆け込んできて、帰れる状況ではなかったそうです。

帰ってきて何を言うかというと、「避難指示が出たから」と。避難指示というのが何のことか分からなかった。最近ではテレビで避難指示と言えば、すぐ避難しなさいみたいなことが書いてありますが、あの時点ではそういう知識はなかったです。避難勧告があって、避難指示があるぐらいだと、そういう感じでいました。避難指示が出たから、どこどこの体育館に行ってくださいと言われた。日中は体育館に行って、夕方になると戻って搾乳をして、牛乳を捨てる。そんなことをしていました。

原発が13日に水素爆発し、すごいことになった。ここは、電気がずっと通っていました。ですから搾乳もできましたし、堆肥のバーンクリーナーも回っていましたのでよかったんですけど、隣の浪江町では電気がアウトになった。そこの県道が、浪江から相馬方面に向かう車で数珠つなぎ。大変だな、人ごとじゃないなと思っていました。

避難するしかない

そんなことをしていて、15日、夕方乳搾りが終わったところに仲間が来て、「このぐらい原発がすごいことになったのでは、避難するしかない」ということで、酪農研究会が集まって、津波で家が流されたわけではないし、牛はかわいそうだけど、このまましばらく避難しようと相談をして、家に戻った。

乳牛は、餌をいっぱい与えると乳房がいっぱい牛乳を貯めちゃうのです。貯めたやつを搾ってやらないと大変牛が苦しむ。これは苦しむなと思ってね、餌はやらなかった。腹を空かせるよりも、乳が張って苦しむ方がかわいそうだと思います。

女房は市役所の職員で、当時私は二人家族で、原町区に娘夫婦がいた。娘が妊娠5ヶ月だったものですから、福島市に長男夫婦がいたので、長男夫婦に世話になると言って早めに行った。

15日に娘の原町区の家に行って、16日の朝にここに貴重品を取りに戻った。犬が1匹いました。犬だけは連れていこうと思って、犬を連れて福島に向かいました。女房は市役所の職員で公務員ですから、避難できませんので、娘の家からずっと市役所に通っていました。

長男夫婦のところに行ったのですけど、犬をどうしようと考えていたら、長男のお嫁さんが、保健所の獣医で、犬のしつけ教室をやっていたので、ボランティアの方を見つけてくれて、すぐにそこにお願いしました。

牛に合わせる顔がない

私もそこに4月20日まで。26日に姪っ子の結婚式が長野県の軽井沢で行われる。4月21日から警戒区域が20㎞圏内と設定され、許可証のない者は入れなくなりますと言われたので、その前日の朝早く暗いうちに、女房と一緒に式服を取りに行きました。なぜ暗いうちにかというと、やっぱりここに牛を置き去りにして逃げたわけじゃないですか。だから牛に合わせる顔がないので、暗いうちに来て、式服を持って逃げるように帰りました。牛舎はのぞけない。やっぱり自分がやってしまった罪深さみたいなものを感じて。ちょっと鳴き声はしたけど、シャッターを開けてどうなっているかは見れなかった。

安楽死させて

逃げるように帰って、4月28日にまた原町区の女房のところに戻った。女房が市役所の職員なものですから、農政部から色々な地域の状況を聞いていて、「ほとんど死んでいるみたいだよ」と言われた。でも入っちゃいけないからどうしようと思っていた。

動物と震災

day 2 スタディツアー

われわれの動物というのは、人間の保健所じゃなくて、家畜保健衛生所の担当です。家畜保健所の近くのおやじさんは、餓死は忍びないので安楽死させてと頼みに行った。安楽死というのは非情なように思うかもしれないけど、例えばここの40頭の牛舎で年に1頭か2頭は安楽死措置をします。病気でもう起き上がれなくて、1週間も10日も、首を投げて寝ている。それはかわいそう。だから獣医さんにお願いして、「先生、かわいそうだから安楽死させて」と言って安楽死措置を進める。それは、われわれ畜産農家にとっては当たり前です。

最近でも北海道のディープインパクトは安楽死しました。結局、ああいうことだ。かわいそうだから安楽死措置をする。でもあの頃はまだ、国ではこの20㎞圏内の家畜に対しては安楽死の処分は出していなかったですね。5月の11日、確か国で20㎞圏内の家畜については安楽死という命令を出しています。

でも実際われわれが、南相馬市から安楽死措置をしますよと聞いたのは6月頃でした。ほとんどは餓死していました。餓死していなかったのは牛舎から逃げたやつ。それから、こんなこと言ったら叱られるかもしれないけど、愛護団体が放した。豚さんも放したし、肉牛農家に行っても放した。われわれの牛舎のスタンチョンというのは、たぶん愛護団体の人は放すことができなかったです。たぶん角が邪魔になったりして怖かったのだと思います。だから意外と酪農家の牛舎には牛は残っていました。

ギンバエが1億くらい

初めて県の許可が下りて、ここに入ったのは6月10日。あのころは県の人事異動が遅れて、新しい家畜保健衛生所の所長がここに来て小高の状況を視察すると、連絡があった。私と隣の人と、市役所と県の所長と次長と、5人で入りました。

入ってびっくりした。だいたい話は聞いていましたけど。3月に出ましたからシャッターが閉まっていました。シャッターを開けたら、6月10日ですから、もう4、5、6。3ヶ月ですね。死んでいますからギンバエが1億ぐらいいる。真っ黒です。わああっとギンバエなのですね。

地獄絵図を見ているような

ここに牛が死骸で横たわっていて、牛の高さと同じぐらいウジムシがいます。うごめいている。あと、豚さんが来ますね。豚は何でも食べる。牛の死骸も食べました。ほとんどの小高区の牛舎、それから豚舎、それから1軒だけブロイラーを3万羽ぐらい飼っていたところがあります。ここも見ました。もう地獄絵図を見ているような感じで、ひどかったです。

隣に行ったら、これは新聞に出ていた、死んでいた中に、1頭だけ子牛がいる。たぶんわれわれが避難してから生まれたと思う。だから4、5、6、3ヶ月ぐらいの牛が、お母さんの牛のそばにいるんですね。死骸を見ると、お母さん牛は、最後まで生きていたなと。死骸の状態が違います。他は白骨化してミイラ化しているけど、こいつは最後まで生きていたなと思った。やっぱり動物の親というのは偉い。最後まで生きていたのだなと。その子牛は、どこかの試験研究機関が連れていきました。本当は20㎞圏内の動物は移動してはだめなのでしょうけど、試験研究機関が連れていきました。

参加者
生きていたのですか。

半杭
お母さんは死んでいました。死んだ状態が生。ミイラじゃない、白骨じゃない。

参加者
子どもは生きていた。

子どもは立っていました

半杭
子どもは立っていました。1頭だけだけど。

養豚場に行った。でかい養豚場です。そこはひどかった。豚というのは共食いをする。大きな養豚場なものだから、肥育、繁殖、分かれていて、分娩棟というのがあって、分娩するお母さん豚が、ぎゅっと、ここに10頭、ここに10頭といて、仕切られている。そこに入ったら、お母さんブタの隣にこのぐらい、30㎝ぐらいの赤ちゃんが全部死んでいます。20頭のお母さんのそばで。自分には孫がいたんでね、孫と重ね合わせてしまう。かわいそうだなと思いました。

やっぱり命だった

だから、私は一番震災で感じたのは、放射線でも何でもなかった。やっぱり命だった。ここで一番大きな酪農家には牛が184頭いました。184頭というのは、億の金を投資しないとあのぐらいにならない。私は40頭ぐらいです。システムも全然違います。新しく牛舎を作って、やっと軌道に乗ったばかりでした。

その184頭の牛舎に行った。「半杭さん、死亡牛、数えてくんない」って言われて。白骨だから数えようがないなと思った。そうだ、頭蓋骨を数えればいいと思って、頭蓋骨をずっと数えていって140まで数えたら、あとはいいわと思った。後は数えなかった。140まで数えたらいいや。だからもう、夏ですからね。それはひどい状態でしたね。

「振り向くな」

その人は私より一級先輩で、私と同じで、親子でやっていて、本当に軌道に乗って、これからという時に原発事故があって避難せざるを得なくなった。

会津の方に避難して、一週間して餌をやりに戻ってきたら、モーモー、腹を空かして鳴いているんだって。それ急げということで餌をやって、しばらく見ていたけど、それでも鳴くんだって。こいつら何で鳴くんだと思った。ああ、人が恋しくて鳴くんだ。そう思ったらしい。

会津に帰る時、億の金を投資してパアになったんだからね、おやじが後ろを振り向くんだって。息子が運転で。そうしたら息子がね、おやじに「振り向くな」と言った。あそこまで努力してやっと成功させたのに、原発でパアになっちゃった。振り向くなと言われた。

後で考えたけど、それは息子が自分自身にも言ったのだと思うね。振り向くなっちゅうのは。そうだと思うよ。おやじにばかり言ったんじゃないと思う。自分自身にも言ったんだと思う。本当に立派な牧場でしたからね。それが一瞬にしてパアになったわけだから。

そこの牧場に行って驚いたね。体育館みたいに大きな牧場です。牛に餌をやるというのは、連動スタンチョンといって、ここにパアアと餌を置いて、トンっとやると20頭ぐらい首が閉まって、そこで餌を食べる。食べ終わったらまた外して、他と入れ替える。

その方は家を出る時、ロックを解除してしまった。だから固定はされない。でも会津に戻って、それから見たら死んでいる。ロックは解除した。愛護団体が入ったみたいね。だから20頭が首を出したまま死んでいるわけ。もう見られなかった。あれはやっぱり、あのおやじさんだって見たくないと思うよ。自分の牛舎があんなざまになっているという風景はね。

参加者
安楽死ということですか。愛護団体による。

半杭
愛護団体の方がロックしちゃった。ロックしたら、スタンチョンといって、餌を食べて、はい終わった、次の牛と。ロックを解除して次ぎの牛を入れる。で、閉める。食べ終わったらまた解除する。解除はした。でも、テレビで行ったときには解除されてなかった。ロックされたまま。

参加者
ロックするのですか、愛護団体が。

半杭
それは分からない。ロックされたままだった。おかしい。

参加者
逃がしてやらないといけないでしょう。それはなぜですか。

半杭
分からない。20頭いたのが、首を出して死んでいる。あれはかわいそう。色々な現場を見ました。だから、私は、その後も、色々な仕事で入ったけど。放射線がどうのこうのという意識はなかったですね。放たれている牛。放たれている豚。確保。それから安楽死。そんな仕事に携わってきた。

一番大きな養豚場は3、000頭。そこは安楽死を3、000頭やりました。安楽死って順序があるみたいで、最初に鎮静剤を打って、麻酔剤を打つ、それから筋弛緩剤を使う。順序がある。3、000頭はかかりましたよ。だからもう、途中で薬がなくなっちゃった。

私たちは獣医さんと一緒に行動していましたから、必ずこの地域の中に入った時には、県道にいるお巡りさんに免許証を見せて、許可証を見せて、マニュアルどおりですよね。

県の方が一緒に仕事をしていたので、その方が言うのですよ。フジモトという獣医さんがいる。「フジモト、お巡りとけんかしていたよ」。フジモトさんは出たり入ったりする時に、必ずマニュアルどおりに提示してくださいと言われる。「俺は今日、一回書いたのでいいじゃないか」とけんかしていた。向こうのお巡りさんは全国から来ています。島根県警のお巡りさんが頭にきたらしい。県の方で言って、それがずっと回ってきて、福島県の農政部に来た。農政部からフジモトに。

よくやってくれた

私はね、本当に獣医さんとか、農林省の職員とかね、よくやってくれたと思いますよ。牛の捕獲、安楽死。あの放射線の中を、あの当時、よくやってくれた。その話は、私ら畜産農家55人ぐらいと、土建屋さんと、他の人以外は知らない、あの努力は。お巡りとけんかしながら入ってきて、本当は、彼らは動物の命を助ける側じゃないですか。それが真逆のことをしなければならない。3、000頭のブタを安楽死させなければならない。

そのことを粛々とやって、世間では「この家は何もやってくんない」みたいに言われていました。あの獣医さんはやってくれたと思っている。農林省の幹部の方に聞きましたけど、あとは福島県農林水産部門の方はほとんど来ましたね。

放れ豚を50人ぐらいで囲んで捕まえる。1ヶ月もすると野生化します。動物って1ヶ月も経ってしまうと。100kgの豚が向かってくる。吹き飛ばされますよ。でも女の方も、農林水産部の方もいましたしね。

後世に残さなければならない

だからああいうことって、ほんとにちゃんと後世に残さなければならないということで、記録誌を作って、まずはフジモトさんに書いてもらいました。意外と誰も知らない。あの人たちのやったことを知らない。その後、こ

こで放れ牛をどうにかしなきゃならないということで、私の牧場は九町歩ある。九町歩に柵を結って、放れ牛を捕まえてきて放す。当時下の牧場で放れ牛を捕まえた。ここは70坪ぐらいかな。全部で100坪あります。上と下で。

それをやっていたら、北里大学と東北大学、岩手大学、各大学で被曝量の調査研究をさせてくださいと。まあ、いいだろうということで、家畜飼養管理組合というものを作っていますから、大学とか色々な団体から寄付金をいただいて、われわれの日当とか餌に当てた。

3月でしたから、酪農家ってだいたい6月ごろまでの餌はストックしているのです。何とかその頃までは間に合うのです。でもだんだん、あっちの餌、こっちの餌、探したけど足りなくなって、結局輸入乾草を買うお金に。でもお金がなくなって。3年ぐらい買いましたね。飼養管理費で。ちゃんとするお金もないし。ボランティアでもそんなにやれないし。

2017年、この避難指示地域が、避難指示解除になります。解除になったらここに戻ってきて、それぞれ自分の生活を整える。だからいつまでも畜産農家の人をここに縛っておくわけにいかない。かわいそうだけど安楽死。そして再び前を向いて進みましょう。

最後には31頭いました、31頭をここで。岩手大学と東北大学、医学部の研究室、二つのグループが解体する。それで一応、終わり。

みんなばらばら

その後はどうすっべとなって、それぞれ自分の進むべき道を考えて、行動するとなったのですけど。私なんかはもう、やる気がなかったというか。この地域は、大富酪農研究会の仲間がいたからなので。みんなばらばら、一人じゃできっこない。

おそらく再開するに当たっては、パイプラインとかバルククーラーをたぶん新しくしなければ許可が下りない。そうすると2、000万円、3、000万円投資して、この年でやるのはちょっと難しいな。そんなことを考えた。

仲間内も同じような考えで、ある程度高齢になって2、000万円、3、000万円投資して、それが回収できるかといったら難しいですね。特に最近聞いた話だと、牛って初妊牛といって、おなかの中に赤ちゃんがいる牛を買ってくる。それで生まれたら搾る。それは60万円です。今は100万円です。とてもとてもできないです。100万円で30頭、40頭買ったら、3、000万円、4、000万円でしょう。それはできない。

最近あちこちに酪農研修ということで、研修に行きます。最近は静岡県、三重県、その前は九州、その前は北海道。感じたのは、酪農というのは分かれていますね。餌をつくる組織と、搾る組織。大きな牧場は搾乳ロボットを2台ぐらい入れて搾って、餌づくりは外注で外に任せて、そこから餌を配達してもらって。この前、静岡に行ったら、それが本当に極端で。そこのおやじはなんにもせず、搾乳もできない。三重県に行っても、そうでしたね。餌づくりは餌づくり。搾る人は搾る人。世の中はこんなふうに変わってくる。

農地転用をして

ここから、太陽光パネルが見えるかと思うけど、平成15年だかに県の再生エネルギー課から復興事業の一環として太陽光発電を入れませんかと、ここの酪農家5軒に話があって、15haの太陽光発電を置いています。私たちは一応、地主。土地を貸しているだけ。20年契約で、最終的には20年たったら全部撤去までいたしますというのです。復興事業の一環として、農地転用をして太陽光発電所を作る。農地転用はすごくハードルが高いです。県が関わっていましたので、なんとなくできました。その時県の方から言われたのは、「半農半エネルギー事業をやってもらえませんか」。それは補助金が出ますと。どんなことをするのか。「なんでもいいから農作物をつくってくれ」ただし、それは販売してちょうだい。ですからここにトウモロコシを植えました。これは家畜用のトウモロコシで、全部ここに植えます。ここに1ha、向こうに行くと6haで7ha。一応7ha作ってくださいと声が掛かったのですけど、私一人じゃできないので、若い人にこういう話があるけどどうかと言ったら、「ああ、やってもいいよ」と言うので、その人に頼んだ。最初の2年はセシウムが出ました。25かな。一応、酪農組合は20以下です。25出て、全部捨てた。県の農業改良普及センターも指導に当たってくれましたので、土地の土壌を調べて、ここはカリウムとか言われて。そんなことをやっていたら、3年ぐらいで出なくなりましたね。ゼロ。今、彼は7haの他に、10何ha。たぶん増やして25haぐらい飼料作物を栽培して、販売しています。

この地域に戻ってくる人たちが少なくて、耕作放棄地になりつつある農地が多いですが、ああいうふうに飼料作物の供給地として、ここが生かされていくのだったらいいのかなという感じです。

参加者
今は輸入穀物を買わなくていいのですか。ここで作った飼料穀物を販売して、飼育してもいいのですか。

半杭
県の指導が入って、まず土壌を調べて、栽培する。収穫の時にサンプルを取って計量にかけてやります。だからもうゼロです。

参加者
酪農家さんは選択できるのですね。輸入にするか、地元の農家のか。

半杭
そうそう。彼は個人的に酪農組合を通して売っている。とにかく酪農組合を通しています。

参加者
すみません。率直に言って、農作物を育てるとどのぐらい県から補助金が出たのですか。

堆肥がない

半杭
10a当たり5万円。赤字分を補填する。20年間。これはおいしい話。だから彼は、もう25haぐらい売った。

酪農協同組合で、原子力災害で休業している方が60戸。1、000頭いた牛をその60戸が飼っていた。酪農協同組合では、今この地域に1、000頭の牧場を作ろうとしています。二転三転して、浪江町に決まったと思います。そこに1、000頭の搾乳牧場、それから研究施設、カナダのアルバータ大学、製薬会社の試験研究所もできるみたいですね。

浪江町の候補地、そこで井戸掘りをやっているのですけど、浪江町も原発から近いものですから、表土を剥いで新しい土を入れて、試験再開です。

ここの一番の問題は、家畜がいないので堆肥がない。われわれが野菜を作ろうとしても、堆肥がないのです。これが一番大変。1、000頭の牧場ができることによって、堆肥が供給される。これが一番いいですね。ましてや浪江町なんかは表土を剥いで、新しい土を入れたあとですから。たぶん剥ぎきれないでしょう。そういうことで私は、1、000頭の牧場に期待をしています。

参加者
柱の根本の削れているのは、全部牛がかじったのですか。

半杭
はい、そうです。

参加者
こんなにあるのですね。

どうしてこんなふうになったかはすぐ分かりました

半杭
この柱を見つけたのは、あの年の8月28日。環境省では、8、000ベクレル以上のものは埋設してはいけないということになって、家畜保健衛生所で全部測ったら8、000ベクレルはなかった。ですから8月28日から、この牧場で仮埋設が始まりました。

私と畜産農家の3人、それから土建屋さんとで牛を引き出していって、初めてその柱がああいう状態になっていたのに気付いた。引き出す前までは、あんなふうになっているのは気付かなかった。畜産農家ですから、どうしてこういうふうになったかはすぐ分かりました。やっぱりショックでしたね。3人でだんまりでした。

参加者
8月28日に20㎞圏内で出入りしたわけですが、それまでに家畜保健センターさんとのコンタクトは、まったくなかったですか。

半杭
ないですね。それどころじゃなかった。8月なんて、作業に行くのは警察と自衛隊（笑）しかいなかったですからね。時々福島と原町を往復すると、すれ違うのは自衛隊の車だけだった。

筑波
半杭さん、博物館でレプリカを作らせていただきましたが、それは。

半杭
ここですよ。

筑波
その経緯を、お話しいただけますか。

半杭
博物館の、鹿島の誰だったかな。森さん。森さんが柱を見せてください、寄付していただけませんかと来た。柱だから、寄付はできないよ、レプリカを作るしかないということで、レプリカを作ることになりました。

参加者
レプリカを作るという話をどう思われましたか。

筑波
この部分を作らせてもらいました。

参加者
ここは残されているのですか、この牛舎は。

私は壊せない

半杭
牛舎が残っているのは、仲間の5軒のうち4軒。1軒は壊しました。私は壊せない。気持ち的に。もしこの牛舎を取り払ったら、俺はうつ病になるかも分からない。自分の人生を否定されたみたいで。そんな感じがするよ。

私は子どもが3人いて、一時は大学4年、大学3年、大学1年と3人。地方から、東京とか北海道とか神奈川に仕送りして、3人分って大変。授業料なんか大変です。

その時は牛を売る。成績、データが出ます。この牛は生涯乳量がいくらで、脂肪がいくらでと、AランクからDランクまで出ます。Dランクの牛は肉に回す。授業料に変わる。この

day 2 スタディツアー

動物と震災

牛舎があったおかげで子ども3人大学を出せた。だから壊せない。

壊すと言えば、環境省で壊してくれました。今では遅いけど。本当に壊してくれる場合、スレートってアスベストが入っているから、処理が大変なの。だから壊してもらえばよかったけど、私は壊せない。

だから他の人も、5軒のうち4軒は残している。行ってみると、線香が焚いてあったりしますよ。やっぱり家族同然なのです、我々にとって。経済動物でもあるけど、家族同然なのです。会議があって、夕方ちょっと遅くなる。7時ごろ帰ってくると、牛がこっちを向いて、モーモー鳴いている。だから牛の気持が分かります。40年牛を飼っていると。そうだったから、家族同然であるし、牛に世話になって子どもを教育できた。壊せない。

参加者
もしね、あり得ないことですけど、3月11日の地震、津波の前に戻ったとして、これから地震と津波が来ると分かっていたら、牛たちをどうしたと思いますか。

半杭
うん。とにかく牛は放せない。牛舎からは放せない。放せば隣に迷惑がかかる。だって隣に野菜農家がいて、隣のレタスを食べていいよというわけにいかないものね。いかない。だから、牛舎に繋いだまま死なせた。とにかく隣に迷惑をかけたくない。

参加者
安楽死自体も大変なことですよね。3月15日に間に合わないですよね。

半杭
和牛農家の人は小頭数だから、避難する15日前に家畜商にあげた。ただで。もうどうしようもないから。我々は40頭も70頭も。それは家畜商だって処理できないし、20㎞圏内は本来持ち出し禁止。それをうまくやって和牛農家はさばいた。だから和牛農家と酪農家の気持は全然違いますよ。全然違う。

参加者
この牛舎の牛を埋めた後、自分の気持とか、他の牛の安楽死の手伝いとか、そういうのは、自分の生活に変化はありましたか。そういうところに取り組めた心境とか。

半杭
私はね、とにかく牛を置いて牛舎を出たじゃないですか。だから気持ち的に見殺しにしてしまったというのがあります。酪農家の人たちは、似たような気持ちでみんな自責の念を持っている。だからその償いとして牛さんのためには、ちゃんとしてやんなきゃいけないと思っています。

筑波
そうしたら、石碑を見に行きましょう。あっちに行きます。多少暑いけど。半杭さん、何を見に行くのか、ちょっと教えていただけますか。

碑を建てました

半杭
牛が餓死をして、みんな自責の念を持っている。悪いことをしたな、牛さんに対して悪いことしたなとみんな思っている。

5軒のうち、碑を建てたのは3人。大富酪農研究会でも作りました。大きな碑を。それでいいよという方もいます。でも私としてはね、それであってはならないと思う。やっぱり見殺しにしてしまった、餓死させたという思いがある。碑ぐらい建ててやろうという気持ちですね。それで碑を建てました。申し訳ないと思って。

餓死というのはさ、震災前もそうでしたけど、時々ニュースであるじゃないですか、お母さんが、お母さんといっても若いけどね、子どもにのり巻き一本置いて。そんな話。そんなニュースを見ていると、おまえ、子どもを産むなよと思う。それを自分がやってしまった。好きでやったわけじゃない。避難しろという、国の避難指示ですから、それに逆らうわけにいかなかった。そんな思いで碑を建てました。

牛舎の裏側、「無念」と刻まれた石碑の周りで

参加者
「無念」ということは何だと思いますか。

半杭
「無念」という言葉ですけど、ここの牛舎を捨てて、逃げる時、酪農組合、役所、家畜保健衛生所、世話になった獣医さんに、こういうわけで牛舎を離れますと電話しました。そうしたら獣医さんが、「ああ、無念です」と言った。それが頭にずっと残っている。おそらく、私が死んでもこの碑は残るし、やがて、この牛舎は、息子が取り壊すかもしれないです。でも、この碑はおそらく残る。50年、100年経っても残るだろう。だからここで、地震、津波、原子力災害があったことを、この碑が知らせてくれるだろうということ、牛さんごめんなさいということ。裏に、恨み辛み。

参加者
隣の小さい碑は何ですか。

半杭
猫がいたのです。牛舎に猫が10匹ぐらいいて、やっぱり死んでいました。お骨を拾った。犬は一人で生きられない。猫だったらネズミを食べたり、鳥を食べたりして、生きられるだろうと思って、猫は置いてきた。

参加者
「希望の牧場」で、牛を今も270頭ぐらい飼っている。それに対して、複雑な気持ちはありますか。

半杭
ありますね。20㎞圏内の牛は持ち出してはいけない、県外に。食べてはいけない。繁殖させてはいけない。じゃあ、これからどうするのか。

参加者
死ぬまで何とかするのですかね。

半杭
うん。だからあのぐらいの敷地だったら、安楽死させて、ゼロから新しく繁殖和牛の牧場にすればいいと思う。もう新しく繁殖はやり直す。

参加者
それは経済動物として再生させようという。

半杭
はい。50歳、60歳、70歳まで飼うのでしょうか、牛を。牛が年取っていくじゃないですか。いつかは死ぬわけでしょう、牛だって。100歳まで生きないから。

参加者
牛、たぶん20年ぐらいですね。

半杭
それ考えたら、新しく再スタートしたほうがいいと思います。今、ここで生きものを飼うことはためらいがち、どっちかと言ったら、酪農家の人たちは。また原発で、変なことがあったら、もう一回牛を置いて逃げなきゃなんないべ。俺はあの思いは二度としたくねえっていうのが、みんなの気持ち。だから生きものを飼いたくないって。

参加者
1、000頭っていうのは、主体はどこですか。

半杭
福島県酪農共同組合の上部団体があって、全国酪農共同組合連合会。その二つがやりたい。

参加者
地元の方は参加するのですか。

半杭
参加して欲しいけど、どこまで参加するか。今は1、000頭の牧場って珍しくないそうです。コンビニを建てるのと同じだそうです。そういう感じ。

参加者
そこで搾った乳が、流通に乗るか、売れるかという問題がありますでしょう。

半杭
大丈夫だと思うよ。飼料作物全部チェックしていますし。酪農共同組合でしています。1、000頭の牧場、すべてロボット。ロボット搾乳。たぶんすべてロボットだと思う。餌は国内。

この前ね、静岡県の浜松酪農共同組合のTMRセンターに行ったら、ベトナムからサイレージを輸入しています。それが国産よりいい。デントコーンってトウモロコシ。エエッと思った。我々の作っているのよりいい。たぶん企業が行って、指導していると思うけど、だからベトナムからサイレージが入ってくると思った。今そういう時代。前に、旭川に行ったら、旭川の人が、「うちのサイレージは静岡県に売っている」っていう話を聞いた。ベトナムからサイレージ、そういう時代ですよ。

参加者
ちょっと話が変わりますけど、「原子力エネルギーがまだ経済的だから、まだ通用します」と言っていますけど、どう思いますか。低コストで、経済的に消費者に提供できるから、「もしそれをやめちゃったら、みなさん大変お金かかりますよ、低コストだよ」と言う。だけど、これだけの被害、大変な代償だと思う。東電とかね、日本政府のやっているエネルギー全部やめたらどうかと思うのですが、どう思います。

半杭
どうでしょう、全部やめるというのはどうでしょうか。

参加者
ドイツなんかやめることにしています。

半杭
ドイツは、フランスから原発のエネルギーを買っているでしょう。

参加者
最終的にやめようという方向に急速に向かっているみたいですよ。

半杭
そりゃあ、ノーともイエスとも言えない（笑）。

筑波
じゃあ暑いので、バスの中に行って、半杭さんと質疑応答にしましょうか。

石碑見学後、車中で

管
お話ありがとうございました。現場の生の

体験の声をうかがわない限り我々は知らなかったことばかりですし、文字に残ることもおそらくなかったでしょう。ありがとうございました。特に、僕が非常に心に残ったのが、一頭だけ生きていた子牛の運命、その後どうなったのでしょうね。

半杭
試験研究機関で連れて行ったと聞いています。

管
それを想像するだけでも、ずいぶん色々なことを考えさせられる。さらにその親牛とか一頭一頭のことを考えると、自分たちの知らない世界がまざまざと広がる思いです。

筑波
この機会に半杭さんに何か聞いてみたい方がいらっしゃいましたら、どうぞ。

参加者
もしマニュアルみたいなものがあれば、もう少し早めに苦しませることなく看取れたのかなと感じたのですけど。マニュアルを実際に作ったほうがいいとか、そういう意見はありますか。

半杭
今度、浪江町に1、000頭の牧場できますね。原発が廃炉に向けて40年かかると言います。1、000頭の牛を例えば安楽死措置をするとなると、これまた大変です。1、000頭の牧場の牛をトラックに積んで避難するのも、たぶん大変なこと。なかなか難しいと思います。酪農家であっても、安楽死に必ず同意する人もいないかもしれない。同意が嫌だって方もね、かわいそうだって。

和牛農家と酪農家で違いますよ。和牛農家の繁殖和牛なんか、名前を呼ぶと寄ってくる。乳牛は名前を呼んだって寄ってこない。繁殖和牛は寄ってくる。震災の直後、ある繁殖農家の方は、北海道の農家に売ったの。ここから北海道に移った人が札幌にいるのですけど、その方がその情報を聞いて、大樹町かどこかに行って、名前を呼んだら来たって。和牛と乳牛と肉牛と全然違う。酪農やめて繁殖和牛はどうかって話しが改良普及センターからあるけど、我々が船乗りになるみたいなものだよ。全然違う。

参加者
碑で「無念」という言葉が使われています。「無念」という言葉がすぐにこれしかないと選ばれたのか、本当は違う言葉が心にあってその中からこの言葉を選んだのですか。

「無念です」

半杭
うん。それしかなかった。ここを離れる時に、行政、酪農組合、それから家畜保健衛生所に「牛舎を離れます」と電話をして、最後に開業医の獣医さんに「先生、お世話になりました」と言った時、電話の向こうで「無念です」って。それが、ずっと頭に残っていた。それで碑を作るとき、この言葉しかないという感じでした。

参加者
先ほど碑のところで、電力に関して原発はやめたほうがいいですか、と質問された時に「それは簡単には答えが出ない問題だ」とおっしゃっていました。こういう大きな代償を払わされ、無念で仕方ないという気持ちだと思うのですけれど、それでもやっぱりその原因を作った原発に対してはすぐに廃炉にすべきだとか、そういう思いではないのですか。

安全神話で ずっと生きてきた

半杭
今回の原子力災害、あれは完全に東電さんの間違い、ミスだったと思います。東電の油断だったと思います。それは感じます。だから原発がいいとか悪いとかそこまで私は思っていない。いいとか悪いとか。とにかく原発災害は東電さんのミスだと思っています。油断でしたね。私のいとこが女川にいるのですよ、女川原子力。聞いたら「いや、女川もやばかったよ、あと何10㎝だったよ」って言います。女川もやばかった。原発を色々な電力会社がやっているわけですけど、やっぱり油断があったのではないか。防波堤を造るとかなんとかって言っていますけど、結局油断があったと思います。

我々はずっと安心安全と、安全神話で教育されてきました。まだそういうことを思っているのですよ。私も70歳になるわけですけど、ずっとそれで通ってきましたから、安全神話で。それをいまさらおかしいだろうと言われても、そういう教育を受けてきた。教育じゃないけど、安全神話でずっと生きてきた、何十年も。

ただ、今回の原子力災害は東電さんの油断ですよね。いとこの女川の原発に勤めている人もいるけど「やばかったよ」と言う。やっぱり油断があると駄目ですね。全てなんでも油断があると駄目。

私の叔母がアメリカのシカゴにいる。ここの状況を知っていて「もうお前は半杭としてやることをやったのだから、気分転換にシカゴに来なさい」と言われて、シカゴに1ヶ月くらいいた。そのとき驚いたのが、日本車が60％くらい走っていますね。ヨーロッパが20％。アメリカ車が20％くらいね。2018年のアメリカ国内におけるアメリカ車は21％だそうです。自動車大国じゃないですか、もともと。なんであんなになったかって言ったら「油断したのでしょうね」と。アメリカは油断した。油断はやっぱり禁物だ。そんなふうに感じます。

参加者
育て方で牛の反応が違うと言われましたが、酪農と和牛の農家との違いがあって、一人一人名前があるとか。酪農で餌を一人一人に配るわけではないのですね。機械的にやるのですか。

半杭
はい、機械で配ります。

参加者
名前がついていないのですか。

半杭
横文字で、例えばオーガスタなんとかって名前。冠名が付いていて、お父さんの名前とお母さ

んの名前が一字ずつ付く。和牛農家の方がここに来ていて、一緒に飼料を管理していた。その方が「みどり」と呼ぶのですよ。みどりが走ってくる。本当に違いますよ。「みどり」って呼ぶと走ってきますから。

参加者
酪農をされていて、名前を呼んでも来ないのですか。

半杭
来ないよ、来ないです。

参加者
みんなわからないのかな。数が、頭数が違う。

半杭
そうですね、繁殖和牛ってそんなに数を飼っていませんから。

参加者
今、お子さんたちはいないのですか。お子さんたちは、跡を継ぐのですか。

半杭
長男は東京にいます。東京に行く前は、福島県の農政部にいました。農政部の後、東京農大で教員をやっています。長女は高校の教師をしています。一番下の末娘は全日空にいます。

参加者
もう一つ、小さな質問。先ほど管先生が聞かれたように子牛が残っていたというのが衝撃的。3ヶ月ですよね、お母さんは亡くなっている。子牛は3ヶ月近くお母さんのミルクを飲んでいたのですか。どのくらい生きられますか、飲まないで。

半杭
ある程度、1ヶ月くらい飲むと、3月、4月、5月になると草が出てきますから。たぶんその若芽を食べていたと思います。牛舎の外に出ることができましたから。

参加者
小さいから、出られた。

半杭
できました。でもお母さんのそばを離れなかった。

筑波
木村さんからぜひ一言。

参加者
木村です。今日はありがとうございました。一つ質問です。「無念」という碑があったのですけど、やはり同じことを繰り返したくないという思いが強いと思うのですが、同じことを繰り返さないために一体何が必要だと考えておられるでしょうか。

自分への戒めとして

半杭
私は、あの柱を写真に撮ってずっと持ち歩いています。申し訳なかったという気持ちなのです。もう一つは、自分への戒めとして、こういうことは二度と起こって欲しくない。そういう気持ちで鞄に入れて常に持ち歩いています。

やっぱり原発に恨みはないですね。原発を安全にちゃんと動かしていたら、ちゃんとそれなりの油断なく、事故のないようにしていたら、ああいうことは起きなかったと思います。何回も言うけど、東電で油断があったのだと思います。現場に。それは東電ばかりじゃないかもしれませんけどね。こういう災害が、チェルノブイリの次に起こってしまった。それぞれの企業が油断してはいけないなと思います。

参加者
今日は大切なお話をありがとうございました。半杭さんは、1、000頭の牧場ができたり、あるいは、なんらかのきっかけがあれば牛をまた飼おうと思いますか。酪農をしようという気持ちはありますか。

半杭
私自身は、もう個人では牛は飼えないと思います。気持ち的なものもありますし、投資する金額が大変だと思います。

この前、三重県に行って色々なところを視察しました。高齢者の方、40頭規模の方が5人、一回やめて、また立ち上げた。200頭の牧場を借り切って立ち上げた。今は、色々な企業からファンドを集めて、それで再生していくのですね。北海道に行っても九州に行っても餌つくりと、搾る人はもう分かれてきています。静岡もそうだったし、三重県だってリタイヤした人が貸し切って、色々な企業からファンドを募ってやる時代だなという気がいたします。

ファンドを募ってやる時代

今度の1、000頭の牧場は、全国酪農協同組合連合会と福島県酪農共同組合でやりますが、もっと色々なファンドというか。三重県の場合は銀行が投資しています。銀行とか機械屋さんとか多くの企業がファンドを作ってやっていました。もうそういう時代なのかと思います。だから個人でやる気はしません。

参加者
もう一つだけ。ファンドという話しが出てきました。牛たちは生きものですよね。その生きものを完全に僕らは商品化しているということに対して、半杭さんは当然というか、答えは出ているということでしょうか。今回の震災のことも、死んでしまったことも含めて。

半杭
ここで酪農をやる気はもうしないです。年齢も年齢だってこともあるけど。でも、三重県に行った時に話を聞いて驚いたのが、トップになったリーダーが80歳だそうです。辞めた時はしゅんとしていたけど、今度は背筋を伸ばしてやっているそうです。

だからわれわれもよく笑うのですけど、トラクターがおもちゃじゃないけど、トラクターに乗るのが大好きで、トラクターに乗ると生き生きしてくる。そういうところがありますね。ですからこういう飼料栽培を大きくして、この地帯を飼料基地として県内の畜産農家に供給できる体制を作っていきたいという思いはあります。

筑波
すみませんそろそろ時間となってまいりました。レプリカ作らせていただきました。あれは会津の地で展示することもできますので、会津の人たちとも一緒に考える場づくりができるようになったと思います。今度はぜひ会津にお越しいただいて、こういう場を共有できればと思っております。本日は本当にありがとうございました。

半杭牧場を出発、道の駅「南相馬」へ。バス車内

筑波
何か一言ずつご感想と、今後へのヒントをいただければと思います。

特例的に馬だけは

二上
南相馬市博の二上です。今日行った所は、話には聞いていました。南相馬でも有名なところだったので。あらためて足を運んで、僕も博物館の学芸員ですので、将来に伝えなきゃいけないことをまた一つ再確認した。

ちなみに、馬は20㎞から外に出されたのです。他の家畜、鶏とか豚とか牛は20㎞圏内のものは殺処分になったのですけど、馬は相馬野馬追という伝統行事に寄与するので。特例的に馬だけは外に出された。

小林
馬たちは戻ってきたのですね。

二上
馬たちは北海道の日高に行ってお世話になったりして、戻ってきて今でもこの辺で飼われている子たちもいるみたいです。

参加者
飼い猫、飼い犬はどうですか。持ち出しだめだとか、避難をした時に。

二上
家畜、食するもの、そういうものに限ったのではないでしょうか。私もそんなに詳しく分からない。愛玩動物については大丈夫だったでしょうけど、馬も一応家畜の類いに入るので、最初は「だめ」といわれていたのが、特例的に認められたらしいです。

仲川
同じ市内でも、お話を聞く機会が今までなくて、非常にいいお話を聞かせていただきました。私は震災の時に神奈川にいたので、ネットを通して福島の状況を見ていたのですけど、「さっさと全員避難すりゃいいじゃねえか」とか、そういう言論も、生で聞いていた。なんてひどい暴言だと思いつつ、地方の人たちのなりわい、文化は、土地という動かせないものに依存しているので、原発に限らず、不安定なところでは、そういう土地に依存したなりわい、文化は非常にやりにくいのだなと、あらためて今回のお話で思いました。大切な機会、今日来てよかった。ありがとうございました。

分断が起こった

参加者・井上
焼却施設も、半杭さんのお話も、南相馬に暮らしていながら初めてでした。僕自身も南相馬市小高区に今住んでいて、20㎞圏内で住民がゼロになったところから、どうまちづくりをしていくかという活動をしているので、すごく参考になりました。

一つ印象に残ったのは、「原発を単純にイエス、ノーでは言えない」と半杭さんがおっしゃっていたこと。あれだけの被害を受けたのにはっきりとおっしゃらないところが、問題の複雑さを表していると実感した。原発内で働いている人もすごく多かった。これは聞いた話ですけど、住民の方が避難して、4月21日以降入れなくなって、何かものを取りに来たりする時に、東電の方が「申し訳ございませんでした」と、バリケードで謝っている。その謝っている人も地域の人、それを怒鳴りつけているのも、避難していった地域の人。本当に見るのがつらくなる景色があったと聞きました。双葉、大熊の痩せた土地に建てられて、雇用、経済を生んで、地域の人も働いて、ああいう事故が起こって、そこで分断が起こった。その問題の複雑さがあるなと思って、単純にイエス、ノーでは言えないというところを、色々考えさせられる機会でした、ありがとうございました。

参加者・渡邊
4月に浪江に住み始めました。今日お話を聞けたのもすごく貴重で、浪江の人も何人ぐらいこういうことを知っているのか分からないですけれど、知らないことだらけだなと、今日

動物と震災

day 2 スタディツアー

お話を聞いて思いました。こういう機会をつくっていただいて感謝しています。ありがとうございます。

昨日「廃炉フォーラム」というのに参加して、楢葉町で再開したおそば屋さんで食べていた時に、来ていた家族の方の娘さんの「今、1Fで仕事をしている」みたいな話を聞いた。複雑に利害関係が入り乱れている。原発の関係で仕事をしている人も6割が地元の人、そういうのが現状。

もっともっと知らなきゃいけないことがいっぱいある。関心を持ってずっと発信していきたいと思っています。もし浪江に1、000頭の牧場が出来ることになったら、こういった機会を作って欲しいと思います。

教訓をどう導き出していけばいいのだろう

参加者・喜浦

大熊町の喜浦です。焼却施設も半杭さんも、震災のこと、特に今回はどちらも命に関わるところで、殺した、殺していない、逃がす、逃がさない、放射線一つでも色々な意見がある。あれだけきちんと自分の気持ちを話してくれたのがすごい。よくできるなと、地元にいて思いました。

私も県外出身なので震災を経験していないですけど、大熊町の震災記録誌を編纂していて、何ができたのか、あの時もっとベターな回答があったのかと思うのですけど、聞き取ってもわからなかった。別の手段を選んでいたらもっと良かったかもしれないけど、もっと最悪なことがどこかで起きていたかもしれない。そういう可能性を最後までつぶせなくて、教訓を作れなかった。社会との関係性とか、すごく難しいことがあるというのを聞きながら思って、ここから教訓をどう導き出していけばいいのだろうと思いました。

筑波

どうもありがとうございました。ライフミュージアムネットワークのこういったディスカッション、ツアー、まだ続きます。秋に大熊町でも企画しておりますので、またご案内したいと思っています。次は大熊町のDNAを探る、みんなで考えたいと思います。

南相馬「道の駅」で一部参加者下車・休憩後、福島市へ。

生田

生田です。被災動物についてまとめた箇所が『いのちへの礼儀』にあるので、その該当箇所をしばらく読ませてください。詳しい方もおられると思いますけれども、何かあったら教えてください。

「震災前の20㎞圏内にあった農家戸数と家畜数は、牛が約300戸で約3、500頭、豚が9戸で約3万頭、鶏が9戸で約44万羽とされます。しかし、家から放されたペットとちがい、家畜たちは基本的に牛舎やケージに閉じ込められ、そこから出ることができません。

畜舎に閉じ込められた動物たちは、次々と脱水し、餓死し始めました。数万頭の豚たちは、雑食性であるため、飢餓に迫られて衰弱した仲間の肉を食べるなど凄惨な状態となっていきました。また、鶏が密集していたケージは停電したため換気扇が回らず、密室構造のため排泄物の有毒なアンモニア濃度が上がり続けました。断水により給水器も止まり、鶏たちは脱水症状で衰弱死していきました。牛たちも、牛舎でつながれたまま餓死していきました。」

以下は、太田康介さんの『のこされた家畜たち（のこされた動物たち）』から引用します。

「人づてに放置されたままの家畜がいることを聞き、浪江町にある牛舎を訪ねてみることにしました。

現地に到着し、静かで不気味な雰囲気を感じながら歩を進めていくと、私の足音を察知したのか、牛たちがいっせいに鳴き始めました。中をのぞいて言葉を失いました。

そこは、地獄でした。異臭が立ちこめる牛舎では、50頭ほどいた牛のうち三分の一はすでに息絶え、かろうじて生きている牛はみなやせ細り、私に向かってしきりに鳴くのです。足腰が弱ってへたり込んでしまっている牛もいます。

大昔から人間は家畜を飼育してきました。私も肉は食べますし、それを否定するつもりはありません。でもこの惨状を招いたのは、原発の事故なのです。

死に方で一番苦しいと言われる餓死。彼らは、訳もわからず、放棄された牛舎で糞尿にまみれ、仲間の死体を見ながら死んでいくのです。ここが地獄でなくて、なんなのでしょうか。

せめて、せめて安楽死を彼らに与えてやってほしい。自分勝手な考え方ですが、このときも、今も、そう思っています。これほどの無力感を感じたことはありません。」

引用、終わり。

事故以降20㎞圏内の乳牛は、放射性物質に汚染されていると判断され、牛乳を出荷することはできなくなりました。もちろん、食肉として屠畜するはずだった豚、牛、鶏も出荷できません。

4月24日、福島県は警戒区域内に残る瀕死の家畜を殺処分する方針を発表し。5月12日、国も放射性物質の拡散防止のため、警戒区域内の家畜について、畜主の同意を得た上で全頭殺処分する方針を出します。これは、行政による被曝動物の「最終解決」と言うべきものでした。

以下、針谷さんの引用。

「かつて私が相談した元農水省職員は、被曝牛のことを「動くがれきだ」と言った。一刻も早く、警戒区域内の家畜を全頭殺処分したい。それが彼らの偽らざる本音なのだ。」引用終わり。

鳥インフルエンザに感染した養鶏場の鶏を感染拡大防止のために何十万羽も殺処分することはたびたびあります。しかし、インフルエンザと違い被曝は感染するわけではありません。殺処分は、被曝動物の存在を「許さない」ということを意味します。

放浪している牛の殺処分は、警戒区域に柵を作り、牛を囲い込み、飼い主に同意させるという手順で行います。こうした被曝家畜の殺処分は、飼い主に深い傷を残すものになりました。

以下、阿部さんの本の引用です。

「9月末、私は福島を訪ねました。今は仮設住宅で暮らす酪農家のご夫妻から、こんな話が聞けました。「最近、生き残った牛が次々に処分されてるんだよ。安楽死って言われてっけど、安楽死なんかじゃないよ。死にきれなくて鳴く声は、今までに聞いたことのない苦しい声だよ。その声、なんべんも聞こえてきた」。口の重かった奥さんも、私が帰る頃になってようやく口を開きました。牛舎をチラッと見たらば、足を広げて死んでる姿が見えて中に入られんかった、牛はなんにも知らないのにさあー、なんでこんな目にあわせられたんだか…」。ご主人は各牛舎で死んだ牛の慰霊碑を建てたいと語っていました。国は生き残った牛を養っていくことで、人間が起こした大失敗を、動物の死で終わりにしようとしたあやまちを償うべきだ、と私は感じました」。

引用、終わり。

農水省によれば、震災から約1年が経過した2012年1月31日時点で、対象農家のうち半数以上が殺処分に同意しました。そのとき、すでに鶏と豚は餓死、または殺処分によりほぼ全滅し、乳牛の大半と肉牛の1割程度が餓死していました。しかし、殺処分の決定に対しての農家からの反発は強く、2012年3月時点の警戒区域内で千数百頭の牛が、まだ生存していました。

これが震災後約1年の経過です。

有害動物の処分場ですけど、意外だったのが、鹿が全然出ない。これは、地域的にそうなのでしょうか。

日本中で、今、鹿とか猪の殺処分が続いています。つまり山のなかに鹿が溢れかえっているのです。鹿による被害が増えてきて、2012年には46万6、000頭が捕獲されて殺されている。猪は42万6、000頭。2014年には鹿58万8、000頭が捕獲されて殺され、猪が52万600頭殺されている。あそこは、被曝の問題もあったのですけれど、日本全体で鹿とか猪をものすごく殺している。

「森林飽和」

なぜかと言うと、一つには、日本の森林が今完全に放置されて緑豊かになっている。日本はもともと木造建築の国で、特に都があった近畿圏では木をバッサバッサ伐って、はげ山が普通だったのです。江戸時代の絵を見ると、たいがいはげ山になっている。木がほとんどなくて、そのために野生動物もあまりいなかった。それが明治以降も続いたのですが、戦後になって木を使わなくなって、「森林飽和」と言われるように、山の森林がすごく豊かな状態になったのです。

「野生動物の隣人化」

同時に里山が放置されて、山と人間の境界がなくなってきた。これは「野生動物の隣人化」とも言われる状態です。そのために山に住んでいた熊や鹿や猪や猿たちがどんどん人里に下りてきて、農作物を荒らす事態が起きています。

これは、海外ではあまり起こっていない。なぜかというと、海外には狼がいるからです。狼は鹿や猪を食べるので、本来はそんなに鹿や猪が増えるわけはないのです。けれども、日本では明治以降、「皇国化の妨げになる」という理屈もあって狼を殺しまくりました。100年ほど前に、狼は絶滅したのですが、そのために鹿とか、猪とかの中型哺乳類にとっての天敵が人間以外にはいなくなった。第一次世界大戦の頃には、人間が毛皮の確保のために、結構鹿、猪を撃っていたのですが、その後は放置したので、ますます鹿、猪は増えてきた。

また、本を読みます。

「鹿は、明治から戦後にかけて毛皮を目的とした乱獲が起こり、絶滅が危ぶまれるまでに生息数が減りました。この時期、人間が鹿の天敵だったのです。しかし、1947年に鳥獣保護法によって雌鹿の狩猟が禁止され、天敵がいなくなった鹿は一転して増えていきます。さらに、第二次大戦後、「薪・炭から石油へ」というエネルギー革命と「落葉落枝から化学肥料へ」という肥料革命、さらに安価な外国木材の輸入自由化によって、1960年代半ば以降に森林は人間から放置され、「森林飽和」と言われる鹿や猪にとって良好な生育地が増えていきました。こうして、1990年代から2013年にかけて、ニホンジカの生息固体数は3～7倍に増えて305万頭程度になりました。（環境省によれば、鹿は2025年度に約500万頭になる）。

1990年頃から、多くの鹿が森林の幼木や樹皮、下草を食べ続け、荒らされた斜面が土砂崩れを引き起こし、森林が再生せずに裸地化し土壌浸食が起こるようになりました。鹿が植物を食べ過ぎるため、植物に依存する昆虫が減り、昆虫を食べる鳥類も減りました。野生生物による森林被害は全国で8、000haにおよびますが、そのうち77％が鹿によるものです。増えすぎた鹿による土壌と植物に対するこうしたダメージは「森林生態系の根幹を揺るがす事態」と言われています。

ということで、どんどんハンターが鹿や猪を撃っている。しかし、日本のハンター数は激減しており、狩猟は鹿の増加に追いついていません。よく、猟師仲間では、猟師は熊以上に絶滅危惧種だと言われているみたいです（笑）。しかも捕獲された鹿の9割は埋められ、焼却処

分されています。捕獲鳥獣全体では、捕獲現場等での埋設処理が約8割、ゴミ焼却場等での焼却処理が約5割、食肉需要が約1割です。

命を奪っておきながら

食肉需要が進まないのは、罠にかかって、とどめをさすのに時間を要した動物の肉は水っぽく、淡い色をした蒸れ肉となり商品価値がなくなる。野生であるため、獲った時期や年齢などによって品質に大きなばらつきがある。捕獲後の処理に手間がかかるため、外国産の鹿肉や猪肉よりも価格が高い。捕獲した現場で、血抜き、解体、移動などの作業を猟師一人で行うのは困難などのためです。この現状について、研究者の横山真弓は、「命を奪っておきながら利用しない生物は現代人ぐらいだろう」と言っています。

あの処理場を見て思ったのですけれども、あそこは被曝の問題で特異だとしても、日本全国でまったく同じことが起こっています。狼を絶滅させて、鹿や猪がいっぱい増えちゃった。で、その動物を殺さないといけなくなっちゃっているけれども、里山の放置などの影響もあって、殺して、全部食べずに焼却したり埋めたりしているというわけなのです。

ジビエ料理というのはすごく高いです。なぜかというと、今は工場畜産で、工場のように同一の遺伝子を持った動物を大量生産しているから安くつくのです。でも、考えてみれば、日本人は鹿と猪を主に食べてきたのですが、当時はみな野生肉、つまりジビエだった。

野生のものを獲って、色々品質にばらつきがある肉を一生懸命食べてきたけれども、それはある程度高くつくのは仕方がないと思うのです。でも、現代人はそれをまったくしないので、焼いたり埋めたりして命を殺しているということになっている。そうしたことを、あそこであらためて思いました。

動物と人間との共闘

管

生田さん、ありがとうございました。生田さんの、『いのちへの礼儀』が出るということを木村友祐さんに聞いて、友祐さんに頼み込んで、ゲラのコピーを送ってもらった。それを読んで、これは本当に重要な本だと思って、すぐに『週刊朝日』で書評を書かせてもらうことにしたのです。みなさん、もしもまだだったらぜひ。この本はお薦めします。必ず一度は読んで欲しいし、周囲の人たちにもぜひ薦めてください。

というのも、動物と人間との関係を見直さないかぎり、我々の社会そのものにたぶん未来はない。未来がたとえ続いたとしても、ものすごく嫌なものを抱え込んだままの社会になっていくだろうと思います。生田さんがいみじくも動物と人間との共闘が必要だと言っている。僕もずっと前から考えていたのは、まさにそのことです。

狼の再導入。これを言うと必ず笑われるのですけれど、僕は本当に必要だと思っています。1904年に奈良で目撃されたのを最後に、ニホンオオカミは姿を消したと言われている。柳田國男の『遠野物語』には、狼の群れがある時、北に向かって走って去って行くという、非常に短い章がある。それがニホンオオカミの絶滅そのものを語っている、そんな話です。これによって、生態系が崩壊したのと同時に、人間達の精神的な体制も、たぶん非常に大きな影響を受けることになっていきます。というのも、僕は最近になっていよいよ思うのですけれど、日本は近代の150年を、全然精算していないどころか反省もしていない。いわゆる「富国強兵」「殖産興業」という言葉は、小学生の高学年くらいからみんな一度は耳にしているし、なんとなくその内容を真剣に考えることもないままにずっと過ぎてきたと思うのです。

まさに、この言葉が今も日本社会を呪縛していて、全てがその回路に向かって組織されている。そんな世界に我々は生きている。それに穴を開けるための、一番確実な道は、僕は動物との共闘だと生田さんの刺激を受けて思っています。

夢物語みたいなことばかりですけれど、文学はやはり本質的に遅れてやってくるものです。例えば、今日の体験について、今、何か話せと言われても、なかなか話しづらいのです。

でも、あえて言ってみるならば、焼却場で一番考えたのが、動物の死体の処理の仕方としても焼却というのは、あまりいい方法ではないのではないかと思いました。それは、人間の死体の処理の仕方にも関わってくるのですけれども、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、アメリカのワシントン州では、最近人間の死体を、コンポスト的により分解して、それを肥料として使うことが合法化されました。これは、ある種非常にいい解決策であって、例えば樹木葬ということをみんな言いますけれども、樹木葬と呼ばれているものの大部分は、実はいったん火葬にしたものを、灰をただ樹木に撒くみたいなことが多いようです。それよりも実際に人間の体を組織している色々な分子を、もう一度ほかの生命に役立ててもらうことのほうがずっといいような気がします。そんなことを、まず焼却場では思っていました。

そして、牛舎では、さっきも言いましたけれども、たった1頭残されて生き延びた子牛のその生命がいったいどういうものなのかということに、非常に大きな衝撃を受けましたし、これからも考えていかざるを得ないというふうに思っています。

国家がどこにお金を使うか

さっきの、「殖産興業」「富国強兵」の話に戻りますと、日本がここまで軍事費を野放しに増大させる時期がやってくるとは思わなかった。それを一番端的に表わしているのが、今年トランプが来日したときに、F35ステルス戦闘機を105機購入するという約束をした。もともと話としてはあったけれども、その規模で買うとは誰も言っていなかった。3月の段階で、ドイツが購入を取りやめた。「あんな欠陥機は買えるか」と言って。そうしたら、そこのだぶついた部分を、まるで全て日本が引き受けるのが当然だと言わんばかりにトランプが売り込んで、それを承諾した。その裏でいったい何が行われているのか分かりません。1機当たりいくらすると思うと学生に聞いてみると、「1億円ぐらいですか」とか、「いや、もっとするでしょう、5億円ぐらいでしょう」とか、色々な数字が出てくるのですけれども、答えは140億円です。

1機140億円が105機。僕は計算が苦手なのでしませんけれども、それがあれば、例えば奨学金ローンで苦しんでいる学生たちの奨学金を全てチャラにすることだってできる。要するに、国家がどこにお金を使うか。これは、当然消費税の増税と、企業に対する優遇措置とそういったことにも関わってくるのです。

明治以来続いてきた、いくつかの公害をうみ人々を大変に苦しめてきた企業の論理、それにすっかり乗っかった政権が、なぜここまでいつまでも続き得るのか、疑問とともに、ある種の怒りを覚えざるを得ません。

そして、それは同時に、例えば河川が必要以上に護岸工事を施されて、単に水を流すだけの水路にされてしまい、あるいは、さっきも南相馬の海岸で目撃した、以前はなかった規模の防潮堤が造られて、あそこまで海のそばに行きながら、結局我々は海面を見ることもなく帰ってきた。これも大変に残念なことであると同時に、何かが我々を国土の本質的な何かから大きく隔てているということを、あらためて思わざるを得ませんでした。

そして、こうした全てが、発展を中心としてお金が回っていくことを最善の価値として運営されてきた過去150年の日本の結末だと思う。これに対して、何か「そうじゃないだろう」ということを言わずには、僕らもこの世を去るまで、まだつかの間のこの時間をどうやって生きていくのか、もう一度考え直さなければいけないと思いました。そして、それが実は動物の命にも大きくつながってくる。牛舎で死んでいった牛たちが、我々に教えてくれる大きなものがあるとしたら、そこにはそんな考え方も含まれると思います。

狼が静かに、静かに生息域を取り戻しつつある

狼の再導入についてもう一度言いますと、アメリカのイエローストーン国立公園の狼再導入は非常に成功した例だと言われています。狼を再導入することによって、さっき話に出た通り、例えば鹿を食べるようになる。狼は実は非常に近い種ですけれども、コヨーテも殺しちゃうのです。そうするとコヨーテによってそれまで狩りの対象になっていた小動物たちの数が増える。鹿が食べられることによって、若芽が大きな木に育っていくチャンスが生じる。それによって川の流れが安定して川の生態系が回復する。そうした事例が報告されています。

ヨーロッパでは近年、狼が静かに、静かに生息域を取り戻しつつある。イタリアをはじめ、チェコスロバキアやポーランドで、狼がこれまでいなかった地域での目撃例が報告されているようです。日本の場合は、残念なことに島国であるということから、誰かが積極的に、どこかの段階でそれを決意して、国家プロジェクトとして再導入しないかぎりはあり得ないこと。でも、それをやらないかぎりは、さっきから言っている150年の近代の精算は我々にはできない。というふうに非常に単純な考え方だけれども、本気で思っています。そんなところで、友祐さんにお渡ししましょうか。

参加者

さっき読まれたのは、誰の本ですか。

筑波

生田さんです。

参加者

生田さん。本はもうできているのですか。

生田

はい。『いのちへの礼儀』です。

想像力を働かせなきゃいけない

木村

すみません、管さんの話しを受け継いで話すことはできませんので、今日見たことで、感想を伝えたいと思います。

まず、有害鳥獣焼却施設、今日焼却したばかりの台がありましたけれども、まだ熱を持っていた。新しいというのもあり、焼却という生々しさは払拭されている。冷凍庫を開けたときの死臭、まぎれもなく死臭が、唯一生々しいところで、そこから先はただ焼いて骨になる。これは人間の火葬場もそうですけれども、そこに行っちゃうと、何かクリーンなまま灰になっちゃうような感じなのです。

だから、想像力を働かせなきゃいけないと思う。あそこの冷凍庫に猪たちの死骸を入れる時、もちろん死んでから入れると言っていました。たまに、持ってくる人は、小動物を生きているままを持ってくる人がいるらしいですけれども、その人には、施設の人は「それをなんとかしてくれ」と言うらしい。何をどうするのかは分からないけれども、殺した状態で、それから冷凍庫に入れる。

みんな、どうやってそれを殺しているかというと、「水に入れるみたいですね」と言っていました。結局、捕まえたネズミを水に沈める

ようにして殺しているのかな。そういう部分が、本当の生々しいところかなと思います。だから、想像力が必要。

これは、半杭牧場でも思ったこと。もはや死体も全部片付けられている状態で、柱を見せられて、その柱を見てたしかに「わあ」と思うのですけれど、でも、どれだけその時の牛たちの苦しみを感じられるだろうか。あの時間の中で、じっとくぼみに向き合えば感じられるだろうか。でも、やっぱり想像力を働かせないことには、もはや当時の牛たちの気持ちに近付けないと思うのです。だから、あれを見て「わあ」だけでは、やっぱり忘れてしまうのではないかと思う。たぶん、あのくぼみの意味を、ずっと心に抱えて考えたほうがいいと思います。

現地の複雑さ

最後に、やっぱり半杭さんのお話は、なかなか複雑なものを残すというか、すっきりしないものを残すなと。「東電さん」という呼び方をして、どこか許す。「油断した」という優しい言い方で言う。やっぱり、それは現地の複雑さだと思うのです。それを一概に、どうのこうのと外からは言えないですけれども。1、000頭の牛を飼育するという枠組み自体にも、なんとなく別に疑問はなさそうな感じですね。それを問うてもしょうがないのでしょう。やはりその点でも、現場で実際に酪農してきた方のお話としての重みと複雑さを僕は感じました。以上です。

筑波

では、また、一言ずついただきたいと思います。どう回していきましょうか。

有害と保護

塚本

福島県立博物館の塚本です。暑いせいもあって、考えがまとまっていないのですけど、印象に残った言葉が三つあります。焼却施設で、有害鳥獣に対して鹿は保護動物だからという言い方を職員の方がされていました。有害と保護という、その線は何なのだろう、人間の都合の線引きだとは思いますが、そういう言葉があることに、気持ちがどうも落ち着かないように感じました。

もう一つ、半杭さんのところでは、「原発のこととかも、色々あるけど、やっぱり命」と言っていたこと、石碑の供養塔のところで「これが50年、60年残る」とおっしゃっていたことが印象に残っています。「建物はそのうち朽ちてしまうかもしれない、息子さんが壊してしまうかもしれないけれども石碑は残る、何かを伝えるかもしれない」とおっしゃっていた。

石ですから残ります。「無念」という言葉も書き込まれて残る。けれど、物だけ残っていても、たぶん伝わらないことがあって、それを完全に伝えていくことはあり得ないことだと思います。物とともに、どうやって記憶というか、生で感じられたろう半杭さんの思いを伝える、感じることができるのか。ということを、博物館の持つ記憶していくという役割として考えさせられました。

紺野

今日は、陸前高田から3時間かけて車で飛んできました。ぎりぎりで駐車場を見つけました。駅前の、無人で1時間100円。なんとか間に合いました。ずっとバスで寝ていたのですけれども、とにかく、非常に生々しいお話だったので、どのように整理して考えたらいいのか。私も動物が大好きで、最近は年を取ったためか涙もろく、動物の死に関して子どものように感じるような年になっていますから、やはり、非常に痛々しい。

ほんの一部しか見ていない

一頭の牛が残ったという。それも確認しました、生きているのですかと。なぜかと思ったら、草を食べていた。ああ、なるほど、繋がれていなかったのだと納得した。どんどん質問をしてよかった。ともかく、今日、体験者から直接お聞きした。ほんの一部しか聞いていないと思うのです。それでも、これだけ衝撃があった。ですから、本当の状況は、おそらく到底我々には伝わっていない。

おそらく、我々はほんの一部しか見ていない。ジグソーパズルの何百枚ある中のほんの何個かを見せてもらって衝撃を受けた。ここで納得しちゃいけないと思います。ここですぐ結論を出しちゃいけないと思うのです。出るはずがないです。

そういう早まったことをやりたがります。もちろん仮説としてこのぐらいの議論はいいですけれども。あまりここではどうのこうのという大きなことは言いたくありません。生田さんの本を、ぜひ読んでみたいと思っています。私も色々と考えていたことと、おそらくたくさん重なるところがある。

今、公営団地に入りまして、仮設住宅で自由に育てていた猫たちは閉じ込められて牢屋状態です。非常にかわいそうです。猫たちは鳴いています、夜。外へ出せないものだから。本当に酷いなと思いながら、夜も寝られない状態です。なんらかのかたちで今日聞いた話を一つの参考にして、何百万あるジグソーパズルを埋めていきたい。これが一点です。

もう一つ、原子力に関して質問をしたら「いや、プラス、マイナスで、私としては判断しにくい」という単刀直入な話をされた。先ほど、福島の博物館の方にもお聞きしたのですけれども、特に福島は原発のあたりの社会は複雑な関係にある。あそこで就職している。津波の前は高校、専門学校を出たらそこの企業に入るのが一つの花形産業なので地元の人には非常に大事な工場だった。それが突然悪者になる。従業員もまだそこにいるという複雑な関係でどっち付かず、被害者、加害者が共存している複雑な関係にあることを聞いた。

似たようなことが起きています

今年の4月20日前後に2、3日、水俣に行きまして、そこの語り部の皆さんと交流したのです。私も陸前高田の語り部ですから、交流していまして。そこに行って非常に似たようなことが起きています。あそこは、チッソ工場が以前は塩田だった。塩で江戸時代以来成り立っていた町が、塩が専売特許になったものですから、全然お金が入らないのでチッソ工場に完全に依存するようになった。現在でも、50%がチッソ工場の税金で成り立っている町です。それで、いまだに花形産業です。ですから、数万人いると言われる水俣病の患者の中で、まだ3、000人ぐらいしか認定されていない。差別もまだ続いているらしいのです。

今日、原発の仕事に依存している地域は、やはり、加害者、被害者が共存して複雑なことになっているなということを思っているところです。本当に予想外に色々な点での体験をしました。主催者に大変感謝したいと思います。このように、積極的に色々な社会の問題点を浮き彫りにしたことを続けられることを、ぜひお願いして、これくらいにします。語り部なものですから。話が止まらなくなるので。お返しします。

一つ石碑があるだけで

村越

今日は、全体的に、残るもの、残すもの、残っていくもの、残したいけど残らないものということをすごく考えていました。僕は写真を撮っているから、残る、残す、残らないとか、常に考えています。

半杭牧場で石碑を残すという話に衝撃を受けた。ちゃんとした意志があれば、本当に伝えたいことかとか、断片だけでも残って、それがどこかで、歴史の一部とか伝説みたいに受け継がれていくのだろうなと感じました。あそこに一つ石碑があるだけで、ここでこういうことがあったということが、数百年残る可能性がある。そういうことって、すごく大事だとあらためて思った。命の大切さとかというよりも、その命が亡くなってからのことを考えました。まだ全然整理ができていないので、現段階で考えてい

るのはそういうことです。今日は、本当にありがとうございました。

小林

博物館の小林です。私は、半杭さんが「飼っていた牛たちを餓死させてしまった、それを背負っている」ということを何回かおっしゃっていたのが、すごく印象的でした。

背負わせられたすごく重いこと、牛舎を壊したら自分は死んでしまうかもしれないとまでおっしゃったこと。誰かを責めるわけではなく、ただ、伝えたいということはおっしゃった。私も、何かまだ頭がまとまらないです。

同時に、私も水俣のことを思い出していました。博物館の事業で、水俣の北の津奈木町で事業をさせていただいたことがあって、そこにチッソと闘って座り込みもしてきた漁師の緒方さんに来ていただきお話を聞いたことがありました。緒方さんは、途中から裁判に参加されることをやめて、本を出された。そのタイトルが「私もチッソである」という意味の言葉でした。トークイベントで、チッソも水俣が呼んだものであり、それで私たちは構成されていたということを受け入れないと、チッソを恨んでいるだけでは何も解決しないと話されていたのです。その上で、チッソの公害によって汚染されてしまった海、生き物に対して、どう弔っていくのか、供養していくのかというようなことをおっしゃっていました。

私は、原発事故の後、原発が制御ができなくて暴れている、泣いている赤ん坊のように見えてしまう時もあって、あの原発をどうしていくのだろうとずっと気になって、気になって、今もいます。

それも含めて選んだことを受け止めて、これからどうしていくかを考えていかないといけないと思っています。答えがすぐに出ないですけれども、現地を歩いて、人の話を聞いて、知ることの大切さを、今日も実感しました。みなさんと一緒にそれを感じさせてもらえたなと思っています。

福島のあちこちでこういうことが起きていて、私たちがおじゃまをしても話を聞かせてくれる方、見せてくれる方が、まだまだいると思うので、こうやってあるテーマを設け、色々な場所を訪れて学び続けることをこれからもしていきたいと思っています。

弦巻

県立博物館の弦巻です。自己紹介でもお伝えしましたが、自分は初任の時に大熊中学校で勤務していたので、自分も被災者となりました。しかし、当時のことを「どうだった」とか聞かれたり、状況を聞かれたりすると、正直あまり言いたくない、思い出したくないという思いがあります。正直、記憶もだんだん薄れているという現実もある。

生々しさを感じない

学芸員としてレプリカ作成に携わって、5、6回半杭さんの家にお伺いして話を聞いています。今日も半杭さんがおっしゃっていましたけれども、当時の牛舎の状況、辛さ、もどかしさなどを私と違って赤裸々に語ってくださっていた。ときには、涙を流しながら当時の状況、牛や豚への思いを話してくださった。

木村先生の先ほどのお話で、ハッと思ったのですけれども、5、6回牛舎を見ていても、やっぱり生々しさを感じないのは本当にそのとおりで、初めてあそこに入った時には、本当にスッキリした牛舎の状況でした。半杭さんの話を聞いて、なるほどと理解したところ、衝撃的なところはあるのですけれど、やはりどこか半杭さんが当時見た地獄絵図のような状況を理解するところまでは行っていないと感じました。

原発、放射線などではない、やはり子どものような牛たちの命を置き去りにして、申し訳ないという気持ちを、毎回行くたびに半杭さんはおっしゃっています。言葉ではもちろん命は大切だと分かっているけれど、当事者から命の大事さを聞き、その場所でしか分からないことを今回学んで、あらためて命について考えることができました。

何が正しい、正しくないと、答えがないものですけれども、今日の人たちが、他の方たちにも伝えていくことが大事なのかなと思いました。抽象的で申し訳ないです。以上です。

「より少なく傷付け合うこと」

松田

京都の松田です。現場に教えてもらえることの豊かさ、色々な意味がある豊かさ、それと重要さをあらためて感じた一日でした。

話を広げますと人には基本的に捕食動物がいないという、ある種地球史の中では、あるいはホモサピエンス史以降では、特異な生態系システムにいることを、あらためて考えました。

私たちの日常は、そういう意味で常に矛盾が連続しているという状況なのだろうと。それが、今の時間の流れだろうと思っていて、私は生田さんのご著書も、管さんによる新刊紹介の、確か最後のほうに、「より少なく傷付け合うこと」という一文があったように、それが頭に残っています。そこなのかな。矛盾の上で、例えば肉食は否定できないとか、何かを捕りながら人も生きていくということを考える。そこなのかなと思っていたのです。

今日見た、有害獣と言われてしまうものの処理施設、あるいは畜産業の運営もそうですけれども、あるシステムの綻びをいくら繕っても仕方がないように思えるところが、個人的にはあります。別の言い方をすると、何か泥水の上澄みの中を泳がされているような感じがすると言いますか。

また、あらためて目にしたのが、地方、地域のなりわい、生活が非常に巨大なシステムに完全に接続されて、震災後もなお動かされ続けているありよう。現場で、ショックを受けたりすることは色々あるし、そこで批判的に語られようとしていることもあるわけですけれど、そういう、噴出しているものの前提に何が繋がっているのか。それは、時間的には前、空間的、地理的には遠方に、できるだけ遠くに、遠くに疑問を投げ込み続けていかないと、見えてこないものがあると思います。

さっき想像力という言い方で木村さんがお話ししてくださったのですが、そこに投げていける力を持っていくことを考えたい。可能な限り、想像力を広げる力を持つということが、取りあえず今日の私の感想です。

結城

結城です。最初の焼却施設では、管さんがおっしゃっていたと思うのですけれども、とても配慮に満ちた対応で、私たちがうかがった時には、焼却後2時間で、きれいにと言いますか、焼かれたあとが見られる状態にして待っていてくださった。何と言うのでしょう、その配慮にちょっとびっくりしました。

対話を生むのはなかなか難しいな

半杭さんのところでは、私自身分からないと言う半杭さんご自身の見解に触れて、とても心が揺さぶられました。心というか、考え方が揺さぶられました。半杭さんは、何かを声高に主張しているわけではまったくなくて、でも、非常に強い思いを持っていらして、でもそれは、主張というか声高に権利を要求するとか、そういった主張ではまったくない。ですから今日の経験で、私は常に、何か原発の問題にせよ、類似の問題にせよ、対立が生まれるけれども対話を生むのはなかなか難しいなと思っていました。

私自身が非常に心を揺さぶられて、半杭さんの見解と言いますか、思っていらっしゃることを、私が分かるようになるにはどうすればいいのだろうと考えました。こういうプロセスが対話を作る時に、絶対に必要になるのだろうと思えた。何か声高に主張をするのではない、対話の素地を作る、そういう言葉のかたちを経験させていただいたように思いました。

これまで県博の方々が企画されてきたツアーに参加させていただいて、かなり私は揺さぶられ続けてきて、その後大学で、学生と共有したりしています。私のところで止めて、きちんと自分で消化することも重要でしょうけれども、私自身では気付かなかったこととか、ちょっとうまく言えないですが、学生と共有することに私は意味を見いだしております。

夏休みに入っちゃったので、今できないですけれど、いずれ今日のことを、学生と一緒に考えてみたいと思います。どうも、ありがとうございました。

奥山

奥山です。今日、2ヶ所見せていただきました。最初の焼却施設は本当に合理的と言いますか、システマチックに処理できるようになっていて、逆に、牧場は供養というかたちで、いまだに死と向き合い続けて、背負って生きている。同じ命というものに対する向き合い方が、こんなにも違うのかと感じました。

それと、予期せぬ事態が起きた時に必死で対応しようとする人と現場に行ってお話をすることで、まだまだ想像しきれない部分がたくさんあるとは思いました。こういう機会がないと日常生活では想像ができないので、このきっかけを大事にして、また色々考えていきたいと思います。今日は、ありがとうございました。

牛にも気持ちがある

伊藤

伊藤岳です。私は牧場で育ちましたという話をしましたが、生田さんの本も読んで、すごく動揺しました。今も動揺していて、自分の考えがはっきり分かっていません。私は牧場に育ちました。その牧場は理想の牧場を作ろうという試みでした。その理想とは何かというと、人の生活との一体化もあるのですけれど、効率です。効率がいい経済動物、搾乳システムとして牛から乳をいっぱい採り、どうやって餌の配合とか色々なことを効率的にやろうかというのが理想の牧場だったのです。それは、色々あって失敗したのですけれど、父はその経験をもって引退するまでコンサルタントとかを最後までやった。その時に父が、研究というか積極的に導入していたのは、牛をリラックスさせて気持ち良くすることで乳をいっぱい採る。そこをやっていたわけです。ということで、牛にも気持ちがあるということは間違いなく分かる。

そこはすごく大きな牧場で、そこにいたのは私の兄弟の他には一人ぐらいしかいない。半径1㎞に子どもは我々兄弟しかいないみたいなところでした。そこで経済動物としての牛と共にあるみたいなことに納得していたわけです。

木村さんの小説、生田さんの本を読むと、経済のサーキュレーションの中の牛の死が当然あるわけです。その死、今日の安楽死、殺処分、餓死、そういうところに当然死が付きまとってくる。そこの折り合いをどうしていったらいいのか分からない。

私の父は、ぼけてきちゃっているのですけれど、仕事を終える頃からブログを書いていました。それを、最近読むことがあって、牛をリラックスさせるのは経済動物としての利益のためだみたいな表現があった。父は、牛を愛していたし、朝5時から乳搾りをして、牛に対する愛を語っていたのですけれども、その経済動物というところに、ものすごく揺さぶられ

動物と震災

day 2 スタディツアー

てしまった。僕はそこをどう消化したらいいのか分からないまま今日来ました。

半杭さんは、経済動物についてはどうなのかという木村さんのお話しにお答えはなかったですけど、彼が言った中で一番印象的だったのは、「原発システムについては否定も肯定もできない」とおっしゃっていた。要は、肯定しているわけです。油断したことで、破綻したシステムであるから、油断がなければオーケーだったと。

ちょっとした油断で崩れてしまうシステムは、最初から存在してはいけない。これだけの被害と油断とは対にはならない。A級戦犯だけ悪者にして他はオーケーみたいな。東電は悪者だけど政治のシステムはオーケー。そこには補助金制度とか、「半農半エネルギーにすれば補助金が出る」、そういうシステムがある。支持しなければいけないという同調圧力みたいなのがすごくあって、彼は納得しているというか、自分を納得させているみたいなことだと思いました。それについて、私は理解できるというわけではない。

管さんが企業の支配するシステムとおっしゃっていました。原発の汚水のタンクは鉄で作られていて、そのタンクの需要は無限に出てくる。汚染土を運ぶためにはトラックや重機が入る。その重機を運ぶために鉄板を敷く。その鉄板も、普通は再利用するけれど、原発に行ったら再利用できないですから無限に要る。また需要が来たらラッキーなんていうところで働いている。そこから給料をもらっているので、色々言えないのです。僕の働いているところでは、なんの迷いもない。東京で働いている人だけではなくて、ゼネコンに連なる人、農協とかもそうだと思いますけれど。全部、なんの迷いもない。

分断があるのは すごく寂しい

管さん、木村さんにお話を聞くと、私は動揺しっぱなしです。ここで話されたようなことは、僕が毎日いるところでは、まったく話されていない。僕はちょっとしますけど「うざい」と思われる。分断があるのはすごく寂しいと思う。何が正しいとかではないですけど、もっとこういう話が我々のいる企業社会にも伝わらないといけないとすごく思う。動揺しっぱなしの一日でした。動揺しに来たいので、また教えてください。ありがとうございます。

鋤柄

埼玉から来ています鋤柄です。今日感じたことがいくつかありました。半杭さんは、震災でパニックになった状態でも冷静に判断して、自分の行動について論理的に語っていたので、すごく強い方だなと思った。周りの環境に対しても、もちろん文句はあったと思うのですけど、そこを抑えて前に向いている姿がすごく印象的でした。

この世の中は矛盾がたくさんあると思う。環境のため、世の中の貧しい人のためにやったことが、結果的にその人たちを苦しめることもある。そういうことを冷静に考えながら、世の中をもう少しじっくり自分の中で、色々な人と会いながら探していきたいと思います。ありがとうございました。

猪瀬

県博の猪瀬です。原発事故は大きな出来事で、色々な人が大きな影響を受けているというのを今日感じました。一瞬の大きな出来事によって、今も人とか動物が少しずつ苦しんでいて、それは全体としては大きなものなのだと思います。

『NHKスペシャル』の再放送で、昆虫が100年後には、今生きている量の1%未満しかいなくなると言っていました。ここにいる人たちは小さい頃に、カブトムシとかクワガタとかを普通に見たと思うのですが、それが100匹いたとしたら1匹もいなくなるような世の中になる。地球温暖化、農薬、そういう理由で動物たちを苦しめているという話しを『NHKスペシャル』でやっていました。それは一気に一瞬で1%未満になるのではなく、1年間に確か2.5%ずつでしたか、世界中で少なくなっているので、残念ながら僕らは気付かないのです。

原発事故という、ある意味見えやすくなっている状況の苦しみを通して、もっと想像力を働かせて、そういう見えにくい、苦しめているものたちにも想像力を働かせる力になっていけたらいいと、今日は感じました。ありがとうございました。

そういうことを 意識しないまま

阿部

福島市から来ました阿部です。関係者でなければなかなか行けない施設に行くことができて、そういう機会に恵まれてありがたいと思っています。

最初の有害鳥獣施設で、まず印象的だったのは、4月から6月ぐらいまでの間に250頭ぐらいの動物を処理して、秋から春にかけてはその何倍かぐらいのニーズ、焼却量が求められてきますという説明。運び込まれる動物の死体処理というか焼却を、こういう人里離れた施設でやっていることを、じかに見て、理屈では分かっていましたが、かなりリアルだなと思いました。ごみ、し尿、あるいはサーモいっぱいの処理施設、人知れずある、私たちの生活の可視外の部分、目に見えないところで日夜、こういう施設が営まれていて、都市生活が成り立っている。そしてまた自分はそういうことを意識しないまま、日々快適な都市生活を過ごせているということを、あらためて皮膚感覚で読み取れたと思います。

自分は映画を仕事にしていて、こういう社会的なドキュメンタリー映画を何本か見てきました。自分に欠けているものはフィールドワークで、そこにある温度、あるいは匂いみたいなものが、今回のスタディツアーで皮膚体験できたらいいなと思って来ました。

冷凍庫のドアが開けられた瞬間にかぎとれた臭いというのは、零下17度で滅菌された、あそこですらあれだけの臭いが出るのですから、日常ああいった仕事に従事されている方の大変さはどれほどのものなのかなと、あらためて思いました。

半杭牧場の主人の6月にあそこの牛舎を開けたときの話。かつて自分が見た映画「犬と猫と人間と」で、まさに南相馬の牧場のそういった地獄絵図のような場面を映像にして見せていた。あれを見ただけでも、トラウマになっちゃうような光景です。今日のご主人のお話と、あの映画の中の光景が重なってしまって。もしそこに自分がいたら、たぶん耐えられないだろうなと思いました。

そういう想像もできないような過酷な経験をしていながら、なおかつあの方は、やっぱりイエスともノーとも言えない、原発に対してはというふうに言ってしまう。そこら辺で僕がすごく印象に残ったのは、彼は70年生きてきて、「自分には安全・安心神話が染みついている」というようにおっしゃっていたこと。つくづく教育というのは大事だなと感じました。今日は予想以上に有意義な体験をさせていただきました。本当にありがとうございました。

岡部

はじまりの美術館の岡部です。今日は貴重な体験をありがとうございます。考えの切り口というか、思考の糸口というか、色々なことを考えさせられました。どう自分で消化していくかが宿題としてある。考えを巡らせていくと、行き着くのは人間とか自分というところ。

牛舎に繋がれている自分。牛を置き去りにしている自分。殺処分の指示を出している自分。焼かれている自分。自分がいっぱいいて、どうしてこうなってしまったのだろうと、ずっとぐるぐる巡っている。それが実体験できたことが強く残っています。そして次の思考を起こさせていく端緒になっているかな。最初に筑波さんが、何か答えを出すツアーではない、色々な考え方があると言っていただいて、ほっとしてツアーをスタートできました。

小林めぐみさんがおっしゃったことと近いかもしれないですけれど、半杭さんのところでお聞きした原発は油断があったという話、それを自分はおかしいとだけは思えなかった。間違いなく、システムとしてはおかしい、実際そういうことがないようにしていくことが、大事だというふうには思うのですけれど。

石碑に込めた半杭さんの思いは、自分の罪悪感を表にまず出すというか、やってしまったことも認めるということ、自分に引き受けるというようなことだったかなと思うと、起こってしまった原発事故も、自分に引き受けてというか、原発を稼働している自分がそこにいて、油断をしてしまった自分がそこにいたということもあったのかなと思います。

自分の命というか、生きていることとの想像力

今度は、そこからどんなふうに自分たちはしていったらいいのかを考えることが大事。松田さんがおっしゃった、「巨大なシステムに接続されて、ずっと自分たちは動かされ続けている」という言葉がすごく印象的でした。そこが想像力をどんどん失わせているし、何か自分の命というか、生きていることの想像力がどんどん欠けていっていると漠然と思います。今後、そういったモヤモヤをどう共有していったらいいのかを考えながら帰路に着いた今でした。ありがとうございました。

大政

はじまりの美術館の大政です。広報で使われていたビジュアルの赤いイメージで先入観的に死の印象を持って参加したのですけど、それに対しては、どちらもきれいな施設で、焼却施設は4月にできたばかりできれいな火葬場みたいな状態、牧場は半杭さんが本当に丁寧に掃除をされていて、色々な思いを抱えながら残して保っている空間としてはきれいな牧場だな、いい牧場だなと思いました。

繋げていくこと

印象的だったのは石碑。一言「無念」という言葉がどんとあって。震災後、色々な石碑やモニュメントができたとうかがっていて、自分はそんなに詳しくはないですけど、未来への希望でも警鐘でもなく、ストレートに無念な気持ちをそこに残していく。あの石は牧場がなくなっても50年、100年残るかもしれないけど、あれだけでは次に伝えられていかないのではないかと思っていて、残していきつつ、繋げていくことを色々なかたちでやっていかないといけないと思います。

残すというのは当事者の使命、当事者ができることの一つ。繋げていくのは、みなさん、どんな人でもできる一つのことだと思いました。例えば、物語になったり、歌になったり、都市伝説になったり、かたちは少しずつ変わっていくかもしれないけれど、起きたこと、あったことが色々なかたちで繋がっていくといいなと思いながら一日過ごしました。

直接話をうかがい、その場所に行くということ

佐藤

佐藤です。最後です。すごく暑い一日でした。半杭さんの話を、本当に暑くて頭がぼうっとしながら聞いていました。8年前も確実に、こんなに暑くはなかったかもしれないですけど暑い夏があって、そこに牛が横たわっていた。もうちょっとすると発見される。8月に外に出した

動物と震災

のでしたか。それをすごく想像しました。

ああして何もなくなっていたとしても、8年前に確かにあったことが、半杭さんに会って話をうかがっているとすごく近く感じた。何かそうやってあの時の時間みたいなものを想像することができる。直接話をうかがい、その場所に行くということがすごく大事なのだと確認した気がします。

今も続いている処理されていく死であり、あの時あったことを弔い続けていくことと向き合った。自分の日常との地続きにこれがあると分かった上で、どう自分の日常の中でこの感覚というか実感を他の人、身近な人と共有していくのかは、考えなきゃいけないことなのだとあらためて実感しました。

そこに行ってしまえばすごくそれを感じられるのですけど、離れた場所でどういうふうにそれを共有していくかを考えるのが大事なのかな。

県立博物館で噛んでいた柱のレプリカを取ったのですけど、逆にあそこの場所に行かないで、レプリカでどういうふうに、会津であれを共有していく場を作るのか。質問みたいになっちゃったのですけど、そう思いました。今日はどうもありがとうございました。

生田

生田です。震災当時に宮城県に何度もボランティアに行ったのですが、福島県には来ていなくて、原発の問題はまったく触れていなかったので、それはずっと心残りでした。今回、ある程度現場に来て、触れることができてとても良かったです。

感動している場合かな

半杭さんの牧場については、みなさんも言われるように、あの人は、色々なものを背負って、傷を負ってそれをしゃべられたので、我々も非常に複雑な思いを感じました。

印象的なエピソードに、最後に子牛が生まれて生き残っていたという話がありました。あれを聞いて感動しそうになったのですが、でも感動している場合かなという思いもあった。まず牧場で牛を繋いだまま置き去りにせざるを得なかったという話を聞いて、映画の『南極物語』を思い出しました。南極に行って、南極越冬隊のメンバーが、「犬を置き去りにしないとやっていけない」という人間の勝手な都合で、餌も置かずに首輪を付けたまま犬を置いていっちゃった。一年後かに帰ってきたら、タロとジロが生き残っていた。それが映画にされて、すごい感動ものにされた。

いやいや、それは人間の都合で見捨てて、たまたま生き残っただけじゃんという話だと思うんです。しかもあの映画が作られた1985年頃って、日本全体で100万匹の犬や猫を殺処分していたんです。映画を見ながら感動した人の中には、自分の犬や猫を捨てて殺処分させた人もいるかもしれない。

今日の話に引きつけて言うと、半杭さんの牧場で子牛が生き残ったけど、でもわれわれ自身が例えば家畜とかペットとか、動物に対して構造的な暴力を行っている人間だとしたら、感動している場合かなと考えました。むしろ、自分と動物との関係をあらためて考え直す一つのきっかけであるべきじゃないかということを考えたりしました。

赤間

赤間です。赤いビジュアルのデザイン、僕です。実際行ってみたらあっけらかんとしていて、次に機会があったらちょっと考えて作らないといけないなと思いました。

昔、友だちの猫と鳥を預かったことがあって。猫は大丈夫だったですけど、鳥の方が餌をやったつもりで、もみ殻みたいなのが残っているから大丈夫と思っていたら、ある日、会社から帰ってきたら死んでいて、すごくショックを受けました。半杭さんはそれと比較すると、よくちゃんとしていられるなと驚きました。

県博の仕事と関わるようになってから、浜通りとか飯舘村には数え切れないほど行っていて自分は鈍感になっているようなところがあった。今日、動物の死の臭いをかいだときに、ちょっと新鮮な気持ちになった。明日明後日は、浪江小学校の本校、もうちょっと山手の中にある津島小学校の本校、両方とも子どもたちはいなくて空っぽですけど、そこの撮影に行きます。その場に行って、自分はどのように感じられるか、今日は死の臭いをかいだことと、すごく暑かったことで、自分の刺激になっていればいいなと思います。どうもありがとうございました。

管

間もなく駅に着くことになりました。本当にありがとうございました。動物に対する構造的な暴力といったら、そもそも乳牛があのようなかたちで飼われているということから始まっている。もちろん肉牛は肉牛で、そのように飼育されている。考えることをやめたらいけないということを再確認して今日の大きな成果としたいと思います。

半杭さんの思いが伝われば

筑波

みなさん、ありがとうございました。考えるってすごく大切。時にジレンマを感じながら、自分事化していくことで、腑に落ちる考えを自分自身で見つけていくことが大切と思っています。

話しが変わるかもしれませんけど、私は防災教育に関心を持って取り組んでいます。震災の教訓を伝えていくには教育なのかなと思っています。子どもが大人になって、大人がその自分の子どもたちに伝えていく、文化になるぐらいになっていけばいいと思っています。そういったところで、博物館の手法もいくつかあるかなと考えています。佐藤さんから、どうやってレプリカを使っていくのかとありました。どうするといいのでしょうね。

でも、あれを通して、あれがきっかけとなって、語り継がれていくのだろうなと思っています。残念ながら半杭さんだって、もう70歳と言われていました。実はあれ2本作ってあります。大事に使って、しっかりと半杭さんの思いが伝われればいいですね。伝えるようなものにしていかなければいけないと思っています。また、ご参加のみなさんから叱咤激励をいただき、より良いものにしていきたいと思います。

来年の2月から始まる特集展では、半杭さんにも必ず博物館に来ていただいて、ギャラリートークをしたいと思っています。ご都合がつくみなさんにまたあらためて集まっていただいて、その時に、今日お持ち帰りいただく宿題の回答までいかないかもしれないけど、今日の思いをまた共有できればと思っています。本日は暑い中、本当にありがとうございました。

管

筑波さん、ありがとうございました。筑波さんはじめ、博物館のみなさんに心から感謝したいと思います。そして運転手さんも、今日はごくろうさまでした。拍手をお願いいたします。

1日目：オープンディスカッション

今、災害が多い中、人と人とのつながりが問われる中、日常の生活でささやかな幸せに感謝しなければと思いました。パンフレットの文章の内容を読み涙しました。（福島市、66歳）

震災時の動物について、あまり報道などで知ることが少なかったし、今まであまり考えることはなかったのですが、今回お話を聞いて改めて考える機会となりました。深く考えなければならない問題ですが、難しい問題だと思いました。私の子どもも障がいがあり、災害弱者となりうる立場であり、今回の動物についてのお話と共通するものがあると感じました。（福島市、41歳）

震災や家がないなどの究極の状態になったときに、「いのち」や「生きる」という本質に触れることができる。むしろそうならなければ触れられない自分がいると思った。日頃から向き合ってゆけるように気にしたいと今日のお話で強く思った。
“役に立つ” ということについて「いのち」はあるだけでいいと感じる。人間として生きながら、私も動物的にいきたいと思うことがあるが、動物的に生きれば社会性がなくなるし、社会的に生きていこうと思えば動物的に生きられないと憤りを感じることがある。そんなこと考えないで、「いのち」が「ある」という事実だけではダメなのかなと考える。（福島市、30歳）

正直な印象として、一時間半では収まりきらない大きなテーマだと思いました。個人的には福島市という場所でこのタイミング（時期）に生田氏と木村氏のお話を伺えて大変幸運でした。どうもありがとうございました。（東京都、51歳）

動物と震災

2日目：スタディツアー

処理施設にしても半杭牧場にしても当事者の（思いの）割り切れなさが伝わる視察だった。その割り切れなさは事柄の複雑さを反映していると思う。それに実感をもって気付くことのできたスタディツアーで感謝しています。（石川県、50歳）

関係者でなければ訪れる機会にめぐまれない有害鳥獣焼却施設を見学できてよかったです。4〜6月で猪など250頭の動物を処理したとのこと。秋から春は何倍もの個体処理数になるそうだ。こうした処理施設はゴミ、産廃、し尿など全てにいえることだが、私たちの生活圏の可視圏外で人知れず日夜稼動している。意識の外に遠ざけられていることすら自覚しないまま、日々過ごしていることの危うさを再認識させられた見学だったと思います。（福島市、56歳）

震災後に（今も続く）動物と死について考える機会になった。一方は処理場として淡々と稼動し、もう一方では「無念」の石碑で弔っている。どちらが良いということではなく、これが現状なのだと直接訪れることで実感した。（神奈川県、37歳）

今回のような機会がないとなかなか伺うことができない二つの場所に訪問させていただく機会をありがとうございます。センターは新しくできた火葬場のような、でも「死」や「生」をあまり感じさせない。

牧場はそんなことがあったとは思えないけれど半杭さんの無念と牛たちへの愛が残る空間で。空間自体は自分は美しい場所だと感じました。レプリカや碑として残してそれをどのように伝えていくか考えさせられました。

昨日生田さんが「数を数え始めたことから間違えたのかもしれない」という趣旨のお話をされたことが印象に残っており、今日もそのことを考えながら巡っておりました。（猪苗代町、27歳）

普段聞くことのできない現場の人のお話や、個人では行くことのできない場所に行けたのが貴重な経験になりました。予期せぬ事態が起きたとき、命とどう向き合い、どのように行動するのか？自分だったらどうするのかな？想像してもしたりない。頭がいっぱいでまとまりません。（福島市、37歳）

「動物」というテーマで震災と命を考える。学ぶ。ということでの二日間でしたが、さまざまな話の切り口と、考え方の糸口がある中、頭を巡らせていくと行きつくのは、人間そして自分ということでした。牛舎でつながれている自分、焼却炉で焼かれている自分、牛を置き去りにする自分、殺処分の指示を出す自分、すべて自分でした。さまざまな現象の中で、常に判断していかなければならない生の中で、何を手がかりに何をスタンスとしていくか、その意識を作っていくか、というのがいつの時代もいかなる場面でも自分たちの社会を作る上で最も大切なのではないか、と考えた二日間でした。（郡山市、45歳）

寄稿

動物と震災

南相馬への小さな大きな旅

詩人／明治大学教授　管啓次郎

人はいつも地上の一点にいて、別々の場所に同時にいることはできません。また人の意識はつねに周囲のあらゆるものから影響をうけていて、場所を移動するだけで気分も考えていることの内容も変わります。何かを考えようとするとき、考えが堂々巡りに迷いこんだなら、もっとも確実にそこから連れだしてくれるのは場所を変えることでしょう。人の無知には限りがないので、小さな新しい事実を知っただけで、物事の見え方はがらりと変わります。旅をすれば誰でも、いやでも学ぶことになる。あるいは体はおなじところに留まっていようとも、その場で何かを学べば、そのまま旅がはじまっている。そして旅は別の旅を呼びこみ、体と考えを別の場所に誘いだします。場所から場所へと移動するとき、私たちは地形と気象の変化を継起的に経験しますが、その変化に気づくことが、すでに新しい思考を刺激しているのです。

２０１９年の夏、南相馬へのスタディツアーに参加しました。主題は「動物と震災」。震災がヒト以外の動物たちの命をどう左右したかを、小さな旅をつうじて考えてみることへの誘いでした。ぼくにはずっと以前から、気にかかっていることがありました。人間世界の暗い秘密といってもいい、ほとんどの人間がそれに目をつぶることでようやく心の平静を保っているような日々の事実。動物たちに対する恐るべき残虐、動物の命に対する途方もない負債がそれです。ヒトはあらゆるかたちで動物を利用してきました。肉として、毛皮や骨として、卵や乳として、労働力として。ペットの役割を押しつけたり、ヒトの身代わりとして種々の実験を強いたりもします。その過程で、驚異的な数の動物たちを、来る日も来る日も殺してきました。市場社会が完成した先進国では、その殺しの現場を巧妙に隠し、消費者たちを商取引により免罪しながら。

動物の命。私たちはそれが何であるのかを、真剣に考えたことがあったでしょうか。このツアーの主催者は「ライフミュージアムネットワーク」。命／博物館／網目が、むすびついた名前です。ふつうありえない並びの名前自体が、強いメッセージを発しています。福島駅から南相馬に着いて、海岸部に新設されたばかりの野生動物焼却場を見学したあと、半杭牧場を見せてもらいました。四十頭の乳牛を飼っていた酪農家ですが、原発事故後、牛たちを置去りにして避難せざるをえませんでした。きれいに片付けられた明るい元牛舎に入れてもらい、強い衝撃をうけたのが、つながれていた個々の牛の首が届く範囲内にある木製の柱でした。食べるもののない牛たちは、必死に首を伸ばし木を齧ったのです。齧られた部分だけが極端に細くなり、流木を思わせる不思議なかたちになっています。牛たちの飢えの痕跡が、無音で悲鳴を上げているようでした。

牧場主・半杭一成さんの体験談をうかがいました。避難するとき、牛を放ってゆけば、牛たちには生存のチャンスがあった。けれども牛たちが他の牧場に入ってゆくと迷惑がかかるという気持ちから、それはできませんでした。つながれたままの牛たちが餓死していることはわかっていました。七月になって牛舎を初めて開けたとき、そこは暗闇でした。空間をびっしりみたすほどの蠅がいたのです。牛たちの死体は蛆の海に浸っていました。お隣の牧場でも乳牛はぜんぶ死に、死体は豚に食い荒らされていました。ところが中に一頭だけ明らかに他よりは新しい死体があり、驚いたことに、そのそばにぽつんと、一匹の生きた子牛がいました。飢餓状態のまま出産した牝牛がいたのです。子牛はつながれていたわけではないので、衰弱した母のお乳を吸い、自分で歩いて外にもゆき、命をつないできたのだと思われます。なんという生涯でしょう。あたりをみたす死の中で、ぽつんと生まれ生き延びてきた、恐るべき孤独の子。なんとも強烈なイメージですが、このイメージによって、この場所をぼくは覚えてゆくことになるでしょう。

われわれにとって直接の体験は限られています。「自分」という枠を超えて、ふだんは視野に入らない、けれどもいろいろなかたちで私とつながっている物事をよく想像するためには、言葉とイメージをよく吟味しながら受けとめてゆく以外にはありません。小さな旅は、大きな手がかりにもなりえます。震災後改めて明らかに見えるようになってきた、動物の命をめぐる問いは、なぜ重要なのか。それはわれわれの社会がすでに、ヒトと動物との関係を全面的に考え直さなければ、やっていけない段階に達しているからです。動物の命を考え、そのむこうに広大にひろがる植物や菌類の命を考え、地球生態系の中での人間の位置を深刻に反省する必要があります。総体としてのヒトのグローバル社会は、まるごとの生命そのものを、侮蔑し、敵対しています。そのむこうに出てゆくための道を、そろそろ私たちは真剣に探さなくてはならないでしょう。

寄稿

動物と震災

断絶をのぞく

小説家／愛猫家　木村友祐

どうにも、しこりが残るのだった。それではいけない、この方がくぐり抜けた苦しみに寄り添わなければならないと思うのに、心の底には寄り添いきれない一線が残って、話に聴き入ることができずにいた。

福島第一原子力発電所の爆発により、飼養していた乳牛を置き去りにして避難せざるをえなかった、南相馬市小高区の酪農家のお話。酪農当事者からはじめて聴いた、避難時の状況と心情を伝える貴重なお話だった。避難を決めたとき、牛たちに餌を与えなかったのは、餌を与えれば乳房に乳をためこんで苦しんでしまう、だからあげなかったという話にも納得できた。〝家族同然〟の牛たちを見殺しにした罪の意識も吐露していた。その悔いが今も突き刺さっているからこそ、その人はこうしてわざわざ自分の体験を話しているのだった。

それでも、どこかでうっすらと構えている自分がいた。その人が避難先から一時帰宅して、姪の結婚式に着ていく礼服を取りに自宅にもどって来たときに、置き去りにした牛たちに合わせる顔がないから牛舎を見ずに逃げるように帰った、と正直に話されたとき、状況はわかりつつも、心がすうっと離れる感じがした。

なぜなのか。理由はわかっている。隣りの浪江町で、原発事故があっても牛を見捨てずに餌やりを続け、今でも被曝したために売り物にならない牛たちを捨て身で面倒をみている人を知っているからだ。ぼくはその牧場を取材し、小説を書いていた。――ただ、そこで飼育していたのは肉牛で、電気がなければ搾乳も集乳もままならない乳牛を飼育するのとはまったく事情が異なるということを、このとき（酪農家のお話を聴いているとき）ぼくは知らなかった。

その人を囲む人の輪からはずれ、牛舎につながれた牛たちが、飢えと渇きの苦しさで噛んだ跡だという柱の激しいへこみをぼんやり眺めた。ぼくは、そういう柱があることをネットの記事か何かで見て「知っていた」。はじめてそれを知ったときは、牛たちの壮絶な苦しみが体に入りこんだような衝撃と痛ましさをおぼえていた。

だけど、今まさにその現場にいて、当時のような感情が湧かない自分に困惑する。息絶えた牛たちは、大量のウジに食われ、腐乱して溶け、最後は骨と皮だけになって床に転がっていたはずだった。その痕跡がきれいに消し去られているからそうなのか。かがんで、そのへこみに目を近づける。牛の歯で何度も強くしごかれたために、木の柱のへこみはささくれだっていた。かすかに、牛たちの切迫感が体のなかをよぎった気がした。

断絶があるのだった。この牛舎を壊されたら狂ってしまうかもしれないというその人の抱えた悲痛と、つながれたまま放置され、飢えて乾いていく牛たちの絶望的な狂おしさ。それらとぼくとの間には断絶があった。福島のことなど忘れたようにオリンピックモードに入っている東京からやって来て、牛を見捨てた罪を深く自覚しているその人をジャッジし、牛たちの悲惨は「知っている」と簡単に頭でとらえるぼくと彼らとは、分厚い何かで隔てられていた。彼らの生々しい思いが届くことを遮る分厚い何かで。

それは、震災と原発事故から8年という時間のせいかもしれず、ぼくの頑な政治的正しさのせいかもしれなかった。あるいは、放射性物質によって人生設計を狂わせられることもなかった者の鈍感さのせいかもしれなかった。それとも、家畜で生計を立てる者に対する無意識の差別心……？　最悪だ。現場にいて、当事者の話を聴いても心が動かないなら、何もわかるわけがないじゃないか。

逆にいえば、こんな無情なぼくを前にしたその人にしても、自分の胸の奥のほんとうのところはわかってはもらえないのだという断絶を抱えているのかもしれなかった。双方で断絶を抱えているとするなら、どうすれば対話や心の通い合いは成り立つのだろう。

そこでふと気づくのは、もしかしたら現在福島で暮らしている人たちも、県外の人々に対し「ほんとうのところはわかってはもらえない」という無念を胸の底に抱きながら、何も言わずに暮らしているのではないかということだ。

5年前に取材のための宿泊で訪れて以来、なかなか再訪できなかった南相馬市方面。その地を久しぶりに訪れることになった今回のスタディツアーは、現地に対する理解を得るよりもむしろ、その深々とした溝をのぞきこむ経験となってしまった。

けれど、これもまた、行かなければわからなかったことだ。そして、その隔たりの身も蓋もなさに戸惑うことこそ、少しでも歩み寄るための、すべてのはじまりなのかもしれない。

成果報告展　京都・ICOM

ライフミュージアムネットワーク2019

動物と震災

ICOMKYOTO2019（第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019）での成果報告展は、世界中の博物館関係者が集い、これからの博物館の課題に取り組むセッションやディスカッションが多数行われる会場の一画で行いました。オープンディスカッション・スタディツアー「動物と震災」の活動内容を中心に、東日本大震災後の福島の現状と課題の発信を試みました。オープンディスカッション・スタディツアー「動物と震災」のシンボルであった餓死した牛が噛んだ牛舎の柱のレプリカ（製作・所蔵：福島県立博物館）もあわせて展示。原発事故により家族同然の動物たちを置き去りにせざるを得なかった牛舎所有者の祈りにも近い思いが、見る人に通じたように思います。

出展者は博物館運営に関わる業者が多く、ライフミュージアムネットワークの活動と成果は、少々伝わり難い展示であったかもしれません。しかしICOMという世界大会の場にミュージアム等による共同体として出展し、取り組みを紹介できたことは大きな成果となりました。

国際的に大きな取り組み（ビジョン）を議論し、小さなコミュニティで対話を深め、世界の動向を知る現場に参加できたことは大変有意義でした。また、博物館を地域に開いていきたいと考える関係者にも出会え、今後の活動の礎とすることもできました。

参加者の声

ものがあることで、実際に起きていたことをより強く想像できる。こういった事実を伝えることは大切。

スタディツアーは常時行っているのか。子どもたちの受け入れをするべき。

訴える力のある展示ですね。既存の博物館にはあまりない取り組みであり、取材に行きたい。この資料を持ってきてくれてありがとうと言いたい。

心に残るメッセージを持ったレプリカですね。忘れないだけでなく、いろいろなことを考え始めるレプリカですね。

この柱につながれた牛の姿が見えてくるようで、当時のことをどうしても考えてしまうレプリカですね。

普通に暮らしていると気が付かないことに気づかせてくれました。

多様なネットワークの取組であり、これからにも期待したい。補助金頼みの活動ではなく、持続可能な取り組みになればいいですね。